埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第337集

深谷市

森脇遺跡

県道中瀬普済寺線（深谷市地内）埋蔵文化財発掘調査（整理）委託報告

2007

埼　玉　県

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は田園の魅力と都市の魅力の両面に恵まれ、700万を超える県民が暮らし、平均年齢が全国で4番目に若い、活力にみちた県であります。

このたび埼玉県では、「ゆとりとチャンスの埼玉プラン」を策定しました。この計画に基づき、「いつでも、どこでも、誰でも、何度でも」挑戦できる社会を目指して、「安心・安全」をすべての基本とした「ゆとり」と「チャンス」にあふれる埼玉づくりを進めていきます。これに併せて計画期間中に実施する戦略的な取組として「埼玉安心戦略」を掲げました。

そのうちの一つに、人々が活発に交流できる交通環境の整備を目指す「地域の魅力創造戦略」があります。どこでも楽々行ける渋滞のない円滑な自動車交通の実現のため、また県内のどの地域にも予定した時間通りに移動でき、人々の豊かな交流や活発な経済活動を支える道路網を整備する具体的な取り組みの一つとして、各種県道の整備が行われております。深谷市地内の県道中瀬普済寺線は、そうした県道整備事業の中で計画され、建設されたものであります。

この県道中瀬普済寺線予定地周辺には、先人たちの歴史を今に伝える遺跡が多数あり、そのいくつかは発掘調査され、貴重な成果があがっております。

また、県道建設予定地は、近代日本の経済発展に多大な貢献をした渋沢栄一翁を生んだ血洗島とは指呼の間にあります。

森脇遺跡は、県道中瀬普済寺線の道路用地内に所在し、その取り扱いについて、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、当事業団が実施しました。

調査の結果、平安時代の住居跡、中世の井戸跡や溝跡、さらに土坑などが発見され、平安時代のロクロ土師器や須恵器、石製品・鉄製品をはじめとして、中・近世の陶磁器類などの貴重な遺物が出土しました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護・普及ならびに啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、深谷市教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　福田陽充

例言

1．本書は、埼玉県深谷市大字矢島1003－1番地ほかに所在する森脇遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と、代表地番及び発掘調査に対する指示通知は以下のとおりである。

森脇遺跡（MRWK）

平成15年4月23日付け教文第3－33号

3．発掘調査は、県道中瀬普済寺線建設事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、埼玉県土木部道路街路課（当時）の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．発掘調査事業は、Ⅰ－3の組織により実施した。

5．調査は、栗岡　潤、宅間清公が担当し、平成15年4月8日から平成14年7月18日まで実施した。

6．整理・報告書作成事業は、鈴木孝之が担当し、平成19年1月4日から平成19年3月23日まで実施した。

7．遺跡の基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。

8．遺跡の空中写真は、株式会社東京航業研究所に委託した。

9．発掘調査時の写真撮影は栗岡、宅間が行い、遺物の写真撮影は大屋道則が行った。

10．出土遺物の整理、および図版の作成は鈴木が行った。

11．本書の執筆は、Ⅰ－1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が行い、その他は鈴木が行った。

12．本書の編集は、鈴木が行った。

13．本書に掲載した資料は、平成19年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

14．本書の作成にあたり、深谷市教育委員会のご協力をいただいた。

凡 例

1．本書におけるX・Yの数値は、2000年以前の日本測地系（旧測地系）による平面直角座標第IX系(原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″)に基づく座標値（m）を示し、各挿図内における方位は全て座標北を示している。

D-9グリッドにおける日本測地系（旧測地系）での座標値と、北緯・東経値は、

X＝24250.0m

Y＝－51680.0m

北緯36°13′01″95401

東経139°15′30″42027である。

同グリッドにおける世界測地系（新測地系）での座標値と、北緯・東経値は、

X＝24605.4305m　　Y＝－51972.9011m

北緯36°13′13″34687

東経139°15′18″85575である。

全体図に記した座標値は、調査時に用いた日本測地系による座標値である。抄録に記した北緯・東経の数値は、世界測地系によるものである。

2．遺跡におけるグリッドは、前記の座標系に基づいて設置し、10m×10mを基本グリッドとしている。

3．グリッドの名称は北西杭を基準とし、東西方向は西から東へアルファベット（大文字）を付し、南北方向は北から南へアラビア数字で番号を付した。

4．本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は、以下のとおりである。

SJ	住居跡	SB	掘立柱建物跡
SK	土坑	SE	井戸跡
SD	溝跡	SX	竪穴状遺構
P	ピット		

5．挿図の縮尺は、各図版中に示した。

【遺構図】

全体図・・・・・1／200

住居跡・土壙・井戸跡・SX・・1／60

溝跡・・・平面：1／100　断面：1／60

ピット・・平面：1／200　断面：1／60

【遺物】

土器・石器品・・・・・・1／4

ミニチュア土器・土錘・・1／2

その他・・・・・・・・・1／3

6．遺物のうち、須恵器は断面を黒塗りにした。実測図中におけるアミかけは黒色処理を意見する。

7．遺構断面図等に表記した水準数値は、海抜標高を示す。

8．遺物観察表については以下のとおりである。

・口径・底径・器高はセンチメートル（cm）、重さはグラム（g）を単位とする。

・法量を示す（　）内の数値は復元推定値を意味する。

・残存率は、あくまでも目測によるもので、5％刻みで表した。それ以下の場合は、「破片」と記した。

・焼成は、良好・普通・不良の3段階で示した。

9．本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1／25,000地形図「深谷」・「本庄」及び深谷市全図・岡部町全図（ともに1／10,000）を使用した。

10．土層および土器類の色調の表記は、『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に従った。

目次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1．発掘調査に至る経過 …… 1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
Ⅲ　遺跡の概要 …… 8
Ⅳ　遺構と遺物 …… 13
　1．住居跡 …… 13
　2．掘立柱建物跡 …… 33
　3．土坑 …… 34
　4．井戸跡 …… 46
　5．溝跡 …… 49
　6．竪穴状遺構 …… 55
　7．グリッドピット …… 57
　8．グリッド遺物 …… 64
　9．表採 …… 65
Ⅴ　調査のまとめ …… 67
　引用・参考文献 …… 68
写真図版

挿図目次

第1図　埼玉県の地形 …… 3
第2図　周辺の遺跡 …… 4
第3図　遺跡位置図 …… 7
第4図　全体図(1) …… 9
第5図　全体図(2) …… 10
第6図　全体図(3) …… 11
第7図　全体図(4)・基本上層図 …… 12
第8図　第1号住居跡 …… 14
第9図　第1号住居跡出土遺物 …… 15
第10図　第2号住居跡 …… 16
第11図　第2号住居跡出土遺物 …… 17
第12図　第3号住居跡 …… 19
第13図　第4号住居跡 …… 19
第14図　第3号住居跡出土遺物 …… 20
第15図　第4号住居跡出土遺物 …… 21
第16図　第5号住居跡 …… 22
第17図　第5号住居跡出土遺物 …… 22
第18図　第6号住居跡 …… 22
第19図　第6号住居跡出土遺物 …… 23
第20図　第7号住居跡 …… 23
第21図　第8号住居跡 …… 23
第22図　第9号住居跡(1) …… 24
第23図　第9号住居跡(2) …… 25
第24図　第10号住居跡 …… 25
第25図　第9号住居跡出土遺物(1) …… 26
第26図　第9号住居跡出土遺物(2) …… 27
第27図　第11号住居跡 …… 29
第28図　第11号住居跡出土遺物 …… 30
第29図　第12号住居跡 …… 31
第30図　第12号住居跡出土遺物 …… 32
第31図　第1号掘立柱建物跡 …… 33
第32図　土坑(1) …… 36
第33図　土坑(2) …… 39
第34図　土坑(3) …… 41
第35図　土坑出土遺物(1) …… 43
第36図　土坑出土遺物(2) …… 44
第37図　土坑出土遺物(3) …… 45
第38図　第1・2号井戸跡 …… 46
第39図　第3・4号井戸跡 …… 47
第40図　井戸跡出土遺物 …… 48
第41図　溝跡(1) …… 51
第42図　溝跡(2) …… 52
第43図　溝跡(3) …… 53
第44図　溝跡出土遺物 …… 54
第45図　第1号竪穴状遺構 …… 56
第46図　第1号竪穴状遺構出土遺物 …… 56
第47図　グリッドピット(1) …… 59
第48図　グリッドピット(2) …… 60
第49図　グリッドピット(3) …… 61
第50図　グリッドピット(4) …… 62
第51図　グリッドピット出土遺物 …… 63
第52図　グリッド出土遺物 …… 64
第53図　表採遺物 …… 65

表目次

第1表　第1号住居跡出土遺物観察表 ……16
第2表　第2号住居跡出土遺物観察表 ……18
第3表　第3号住居跡出土遺物観察表 ……21
第4表　第4号住居跡出土遺物観察表 ……21
第5表　第5号住居跡出土遺物観察表 ……21
第6表　第6号住居跡出土遺物観察表 ……23
第7表　第9号住居跡出土遺物観察表 ……28
第8表　第11号住居跡出土遺物観察表 ……32
第9表　第12号住居跡出土遺物観察表 ……33
第10表　土坑出土遺物観察表 ……45
第11表　井戸跡出土遺物観察表 ……47
第12表　溝跡出土遺物観察表 ……53
第13表　竪穴状遺構出土遺物観察表 ……55
第14表　グリッドピット計測表(1) ……57
第15表　グリッドピット計測表(2) ……58
第16表　グリッドピット出土遺物観察表 ……62
第17表　グリッド出土遺物観察表 ……65
第18表　表採遺物観察表 ……65
第19表　新旧対照表 ……66

写真図版目次

図版1　調査区全景（北から）
　　調査区全景（南から）
図版2　調査区全景（北から）
　　調査区全景（南から）
図版3　調査区北端（南から）
　　第1号住居跡（土層断面）
図版4　第1号住居跡（遺物出土状況）
　　第1号住居跡（完掘）
図版5　第2号住居跡（遺物出土状況）
　　第2号住居跡（完掘）
図版6　第3手前・4号住居跡
　　第3号住居跡カマド
図版7　第4号住居跡
　　第5号住居跡
図版8　第6号住居跡（遺物出土状況）
　　第7号住居跡、第6・7・8・11・12号土坑
図版9　第7号住居跡（遺物出土状況）
　　第8号住居跡
図版10　第9号住居跡（手前）、第9・10号土坑
　　第9号溝跡（奥）
　　第9号住居跡（遺物出土状況）
図版11　第9号住居跡（遺物出土状況）
　　第9号住居跡（カマド内遺物出土状況）
図版12　第9号住居跡（完掘）
　　第9号住居跡（カマド内遺物出土状況）
　　第9号住居跡カマド
　　第9号住居跡（遺物出土状況）
図版13　第11号住居跡（遺物出土状況）
　　第11号住居跡（完掘）
図版14　第11号住居跡（カマド内遺物出土状況）
　　第11号住居跡カマド
図版15　第12号住居跡（遺物出土状況）
　　第12号住居跡（完掘）
図版16　第12号住居跡（遺物出土状況）
　　第12号住居跡（完掘）
図版17　第6号住居跡（遺物出土状況）
　　第11号住居跡（遺物出土状況）
　　第1号土坑
　　第2号土坑
　　第4号土坑
　　第10号土坑
　　第13号土坑

図版18　第14号土坑
第16号土坑
第21号土坑
第22号土坑、C14グリッドP11
第28・29号土坑
第35号土坑（完掘）
第１号井戸跡
第２号井戸跡
図版19　第３号井戸跡
第４号井戸跡
第１号溝跡（遺物出土状況）
第２号溝跡
第３・４・５号溝跡
第６号溝跡
第８号溝跡
第10号溝跡
図版20　第１号竪穴状遺構
D10グリッドP26
図版21　第１・２・３・６・９号住居跡出土遺物
図版22　第９・11号住居跡出土遺物
第11号土坑出土遺物
第１号溝跡出土遺物
図版23　石製品(1)　(2)　(3)
第１号住居跡出土遺物
第21号土坑出土遺物
グリッドピット出土遺物
図版24　第９号住居跡出土遺物
その他遺物(1)　(2)
埴輪
陶磁器等(1)
土錘
図版25　羽釜
陶磁器等(2)
図版26　陶磁器等(3)
陶磁器等(4)
図版27　陶磁器等(5)内面
陶磁器等(6)外面
図版28　陶磁器等(7)
鉄製品

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査に至る経過

埼玉県では、「彩の国５カ年計画21」における「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標に基づき、県民の暮らしや産業・文化などあらゆる活動の基盤であり、県土の骨格となる道路や鉄道など県内道路交通網の整備を推進している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、こうした県が実施する公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県道中瀬菖蒲寺線建設事業に伴う埋蔵文化財の所在及び取り扱いについては、平成14年10月３日付け道街第494号で県道路街路課長から照会があった。

県文化財保護課（当時）では、平成14年10月４日に試掘による確認調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成14年10月15日付け教文第949号で次の内容の回答を行った。

1　埋蔵文化財の所在

名称：深谷市No.135遺跡（No.60-135）

種別：集落跡

時代：古墳・奈良・平安

所在地：深谷市大字矢島地内

2　法手続について

事業予定地には上記の埋蔵文化財が所在しますので、工事着手に先立ち文化財保護法第57条の３の規定による発掘通知を提出してください。

3　取り扱いについて

上記の埋蔵文化財は現状保存することが望ましいが、やむを得ず工事を実施する場合は記録保存のための発掘調査を実施してください。

道路街路課と文化財保護課は、埋蔵文化財の保存について協議を重ねたが、現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることになった。また、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託することになった。

発掘調査の実施にあたり、深谷市No.135遺跡は、深谷市教育委員会との協議により、「森脇遺跡」と命名された。

埼玉県知事から提出された発掘通知（文化財保護法第57条の３：当時）に対する県教育委員会教育長からの勧告は、平成15年４月23日付け教文第３-33号で通知した。また、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された発掘調査届（文化財保護法第37条１項：当時）に対する県教育委員会教育長からの指示は、平成15年４月23日付け教文第２-８号で通知した。

（生涯学習文化財課）

2．発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

森脇遺跡の発掘調査は、平成15年4月8日～平成15年7月18日まで実施した。調査面積は1560㎡である。

4月8日に現場事務所を設置、発掘器材の搬入を行うとともに、重機により表土を掘削・除去した。

次に調査補助員による遺構の確認作業を実施、確認した遺構は順次精査し、遺物の出土状態や遺構の形状などを写真撮影するとともに、実測図を作成して記録した。

遺構精査・写真撮影・実測図作成作業が終了したのち、発掘器材の撤収を行うとともに、安全確保のために重機による埋め戻しを開始、事務所を撤去して、すべての作業を終了した。

(2) 整理・報告書作成作業

整理作業は、平成18年1月4日～平成18年3月23日まで実施した。

1月当初から遺物の水洗・註記を開始し、続いて遺物の接合・復元作業を実施した。

遺構図面については、図面整理を経て、第2原図を作成し、スキャナーで取り込んだ後に、コンピューターによるトレース作業および土層註記等を挿入し編集作業を進めた。

遺物は、接合・復元が終了したものから実測作業に入り、1月下旬から併行してトレース・採拓をし、版下の作成を行った。

2月上旬に遺物写真の撮影を行い、図面・写真・本文の割付と原稿執筆を進め、編集作業を行った。2月下旬に大部分の作業を完成させて、印刷業者を選定し入稿した。3回の校正を経て、平成19年3月に報告書を刊行した。

入稿の前後に、本報告書で取り扱った図面類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行った。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

平成15年度（発掘調査）

理事長	桐川卓雄
常務理事兼管理部長	中村英樹
管理部	
管理部副部長	村田健二
主席	田中由夫
調査部	
調査部長	宮崎朝雄
調査部副部長	坂野和信
主席調査員（調査第二担当）	饗持和夫
主任調査員	栗岡潤
調査員	宅間清公

平成18年度（整理・報告書刊行）

理事長	福田陽充
常務理事兼総務部長	岸本洋一
総務部	
総務部副部長	昼間孝志
総務課長	髙橋義和
調査部	
調査部長	今泉泰之
調査部副部長兼資料活用部副部長	小野美代子
主幹兼整理第一課長	礒崎一
主査	鈴木孝之

II　遺跡の立地と環境

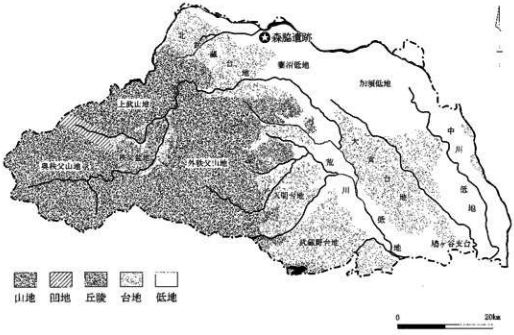
1．地理的環境

遺跡の所在する深谷市は、埼玉県の北部に位置している。深谷市は大きく分けて、北半の妻沼低地と南半の櫛挽台地からなる。櫛挽台地は、荒川が形成した扇状地が開析された地形で、標高は50～80mであり、利根川南岸に広がる妻沼低地の標高は30m前後である。

妻沼低地の特徴として、利根川・荒川の両河川から影響を受けている点が挙げられる。つまり、妻沼低地は、北方の氾濫地帯としてその影響を受けてきたが、荒川が低地中央部に形成した新荒川扇状地によって東西に分断されている。このため、扇状地の東西両側には水田地帯が広がる一方、砂礫層の扇状地では水はけが良く、近年まで桑畑として利用され、扇状部各所には、湧水点が見受けられる景観を呈していた。

また、低地の東西では水系が異なり、東部の河川は荒川に注ぐのに対して、西部の小山川・福川などは利根川の支流となっている。このように区分される妻沼低地西部は、利根川と櫛挽台地とに挟まれるが、この間には中小河川が東流し、古くはその流路も複雑に蛇行していたと考えられる。その結果、この妻沼低地内には、多数の小規模な自然堤防と谷状の流路跡が形成されることとなった。前者は、洪水時には浮き島状となるため高島・大塚島・血洗島・内ケ島などの地名となり、後者は宮ヶ谷戸・道ヶ谷戸・新ヶ谷戸・本田ヶ谷などの地名となって、現在まで残っている。

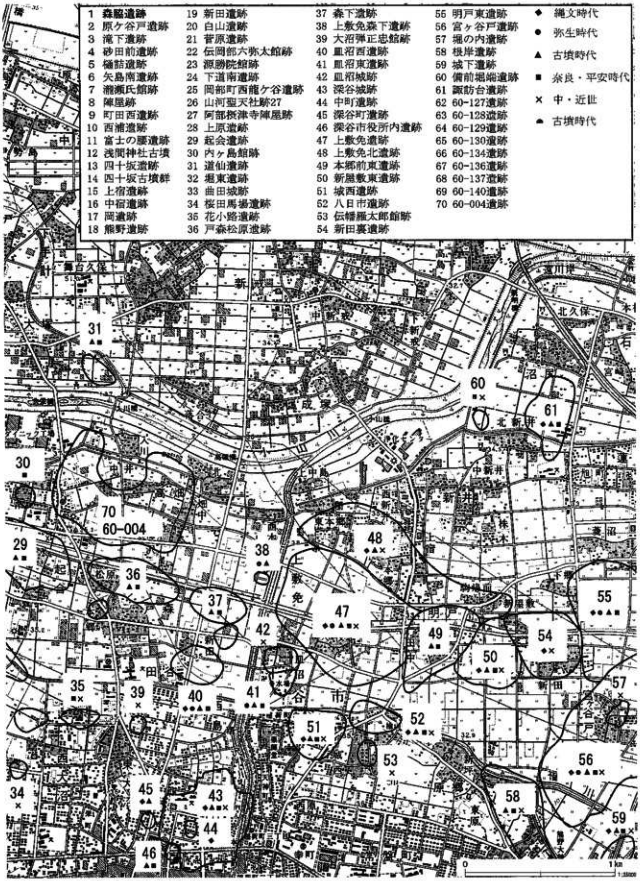
以下に、森脇遺跡周辺の遺跡について概観していきたい。



第1図　埼玉県の地形

横瀬新田
横瀬
横瀬本郷
北阿賀野
南阿賀野
矢島
大塚
伊勢方
63
60-128
10
7
8
9
64
60-129
62
60-127
65
60-130
11
67
60-136
66
60-134
68
60-137
69
60-140
1
2
3
4
5
6
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
32
33

第２図　周辺の遺跡


1 森脇遺跡
2 原ケ谷戸遺跡
3 滝下遺跡
4 砂田前遺跡
5 楠部遺跡
6 矢島南遺跡
7 瀧瀬氏館跡
8 陣屋跡
9 町田西遺跡
10 西畑遺跡
11 富士の頭遺跡
12 浅間神社古墳
13 四十坂遺跡
14 四十坂古墳群
15 上宿遺跡
16 中宿遺跡
17 岡遺跡
18 熊野遺跡
19 新田遺跡
20 白山遺跡
21 菅原遺跡
22 伝岡部六弥太館跡
23 源勝院館跡
24 下道南遺跡
25 岡部町西龍ケ谷遺跡
26 山河聖天社跡27
27 阿部撰津寺陣屋跡
28 上原遺跡
29 総会遺跡
30 内ケ島館跡
31 道仙遺跡
32 堀東遺跡
33 曲田城跡
34 桜田馬場遺跡
35 花小路遺跡
36 戸森松原遺跡
37 森下遺跡
38 上敷免森下遺跡
39 大沼弾正忠館跡
40 皿沼西遺跡
41 皿沼東遺跡
42 皿沼城跡
43 深谷城跡
44 中町遺跡
45 深谷町遺跡
46 深谷市役所内遺跡
47 上敷免遺跡
48 上敷免北遺跡
49 本郷前東遺跡
50 新屋敷東遺跡
51 城西遺跡
52 八日市遺跡
53 伝幡羅太郎館跡
54 新田裏遺跡
55 明戸東遺跡
56 宮ケ谷戸遺跡
57 堀の内遺跡
58 根岸遺跡
59 城下遺跡
60 備前堀端遺跡
61 諏訪台遺跡
62 60-127遺跡
63 60-128遺跡
64 60-129遺跡
65 60-130遺跡
66 60-134遺跡
67 60-136遺跡
68 60-137遺跡
69 60-140遺跡
70 60-004遺跡
◆ 縄文時代
● 弥生時代
▲ 古墳時代
■ 奈良・平安時代
× 中・近世
◓ 古墳時代
0
1km
1:25000

2．歴史的環境

妻沼低地は利根川右岸に広がる肥沃な低地であり、南は熊谷市付近を境として秩父山塊に連なる丘陵や台地と、大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に接する。妻沼低地の南端に櫛挽面、東に寄居面を控える一画に深谷市の中心があり、周辺では住宅地が増加している。妻沼低地は、現在ではかなり平坦面となっているが、往時の痕跡をそのままとどめているとは言いがたい。

次いで、時代を追って概観していく。後期旧石器時代のナイフ形石器が、深谷市内で初めて幡羅遺跡から出土した。

縄文時代では、東方城跡で草創期の可能性がある尖頭器が出土している。両遺跡共に櫛挽台地の先端部に位置している。また、小台遺跡からは早期押型文土器や諸磯式土器の破片が出土している。妻沼低地の東端部に位置する深谷城跡（43）からは、黒浜式土器が、割山遺跡からは諸磯ａ式土器が出土している。

縄文時代中期、特に後半になると遺跡は増大する。中でも小台遺跡は、多量の土器や石器を包含する埋没谷を中心に住居跡や上坑群が広がり、集落の規模は市内では屈指の遺跡である。

縄文時代後・晩期になると、集落域は櫛挽台地から妻沼低地へと移っていく。明戸東遺跡（55）では後期後葉の住居跡、上敷免遺跡（47）では後期後葉の遺物包含層が検出されている。なお、上敷免遺跡では該期の資料のほかに、東海系条痕文土器が検出されるなど、県内初の遠賀川系土器が検出されるなど、他地域との交流を窺わせている。

また、妻沼低地内のほとんどの遺跡からは、遺構は検出されない場合においても、縄文後期の土器片が検出される状況にある。

弥生時代になると、上敷免遺跡で中期の再葬墓や若干時期が下る住居跡が、同一の自然堤防上に検出されており、この時期の集落のあり方を検討する上で特記される。弥生時代後期～古墳時代中期の遺跡の分布に関しては不明確ではあるものの、古墳時代前・中期の遺跡については、調査例が増加している。

古墳時代後期前半になると遺跡数は急増し、妻沼低地内の自然堤防上に大規模集落が展開し始めるが、その中心は上敷免遺跡周辺と推測される。なお、この時期には小規模な円墳が多数造られ、幾つかの古墳群を形成する。代表例としては、櫛挽台地の先端、大字原郷周辺に展開する木の本古墳群が挙げられる。

７世紀頃には、大集落は縮小傾向となり、代わって宮ヶ谷戸遺跡（56）や東川端遺跡、清水上遺跡など、幡羅郡衙と推定される幡羅遺跡に近い位置に集落が営まれるようになる。律令期には深谷市の東半部は幡羅郡、西半部は榛沢郡に属していたと考えられる。榛沢郡の郡衙正倉は、同郡町中宿遺跡で検出されている。また幡羅郡衙関連の遺構については、近年の調査により多くの成果が挙げられている。その際には、10世紀後葉の住居跡が数軒確認されており、郡衙の機能が失われる時期を示すとみなされている。

新屋敷東遺跡（50）では、正倉別院の可能性が指摘される大型の建物跡が検出されている。

平安時代末期以降は、人見館跡をはじめとした猪俣党武士団の居館が各地に出現する。また、明らかではないものの、幡羅館跡もその内の１つとみられる。室町時代以降は、深谷上杉氏の所領となる。深谷上杉氏は当初、庁鼻和城に居を構えたとされるが、５代目の房憲の時、古河公方の勢力に対抗するため、より堅固な深谷城に移ったといわれる。

この頃の遺跡としては、深谷上杉氏の家臣の館跡である秋元氏館跡や、古河公方勢力を牽制し、人見地域を防衛するために築かれたと推定される館跡が検出された押切遺跡などが挙げられる。

また割山遺跡では、伝承などは一切残されてはいないものの、方形の区画溝が検出されており、館跡の存在が想定されている。

1 森脇遺跡	6 矢島南遺跡	11 富士の腰遺跡	64 60-129遺跡	67 60-136遺跡
4 砂田前遺跡	8 陣屋跡	21 菅原遺跡	65 60-130遺跡	68 60-137遺跡
5 樋詰遺跡	9 町田西遺跡	62 60-127遺跡	66 60-134遺跡	

第3図　遺跡位置図

Ⅲ　遺跡の概要

森脇遺跡は、深谷市大字矢島1003－1番地ほかに所在する。遺跡の位置する妻沼低地は、利根川の作用によって形成された沖積低地であり、利根川やその支流である中小河川により自然堤防や後背湿地が発達している地域である。

森脇遺跡は、小山川右岸の自然堤防上に立地しており、JR高崎線岡部駅から北東へ2.2km、深谷駅からは北東へ3.9kmの距離にある。遺跡は、東流する現在の小山川の南約250mに位置しているが、これは河川改修された結果であり、迅速測図に記された小山川からは、約450mの距離にあたる。ちなみにこの地点は、利根川の南3.2km、荒川の北9.8kmの位置に該当する。森脇遺跡がのる矢島の自然堤防からは下流域に当たる、東1.0kmには内ヶ島、南東500mには大塚島の地名をもつ自然堤防が存在している。

矢島の自然堤防上は現在、集落域となっており、最高値は標高37.6mを測る。これに対して、自然堤防外の低地では現在、水田となっており標高36.5mで、比高差は最大で1.1mである。低地における旧地形は、水田化によって地形が変えられている上に、耕地整理によってさらに変化しているといえる。

森脇遺跡の推定範囲は、南北350m、東西200m程で、面積は約25,000㎡である。また、遺跡の立地する自然堤防は、東西650m、南北300m程であり、東流する河川によって形成された結果であると推測される。森脇遺跡は、この東西に展開する自然堤防の西端部に位置すると表現できよう。

この狭い遺跡の範囲内に、稲荷神社と神明社が存在している。今回の調査区の西隣に位置する稲荷神社では、本殿付近が最も標高が高く、この位置から北側と南側に向かって次第に低くなっていく。森脇遺跡のすぐ南には、矢島南遺跡（第3図11）が境を接する形で立地している。矢島南遺跡（西口1994）は、国道17号深谷バイパス建設に伴って調査された多数の遺跡の内の1つである。矢島南遺跡の遺構の検出状況をみると、ほぼ東西方向に約1kmにわたって延びる調査区の中央部では空白となっており、遺構は調査区の東端部と西端部に分布していることがわかる。

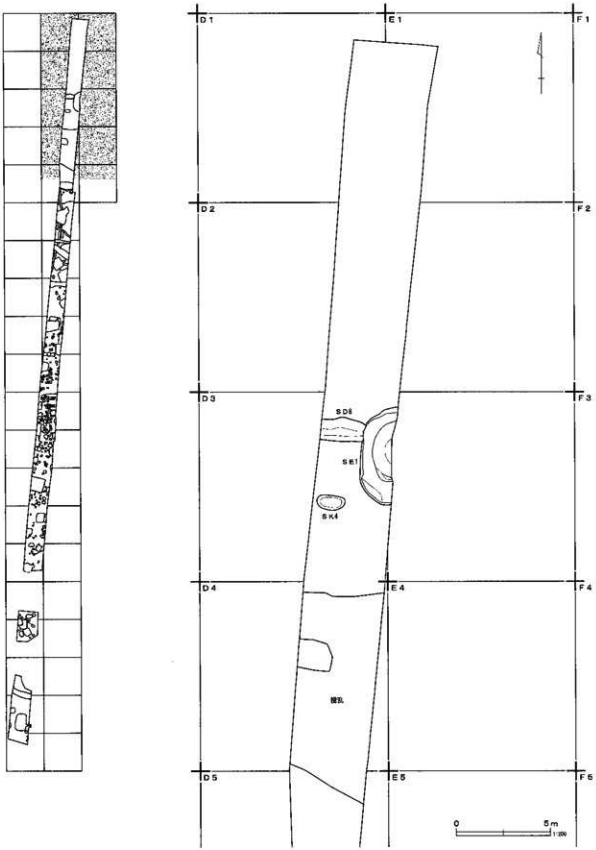
矢島南遺跡の推定範囲としては、現状では矢島の自然堤防の南端部から、大塚島の自然堤防の北端部を含んだ低地部分に設定されている。しかし、地形的にみて、矢島南遺跡の西端部は、現在は水田域になっているものの、その下層には矢島の自然堤防の南側部分が続いており、遺構はその上にのっているという状況が推測される。同様に、矢島南遺跡の東端部についても、恐らくは遺跡が立地しているであろう大塚島の自然堤防の北側部分が水田の下にまで及んでおり、その上にのっている集落域の一部が検出されたものと推定されるのである。

矢島南遺跡は調査の結果、古墳時代の住居跡7軒（前期6軒・後期1軒）、奈良・平安時代の住居跡18軒や井戸跡2基などのほか、浅間B軽石に覆われた水田跡が検出されている。奈良・平安時代の住居跡からは、8世紀第2四半期～9世紀第4四半期にかけての遺物が検出されている。

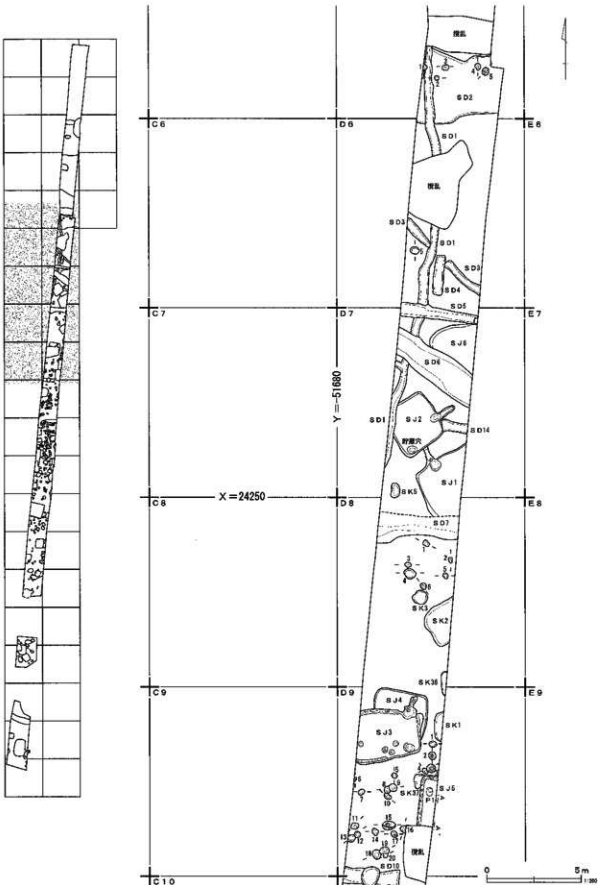
そして、今回行われた森脇遺跡では発掘調査の結果、平安時代の住居跡12軒、平安時代～中・近世にかけての溝跡13条、中世の井戸跡4基のほか、時期不明の土坑36基が確認された。

これらの住居跡からは、10世紀前半～後半にかけての遺物が検出されており、矢島南遺跡の住居跡の遺物とは、時期を異にしている状況が浮かび上がってきた。

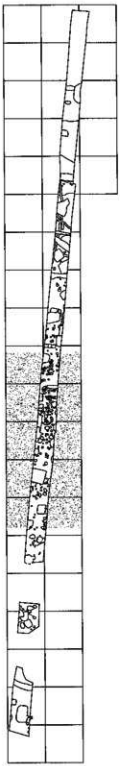
以上にみたように、矢島南遺跡の西側部分は森脇遺跡と同一の自然堤防上に立地していると推測されるため、同一の集落と見做しても良いと思われる。その場合、両地点における時期の違いは、集落域の移動を意味するのであろうか。

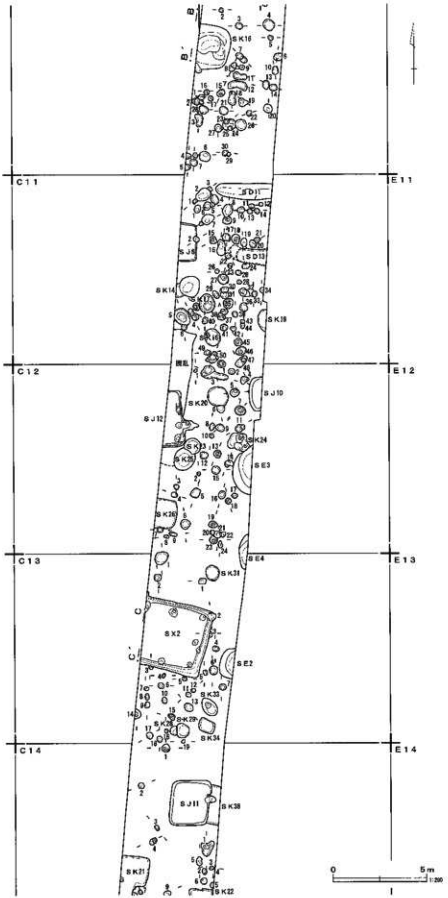


第4図　全体図(1)


撹乱
SD2
SD1
撹乱
SD3
SD1
SD3
SD4
SD5
SJ5
SD6
SD1
SJ2
SD14
貯蔵穴
SJ1
SK5
SD7
SK3
SK2
SK38
SJ4
SK1
SJ3
SK37
SJ6
撹乱
SD12
SK12
C6
D6
E6
C7
D7
E7
C8
D8
E8
C9
D9
E9
C10
Y＝−51680
X＝24250
0
5m
1:200

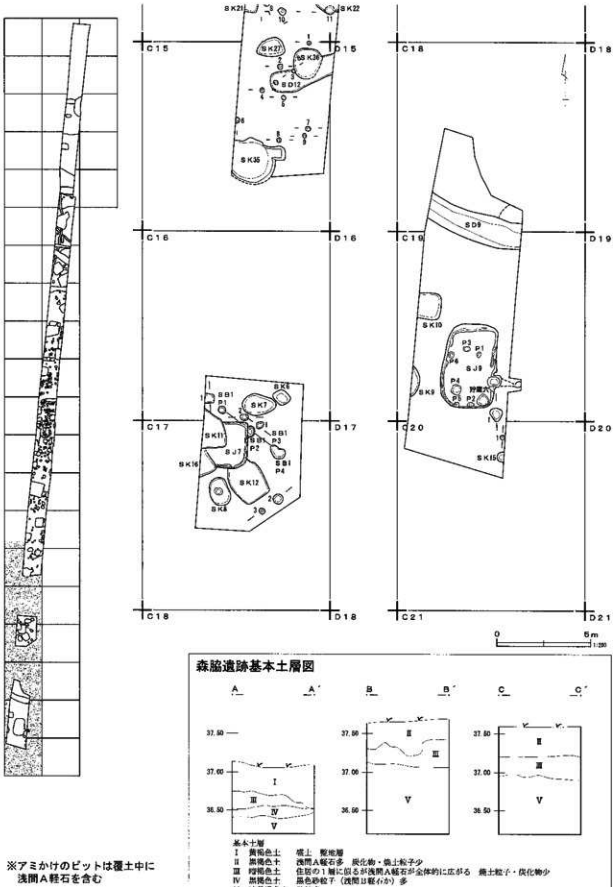
第5図　全体図(2)





※アミかけのピットは覆土中に
浅間A軽石を含む

第6図　全体図(3)



※アミかけのピットは覆土中に浅間A軽石を含む

第７図　全体図(4)・基本土層図

Ⅳ　遺構と遺物

1．住居跡

第1号住居跡（第8・9図）

D－7・8グリッドに位置する。住居跡の東・南側部分は、調査区外に続く。第2号住居跡と第7号溝跡に切られている。

コーナー部分が1箇所検出されているのみであるため、平面形が方形か長方形かは不明である。平面規模は、東西（3.30）mであるが、南北は3.02mまでの確認である。確認面からの深さは0.24～0.35mである。住居壁面の立ち上がりは、比較的急であるといえる。主軸方向は、N-30°-Wを指す。

カマド周辺では、他の部分よりも床面の硬化が認められた。土層断面A－A′・B－B′の3層は人為的埋め戻しとして考えられる。カマドは、北壁の西寄りに設けられている。袖部は失われていた。燃焼部は、住居壁面よりも僅かに奥まで及んでおり、平面規模は56×58cm、床面の最も高い位置からの深さは8cmであり、浅い皿状に窪む。煙道部は長さ66cm、幅23～30cm、確認面からの深さ32cmを測り、底面は比較的平坦であった。燃焼部の壁面・底面、煙道部の壁面は、被熱による赤色硬化が顕著であった。

カマド以外の施設は検出されなかった。

遺物の多くは、カマド周辺からの出土であった。

図化し得た遺物は、坏・高台付埦・羽釜ほか、計16点である。16は、覆土への混入であろうか。

以上の遺物の他に、炉内滓1点（311.1g）が出土したが、図化には至らなかった。

第2号住居跡（第10・11図）

D－7グリッドに位置する。第1号住居跡を切り、第7号溝跡に切られている。

規模は、東西2.70m、南北2.70m、確認面からの深さは0.26～0.54mである。主軸方向は、N-54°-Eを指す。住居壁面の立ち上がりは、比較的急であるといえる。床面は全体的に硬化が認められた。

土層断面の3層は、人為的埋め戻しである。8～10層は、4層の堆積後人為的に埋め戻されている。

カマドは、東壁の南寄りに設けられている。袖部は失われていた。燃焼部は、住居壁面よりも奥にまで及んでおり、平面規模は46×74cm、床面からの深さは4cmであり、浅く皿状に窪む。燃焼部から高さ10cm程の段を経て、煙道部に至る。

煙道部の長さは66cm、幅22～36cm、確認面から最深部までの深さは30cmを測り、底面は緩やかな傾斜で煙出し部へと続く。燃焼部の壁面・底面、煙道部の壁面、および館口部に相当する部分の、被熱による赤色硬化は顕著であった。遺物は、住居跡内にまとまりなく分布しているが、いずれも数cm～10cmほど浮いた状態で出土している。

カマド以外の施設として、南東コーナーから貯蔵穴が検出された。平面規模は36×51cm、床面からの深さは16cmを測る。平面形は楕円形、断面形は浅い椀状を呈する。

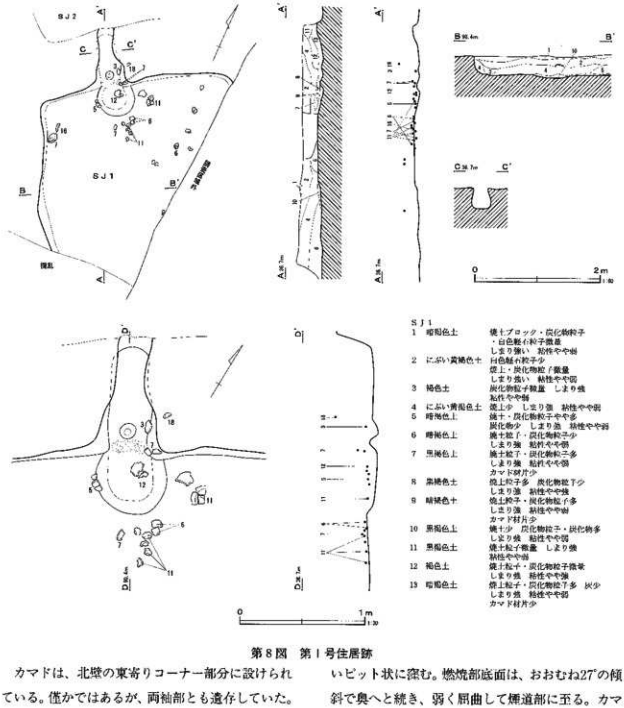
図化し得た遺物は、坏・高台付埦・羽釜ほか、計19点であった。

第3号住居跡（第12・14図）

D－9グリッドに位置する。第4号住居跡に切られている。

住居西壁は調査区外に続いているため、東西規模は3.56mまでの確認である。南北規模は2.70m、確認面からの深さは0.32～0.37mを測る。住居の方位はN-60°-Wを指す。

住居壁面の立ち上がりは、比較的急であるといえる。床面は全体的に硬化が認められた。土層断面における4層は、カマド天井部、5・6層は、天井崩落後の堆積土、また7層は、煙道部への流入土である。

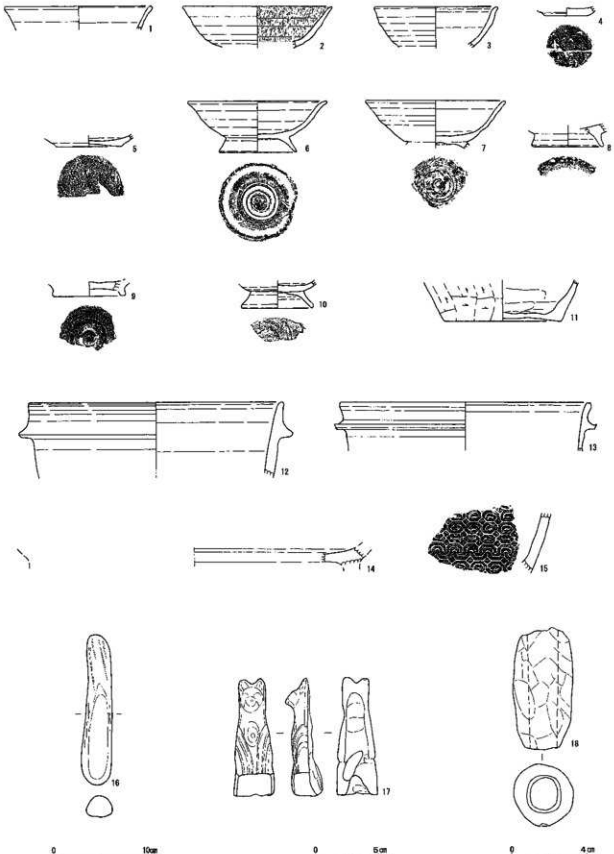


第８図　第１号住居跡

カマドは、北壁の東寄りコーナー部分に設けられている。僅かではあるが、両袖部とも遺存していた。住居壁面からの残存規模は、左袖22cm、右袖５cmである。燃焼部は、住居壁面よりも奥にまで及んでおり、奥行き51cm、幅78cm、床面から最深部までの深さは18cmを測る。

天井部が崩落しているため、全体的な形状は不明ではあるが、壁面は３面とも立ち上がりが急であり、箱状を呈している。底面は皿状であり、部分的に浅いピット状に窪む。燃焼部底面は、おおむね27°の傾斜で奥へと続き、弱く屈曲して煙道部に至る。カマド上層断面（C－C′）は天井崩落土である。煙道部の長さは75cm、幅は17～22cmを測る。煙道部底面は、住居床面より５cmほど高く、緩やかな傾斜で煙出し部へと続く。

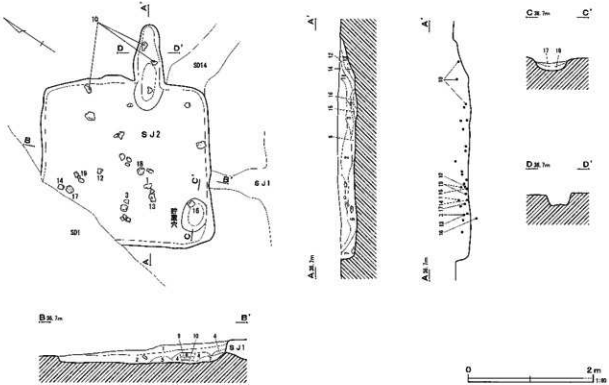
煙道部は、天井部が比較的良く残された状態で検出された。形状は円筒に近いトンネル状である。カマド内面は、被熱による赤色硬化が顕著であり、燃



第9図　第Ⅰ号住居跡出土遺物

第１表　第１号住居跡出土遺物観察表（第９図）

番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	重量	残存%	胎　土	焼成	色　調	出土位置・備考	図　版
1	ロクロ土師器	坏	(15.4)	2.5	—	6.3	破片	雲	普通	にぶい橙		
2	ロクロ土師器	坏	(16.0)	4.4	—	23.2	破片	雲、角	普通	にぶい橙	内面黒色処理	28-1
3	ロクロ土師器	坏	(13.0)	4.3	—	26.3	破片	角	普通	灰黄褐		28-1
4	ロクロ土師器	坏	—	0.9	4.6	27.3	底部	雲、角	普通	橙		26-1
5	ロクロ土師器	坏	—	1.3	7.0	40.2	破片	角	普通	にぶい赤褐		26-1
6	ロクロ土師器	高台付坏	(14.8)	5.4	8.2	228.8	60	雲、角	普通	にぶい黄橙		21-2
7	ロクロ土師器	高台付坏	15.0	5.1	—	207.3	90	雲、角	普通	明赤褐		21-1
8	ロクロ土師器	高台付坏	—	2.4	(7.5)	20.3	破片	雲	普通	明褐		26-2
9	ロクロ土師器	高台付坏	—	0.9	—	27.3	破片	雲、角	普通	橙		
10	ロクロ土師器	高台付坏	—	2.9	(6.6)	27.1	10	雲、角	普通	にぶい黄橙		26-2
11	土　師　器	甕	—	4.4	(12.4)	417.3	10	雲	普通	にぶい橙		23-3
12	土　師　器	羽　釜	(27.0)	7.9	—	138.0	破片	雲、角	普通	赤褐		25-1
13	土　師　器	羽　釜	(26.8)	5.1	—	21.7	破片	角	普通	にぶい橙		25-1
14		甕　か	—	2.0	—	118.3	破片		普通	黒褐		
15		火　鉢　か	—	6.2	—	103.1	破片		普通	褐灰		
16	石　製　品	不　明　品	長15.9	幅3.3	厚2.3	重180.0						23-1
17		紡　錘　車	—	9.3	3.2	40.8	55	雲	普通	明赤褐		24-2
18	土　製　品	土　錘	孔径1.6	長6.5	厚3.2	重47.4	90		普通	にぶい黄橙		24-6



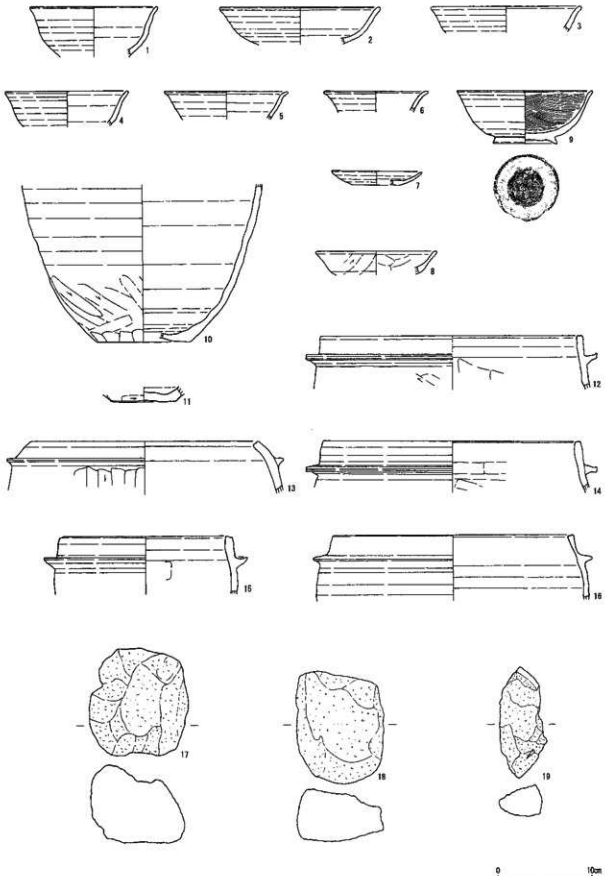
ＳＪ２

1　にぶい黄褐色土　白色粒子少　焼土粒子・炭化物粒子微量　しまり強　粘性やや弱
2　暗褐色土　白色粒子少　焼土粒子・炭化物粒子微量　しまり強　粘性やや強
3　暗褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多　地山ブロック少　しまり強　粘性やや強
4　にぶい黄褐色土　焼土粒子・焼土ブロック（φ1.5cm）少　炭化物粒子微量
　　しまり強　粘性弱
5　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子・焼土ブロック（2～3cm）多
　　しまり強　粘性やや弱
6　黒褐色土　焼土粒子・炭化物粒子微量　しまりやや強　粘性強
7　黒褐色土　炭化物粒子・焼土粒子ごく微量　しまり強　粘性弱
8　にぶい黄褐色土　白色粒子少　炭化物粒子・焼土粒子微量　しまり強　粘性弱
9　褐色土　炭化物粒子少　しまり強　粘性強　粘土質
10　暗褐色土　焼土粒子・炭化物粒子微量　しまり強　粘性やや弱

ＳＪ２カマド

11　褐色土　焼土粒子少　炭化物粒子微量　しまり強　粘性やや弱
12　暗褐色土　焼土粒子少　炭化物粒子微量　しまり強　粘性やや強
13　にぶい黄褐色土　焼土粒子多　炭化物粒子少量　しまり強　粘性やや強
14　褐色土　炭化物粒子多　焼土粒子少　カマド材片少
　　しまり強　粘性やや弱
15　黒褐色土　炭化物粒子・灰多　焼土粒子微量
　　しまり強　粘性やや弱
16　暗赤褐色　しまりやや強　粘性弱　　カマド構築材
ＳＪ３貯蔵穴
17　暗褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多　しまり強　粘性弱
18　褐色土　焼土粒子微量　しまり強　粘性やや弱

第10図　第２号住居跡



第11図　第２号住居跡出土遺物

第２表　第２号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	重量	残存%	粘　土	焼成	色　調	出土位置・備考	図　版
1	ロクロ土師器	坏	(13.6)	5.3	—	26.3	破片	雲、角	普通	橙		28-1
2	ロクロ土師器	坏	(17.0)	4.9	—	24.9	破片	密、角	普通	にぶい黄橙		
3	ロクロ土師器	坏	(15.9)	2.8	—	9.3	破片	雲、角	普通	にぶい黄橙		28-1
4	ロクロ土師器	坏	(13.1)	3.7	—	10.8	破片	密、角	普通	にぶい橙		28-1
5	ロクロ土師器	坏	(13.1)	3.0	—	9.7	破片	雲、角	普通	橙		28-1
6	ロクロ土師器	坏	(11.0)	2.2	—	6.6	破片	密、角	普通	にぶい褐		28-1
7	ロクロ土師器	小　皿	(9.7)	1.5	(5.0)	9.6	20	角	普通	浅黄橙		26-1
8	ロクロ土師器	皿	(12.8)	2.5	—	9.5	破片	密	普通	にぶい褐		28-1
9	ロクロ土師器	高台付埦	(14.6)	5.6	6.6	243.0	40	雲、角	普通	にぶい橙	カマド	21-3
10	土　師　器	甕	—	16.7	(10.0)	374.8	10	密	普通	褐		25-2
11	土　師　器	甕	—	1.6	(7.0)	69.3	破片	雲、角	普通	明赤褐		25-2
12	土　師　器	羽　釜	(28.0)	5.7	—	39.9	破片	雲、角	普通	橙		25-1
13	土　師　器	羽　釜	(24.2)	5.6	—	99.7	破片	角	普通	黒褐		25-1
14	土　師　器	羽　釜	(27.6)	5.4	—	62.7	破片	雲、角	普通	橙		25-1
15	土　師　器	羽　釜	(17.2)	6.1	—	64.3	破片	角	普通	橙		25-1
16	土　師　器	羽　釜	(25.8)	6.9	—	92.6	破片	雲、角	普通	灰黄褐	貯蔵穴	25-1
17	石　製　品	不　明　品	長11.3幅10.5厚7.9重699.4								軽石製	
18	石　製　品	不　明　品	長11.4幅9.2厚5.4重454.4								軽石製	
19	石　製　品	不　明　品	長11.8幅5.0厚3.1重139.1								軽石製	

焼部底面や焚口部に相当する部分では、炭が散っているのが認められた。

カマド以外の施設として、住居跡内においてピット５基と周壁溝が検出された。しかし、これらのピットがすべて本住居跡に帰属するものであるか否かは明白ではない。

位置的にみて、本住居跡の上面にのっている第４号住居跡に帰属する可能性と、どちらにも帰属しない可能性とが考えられるが、ここで掲げておく。Ｐ１は円形または楕円形で、２つのピットが重複している可能性もある。位置的に、本住居跡の貯蔵穴とも考えられるが、第４号住居跡の貯蔵穴の可能性もある。

各ピットの規模は、径57×42cm、床面からの深さ28cm、Ｐ２は円形で径24×21cm、床面からの深さ７cm、Ｐ３は円形で径27×25cm、床面からの深さ16cm、Ｐ４は円形で径30×27cm、床面からの深さ11cm、Ｐ５は楕円形で径27×21cm、床面からの深さ51cm、Ｐ６は円形で径43×35cm、床面からの深さ15cmを測る。

周壁溝は、住居北壁と南壁の壁際において検出された。北壁際では、カマド左袖部の脇からはじまるが、西側は調査区外となるため、長さについては不明である。幅は８～18cm、深さは５cm前後、長さは238cmまでの確認である。南壁際では、コーナー部分からではなく中途からはじまるが、西側は調査区外となるため、長さは不明である。幅は18cm前後、深さは６cm程、長さについては164cmまでの確認である。

図化し得た遺物は、坏・高台付埦・羽釜など、計14点であった。

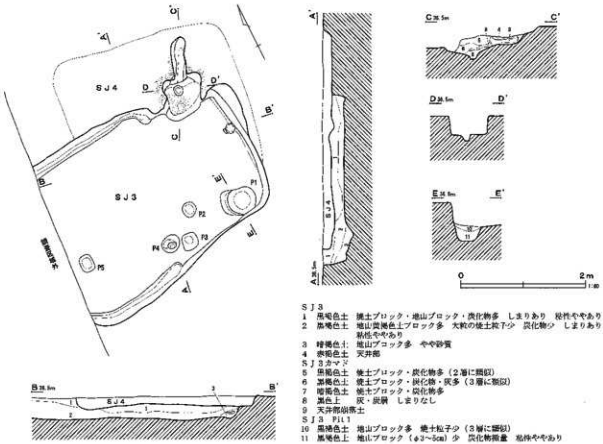
以上の遺物の他に、炉内滓２点（78.7ｇ）が出土したが、図化には至らなかった。

第４号住居跡（第13・15図）

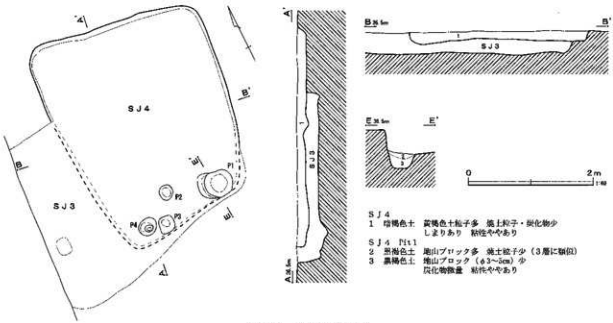
Ｄ－９グリッドに位置する。第３号住居跡を切っている。位置関係からみれば、本住居跡の３分の２程が、第３号住居跡にのった形となっている。

平面図上には表れていないが、土層断面図Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′内の（１層）から南壁の位置を知ることができる。その結果から得られた本住居跡の平面規模は、東西（2.85）ｍ、南北（3.26）ｍ、確認面からの深さは、0.09～0.17ｍである。住居壁面の立ち上がりは、比較的急であるといえる。主軸方向は、Ｎ－９°－Ｅを指す。床面には、全体的に硬化が認められた。

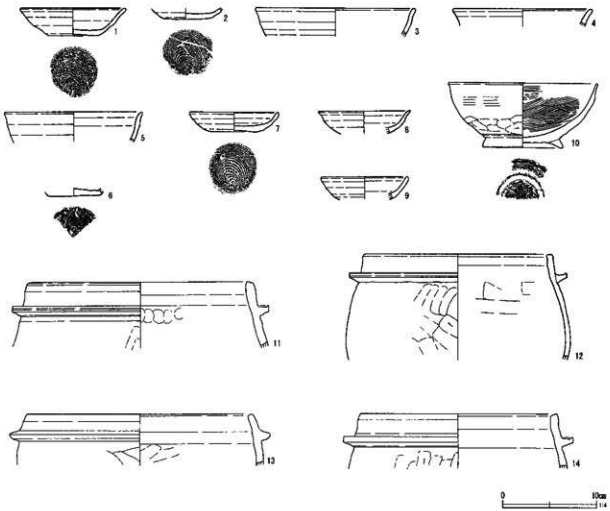
土層断面における１～３層は、自然堆積と考えら



第12図　第３号住居跡



第13図　第４号住居跡



第14図　第３号住居跡出土遺物

れる。

カマドの痕跡は確認されず、それ以外の施設も確認されなかった。

図化し得た遺物は、土師器坏・高台付埦・甕・羽釜のほか、土玉を合わせ計６点であった。

第５号住居跡（第16・17図）

D－９グリッドに位置する。北西コーナー部分が検出されたのみであり、南側は攪乱を受け、東側は調査区外に続いている。

本住居跡の規模は、東西0.92m、南北2.64mまでの確認にとどまる。確認面からの深さは、0.21～0.32mである。住居壁面の立ち上がりは、比較的急であるといえる。

土層断面における１～３層は、いずれも自然堆積と考えられる。

カマドは検出されず、しかも長軸方向も不明であるため、住居の平面形と主軸方向については不明である。

図化し得た遺物は炉内滓の小破片１点のみであった。

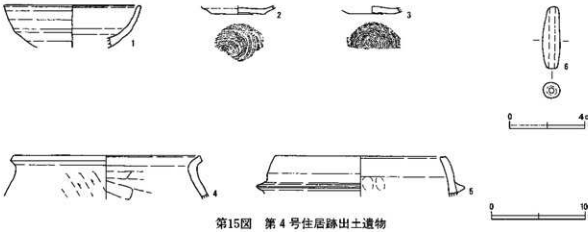
第６号住居跡（第18・19図）

D－７グリッドに位置する。第５・６号溝跡に切られている。北西コーナー部分が検出されたのみであり、東側は調査区外に続いている。

本住居跡の規模は、東西2.73m、南北2.83mまでの確認にとどまる。確認面からの深さは0.12～0.23mである。住居壁面の立ち上がりは緩やかである。

土層断面における１・２層とも、自然堆積であると考えられる。

カマド以外の施設は検出されず、しかも長軸方向



第15図　第４号住居跡出土遺物

第３表　第３号住居跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	重量	残存%	胎　土	焼成	色　調	出土位置・備考	図　版
1	ロクロ土師器	坏	11.2	2.9	5.1	85.3	40	雲、角	普通	橙		21-6
2	ロクロ土師器	坏	—	1.2	4.8	32.7	20	雲、角	普通	にぶい橙		26-1
3	ロクロ土師器	坏	(17.0)	3.0	—	8.4	破片		普通	にぶい黄橙		28-1
4	ロクロ土師器	坏	(14.8)	1.8	—	6.0	破片	雲、角	普通	橙		28-1
5	ロクロ土師器	坏	—	0.8	(5.6)	11.6	破片		普通	橙		28-1
6	ロクロ土師器	坏	(9.5)	2.1	5.0	64.3	30	角	普通	にぶい黄橙		26-1
7	ロクロ土師器	小　皿	(9.8)	2.4	—	11.9	破片	雲、角	普通	にぶい黄橙	カマド	21-4
8	ロクロ土師器	小　皿	(9.2)	2.6	—	49.3	破片	角	普通	灰白		28-1
9	ロクロ土師器	小　皿	(16.0)	6.9	(8.6)	277.1	30	雲、角	普通	褐灰		21-5
10	ロクロ土師器	高台付埦	(14.6)	3.2	—	7.7	破片	雲、角	普通	にぶい黄橙	内面黒色処理か	21-7
11	土　師　器	羽　釜	(22.6)	7.0	—	45.9	破片	雲、角	普通	にぶい橙		25-1
12	土　師　器	羽　釜	(20.0)	11.3	—	89.0	破片	角	普通	橙	カマド	25-1
13	土　師　器	羽　釜	(24.0)	5.5	—	39.3	破片	雲、角	普通	赤褐		25-1
14	土　師　器	羽　釜	(21.0)	5.7	—	56.8	破片	雲、角	普通	橙		25-1

第４表　第４号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	重量	残存%	胎　土	焼成	色　調	出土位置・備考	図　版
1	ロクロ土師器	坏	(14.6)	4.5	—	22.4	破片	雲、角	普通	橙		28-1
2	ロクロ土師器	小　皿	—	0.9	(5.8)	18.7	10	角	普通	橙		26-1
3	ロクロ土師器	小　皿	—	0.8	(5.0)	16.2	破片	雲、角	普通	にぶい橙		26-1
4	土　師　器	甕	(20.0)	4.6	—	38.6	破片	雲、角	普通	にぶい橙		25-2
5	土　師　器	羽　釜	(18.4)	4.3	—	26.1	破片	雲、角	普通	黄橙		25-1
6	土　製　品	土　錘	孔径0.4長3.3厚0.9重2.1						普通	にぶい橙		

第５表　第５号住居跡出土遺物観察表（第17図）

番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	重量	残存%	胎　土	焼成	色　調	出土位置・備考	図　版
1	石　製　品	不　明　品	長6.7幅4.8厚3.7重64.4								軽石製	23-1

も不明であるため、住居の平面形と主軸方向は不明である。

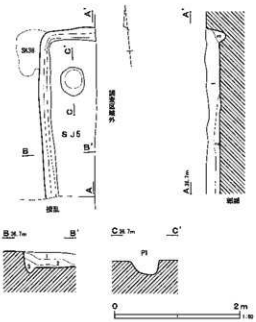
図化し得た遺物は、土師器坏・高台付埦ほか、計３点であった。

第７号住居跡（第20図）

C―17グリッドに位置する。第１号住居跡、第12・38号土坑を切り、第11・39号土坑、および第１号掘立柱建物跡Ｐ２に切られている。

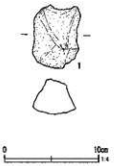
検出範囲内にカマドは確認されなかったが、周壁溝が巡っていることから住居跡と判断した。

北東コーナーと南東コーナー部分が検出されたのみであり、西側部分は失われている。



SJ5
1　暗褐色土　地山ブロック粒子・焼土粒子少　粘性ややあり
2　褐色土　地山粒子・焼土粒子少　やや砂質
3　暗褐色土　地山粒子少　粘性ややあり

第16図　第５号住居跡



第17図　第５号住居跡出土遺物

本住居跡の規模は、南北方向は2.30ｍであるが、東西方向については2.47ｍまでの確認にとどまる。確認面からの深さは0.13～0.21ｍである。住居壁面の立ち上がりは、比較的急である。床面に硬化は認められなかった。

カマドが確認されていないため、住居の主軸方向は不明であるが、長軸方向については、N-89°-Wを指す。土層断面における１～３層とも、自然堆積であると考えられる。

カマド以外の施設として、周壁溝が検出されている。周壁溝は、北壁・南壁ともに部分的に途切れている。規模は、幅８～22cm、深さ５cm前後であり、長さについては446cmまでの確認である。

遺物は出土しなかった。

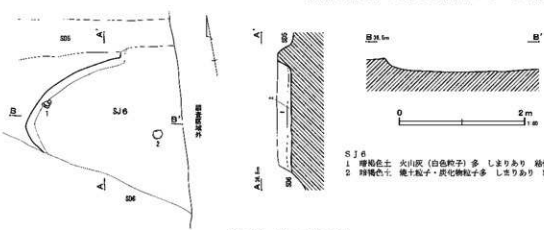
第６号住居跡（第21図）

Ｃ―11グリッドに位置する。Ｃ―11グリッドＰ５に切られている。本住居跡の確認面の上層には、浅間Ｂ軽石を含む皿層は検出されなかった。

北東コーナーと南東コーナー部分が検出されたのみであり、住居跡の西側は大部分が調査区外となっている。

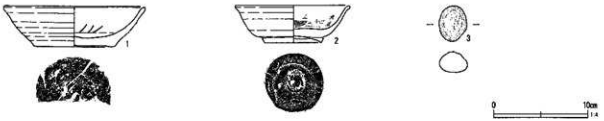
本住居跡の規模は、南北方向は1.98ｍであるが、東西方向については0.95ｍまで確認されたのみであった。

確認面からの深さは0.06～0.20ｍである。東壁の方位は、N-4°-Wを指す。住居壁面の立ち上がりは、比較的急であった。上層断面の１・２層は、人為的



SJ6
1　暗褐色土　火山灰（白色粒子）多　しまりあり　粘性なし
2　暗褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多　しまりあり　粘性なし

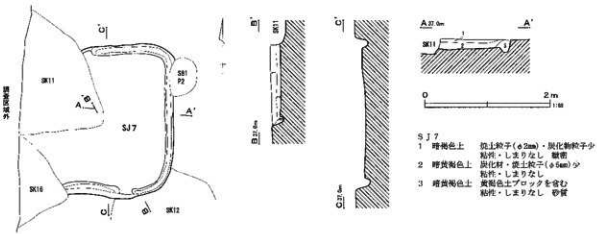
第18図　第６号住居跡



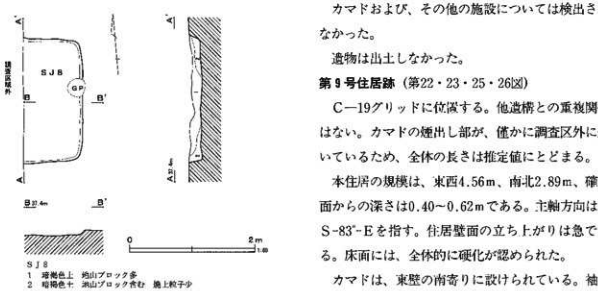
第19図　第６号住居跡出土遺物

第６表　第６号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存%	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	ロクロ土師器	坏	(15.0)	4.3	(8.4)	213.8	40	雲、角	普通	にぶい橙		21-8
2	ロクロ土師器	高台付坏	(12.2)	4.0	(6.2)	157.8	85	雲、角	普通	にぶい橙	内面黒色処理か	21-9
3	石製品	不明品	長3.8幅3.0厚2.2重12.8								軽石製	



第20図　第７号住居跡



第21図　第８号住居跡

埋め戻しの可能性が考えられる。

カマドおよび、その他の施設については検出されなかった。

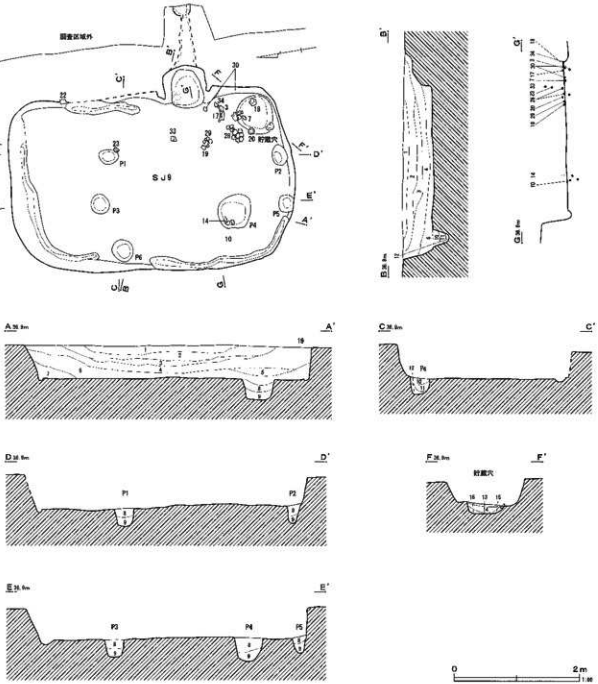
遺物は出土しなかった。

第９号住居跡（第22・23・25・26図）

C―19グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。カマドの煙出し部が、僅かに調査区外に続いているため、全体の長さは推定値にとどまる。

本住居の規模は、東西4.56m、南北2.89m、確認面からの深さは0.40～0.62mである。主軸方向は、S-83°-Eを指す。住居壁面の立ち上がりは急である。床面には、全体的に硬化が認められた。

カマドは、東壁の南寄りに設けられている。袖部は、僅かではあるが両袖ともが遺存していた。袖部の住居壁面からの残存規模は、左袖が17cm、右袖が



SJ9

1	暗褐色土	焼土粒子少　炭化物粒子微量　しまりやや強　粘性弱
2	暗褐色土	焼土粒子・焼土ブロック（φ1.5cm）・ 炭化物粒子・炭化物（φ2cm）少 しまりやや弱　粘性弱
3	黒褐色土	炭化物（φ2cm）炭化物粒子多 焼土粒子・焼土ブロック（φ1cm）少 しまりやや強　粘性やや弱
4	褐色土	焼土粒子・炭化物粒子微量　しまり強　粘性弱
5	褐色土	炭上粒子微量　しまりやや強　粘性やや弱
6	にぶい黄褐色土	焼土粒子・炭化物粒子微量　しまりやや弱　粘性強
7	褐色土	炭上粒子微量　しまりやや強　粘性やや弱

P1～P5

8	褐色土	焼土粒子・炭化物粒子少　しまりやや強　粘性弱
9	褐灰色土	炭化物粒子微量　しまりやや弱　粘性弱　シルト質

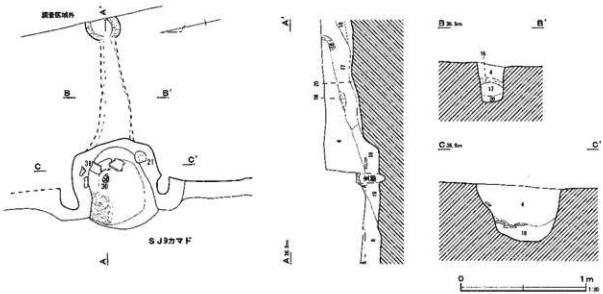
P6

10	暗褐色土	炭上粒子微量　しまり弱　粘性やや強
11	褐色土	褐灰色土ブロック（φ0.5～1.0cm）多　しまりやや弱　粘性強
12	にぶい黄褐色土	褐色灰土ブロック（φ0.5～1.0cm）少　焼土粒子微量 しまり強　粘性弱

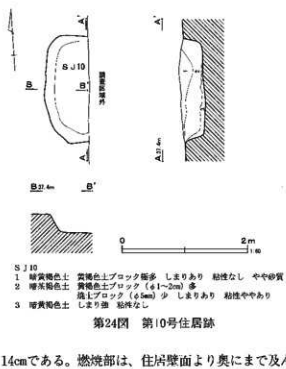
貯蔵穴

13	暗褐色土	しまり強　粘性弱　6層と共通
14	暗褐色土	焼土粒子・炭化物粒子・炭化物材少　しまり弱　粘性強
15	褐色土	炭化物粒子・焼土粒子微量　しまり弱　粘性やや強
16	カマド天井部 カマド	
17	褐色土	焼土粒子・炭化物粒子多　焼土ブロック（φ1cm）少
18	黒褐色土	焼土粒子・炭化物粒子多
19	にぶい黄褐色土	焼土粒子・炭化物粒子多　カマド材（φ2～3cm）多
20	暗褐色土	炭上粒子・炭化物粒子微量

第22図　第9号住居跡(1)



第23図　第９号住居跡(2)



第24図　第10号住居跡

14cmである。燃焼部は、住居壁面より奥にまで及んでいる天井部は残っていないものの、袖部の内側壁面・奥壁の立ち上がりは急であり、全体的に長方形の箱型を呈しているといえる。規模は、奥行き68cm、幅52cmを測り、床面との高低差は殆どみられない。10cm程の段を経て、煙道部に続く。確認面からの深さは42cmを測る。

なお、底面を４cm程掘り込んで、石製の支脚が自立した状態で検出された。この支脚の法量は、長さ20.5cm、幅9.5cm、厚さ4.7cmである。道部先端から煙出し部にかけて、一部天井部が遺存していた。

鉢の部分では、土圧で押し潰された結果であるのか、楕円形を呈するトンネル状であった。煙道部底面は、燃焼部との境をなす段から、煙出し部手前までに18cm上昇しており、壁面の傾斜は比較的急であるといえる。一部分ではあるが、煙出し部が検出された。

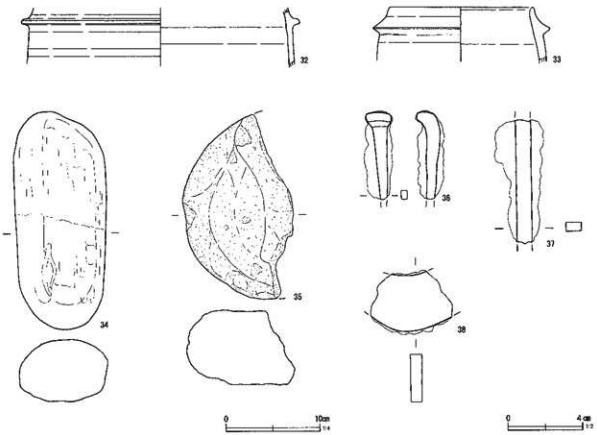
確認できた範囲内からみて、径は30cm程であると推測される。燃焼部・煙道部・煙出し部とも、内面は被熱による赤色硬化が顕著であった。

カマド以外の施設としては、貯蔵穴・ピット・周壁溝などが検出された。

貯蔵穴は、カマド右袖側の南東コーナーにおいて確認された。平面形は楕円形で、径60×57cm、床面からの深さ19cmで、浅い椀状を呈する。ピットは６基検出された。

Ｐ１は楕円形で径21×36cm、床面からの深さ26cm、Ｐ２は楕円形で径24×36cm、床面からの深さ31cm、Ｐ３は円形で径30×33cm、床面からの深さ28cm、Ｐ４は楕円形で径51×54cm、床面からの深さ38cm、Ｐ５は円形で径24×27cm、床面からの深さ25cm、Ｐ

第25図　第9号住居跡出土遺物(I)



第26図　第９号住居跡出土遺物(2)

６は円形で径33×34cm、床面からの深さ26cmを測る。Ｐ６については、住居の出入り口の梯子穴の可能性が考えられる。

土層断面における１・２層は、梯子の抜き取りの痕跡、３層は、梯子のための裏込め土であろうか。

周壁溝は、途切れ途切れの状態で３箇所存在していた。東壁では集壁溝が短く、幅12～15cm、床面からの深さ５cm、長さ118cmを測る。

北壁では北西コーナーまで巡って途切れる。幅８～20cm、床面からの深さ５～８cm、長さ260cmを測る。西壁では南西コーナーまで巡って途切れる。幅８～20cm、床面からの深さ７～20cm、長さ245cmを測る。貯蔵穴近くから出土した土器は、床面直上であった。

図化し得た遺物は比較的多く、土師器坏・高台付埦・羽釜のほか、鉄製品・石製品など、合わせて38点であった。

以上の遺物の他に、炉内滓10点（311.1ｇ）と、鉄塊系遺物４点（164.1ｇ）・炉壁１点（3.5ｇ）などが出土したが、いずれも図化には至らなかった。

第10号住居跡（第24図）

Ｄ－12グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、西端部が検出されたのみであり、遺構の大部分が調査区外である。規模は、南北は1.74ｍであるが、東西については0.72ｍまでの確認にとどまる。

カマドは検出されず、しかも住居のプランは歪んでいるため、住居の平面形が方形であるのか長方形であるのか、さらには住居の主軸方向についても不明である。確認面からの深さは、0.27～0.36ｍを測る。住居壁面の立ち上がりは、比較的急であるといえる。

検出範囲が小さいこともあってか、カマド以外の施設は検出されなかった。土層断面の第１層は、人

第７表　第９号住居跡出土遺物観察表（第25・26図）

番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	重量	残存%	胎　土	焼成	色　調	出土位置・備考	図　版
1	ロクロ土師器	坏	(15.0)	4.5	—	14.0	破片	雲、角	普通	にぶい黄橙		28-1
2	ロクロ土師器	坏	(15.8)	3.4	—	38.0	破片	雲、角	普通	橙		28-1
3	ロクロ土師器	坏	(15.0)	3.4	—	9.1	破片	雲、角	普通	にぶい橙		28-1
4	ロクロ土師器	坏	(11.6)	4.0	—	23.5	10	雲、角	普通	にぶい橙	内面黒色処理か	28-1
5	ロクロ土師器	坏	(13.8)	3.6	—	10.5	破片	雲、角	普通	浅黄橙		28-1
6	ロクロ土師器	坏	(15.0)	2.2	—	6.2	破片	雲、角	普通	橙		28-1
7	ロクロ土師器	坏	(14.6)	3.9	—	16.7	破片	雲、角	普通	にぶい橙		28-1
8	ロクロ土師器	坏	(11.2)	2.0	—	5.5	破片	雲、角	普通	浅黄橙		28-1
9	ロクロ土師器	坏	(14.0)	4.0	—	27.6	10	雲、角	普通	褐		28-1
10	ロクロ土師器	坏	(12.0)	3.7	—	24.3	破片	雲、角	普通	にぶい黄橙		28-1
11	ロクロ土師器	坏	—	1.1	(6.3)	38.9	10	角	普通	明赤褐		26-1
12	ロクロ土師器	小　皿	—	0.7	(4.4)	9.3	10	雲、角	普通	橙		26-1
13	ロクロ土師器	小　皿	—	0.8	(5.0)	5.7	破片	雲、角	普通	橙		26-1
14	ロクロ土師器	坏	—	1.5	(6.0)	17.1	10	雲、角	不良	灰白	P 4	26-1
15	ロクロ土師器	坏	—	0.5	(5.0)	14.5	破片	雲、角	普通	にぶい橙		26-1
16	ロクロ土師器	坏	—	1.2	(5.8)	22.2	10	雲、角	普通	浅黄橙		26-1
17	ロクロ土師器	高台付坏	(12.0)	4.3	5.8	130.1	30	雲、角	普通	浅黄橙		21-10
18	ロクロ土師器	高台付坏	13.6	5.0	—	166.1	70	雲、角	普通	橙		22-3
19	ロクロ土師器	高台付坏	12.2	5.4	5.9	150.8	100	雲、角	普通	橙		22-2
20	ロクロ土師器	高台付坏	—	6.9	7.2	261.1	45	雲、角	普通	にぶい黄橙		22-5
21	ロクロ土師器	高台付坏	—	4.6	7.0	139.6	50	雲、角	普通	にぶい黄橙	カマド	22-4
22	ロクロ土師器	高台付坏	—	2.3	7.4	109.9	20	雲、角	普通	にぶい黄橙	内面黒色処理か	22-6
23	ロクロ土師器	高台付坏	—	4.3	8.5	110.9	30	雲、角	普通	橙		26-2
24	ロクロ土師器	高台付坏	—	2.9	(7.4)	31.7	破片	雲、角	普通	橙		26-2
25	ロクロ土師器	高台付坏	—	2.5	(8.2)	33.5	破片	雲、角	普通	橙		26-2
26	ロクロ土師器	高台付坏	—	2.5	(6.4)	22.8	10	雲	普通	橙	粘土痕あり	26-2
27	ロクロ土師器	高台付坏	(10.0)	3.5	—	12.4	破片	雲、角	普通	橙	内面黒色処理か	28-1
28	須　恵　器	高台付坏	13.4	5.3	—	155.2	90	雲、角	普通	灰黄		22-1
29	須　恵　器	高台付坏	(12.6)	4.8	6.0	148.4	40	雲、角	普通	灰	貯蔵穴	22-7
30	上　師　器	甕	(20.0)	17.7	—	710.1	20	雲、角	普通	灰褐	カマド	24-1
31	土　師　器	甕	(20.2)	6.8	—	90.1	破片	雲、角	普通	橙	カマド	25-2
32	土　師　器	羽　釜	—	6.3	—	45.4	破片	雲	普通	橙		25-1
33	土　師　器	羽　釜	(15.3)	6.9	—	48.0	破片	雲、角	普通	にぶい橙		25-1
34	石　製　品	支　脚	長23.0	幅9.7	厚6.5	重2349.6						
35	石　製　品	不明品	長19.5	幅11.7	厚7.9	重1100.4					貯蔵穴　軽石製	
36	鉄　製　品	釘	長(4.6)	幅1.4	厚0.7	重10.4						28-2
37	鉄　製　品	不明品	長(6.5)	幅0.8	厚0.4	重34.1					棒状	28-2
38	鉄　製　品	不明品	長(4.3)	幅3.0	厚0.6	重35.6					延板状	28-2

為的埋め戻しであろうか。また、土層断面の３層は、住居の貼床の崩れたものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

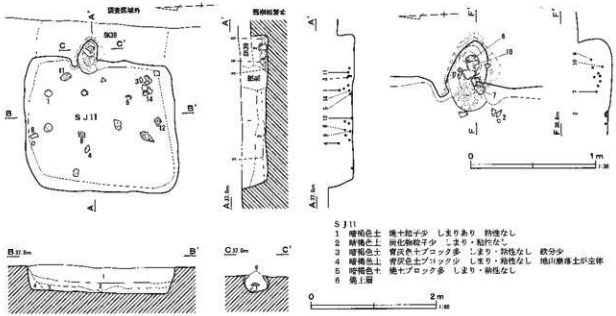
第11号住居跡（第27・28図）

C・D—14グリッドに位置する。第38号土坑を切っている。住居跡のプラン全体が残されている。

住居の規模は、東西1.95m、南北2.25m、確認面からの深さは0.41～0.50mである。主軸方向は、S-89°-Eを指す。住居壁面の立ち上がりは、比較的急であるといえる。土層断面の５層は、天井崩落部と考えられる。

カマドは、東壁の北寄りに設けられている。僅かではあるが、カマド袖部は左右とも遺存していた。

住居壁面からの残存規模は、左袖が15cm、右袖が10cmである。燃焼部は、住居壁面よりも奥にまで及んでおり、煙道部を含めた平面規模は、奥行き30cm、



第27図　第11号住居跡

幅56cm、床面からの深さは45cmであり、燃焼部底面・煙道部底面とも、床面との高低差は認められず水平である。

燃焼部の壁面・底面、煙道部の壁面・底面、および焚口部に相当する部分では、被熱による赤色硬化が顕著であった。

カマド以外の施設は検出されなかった。遺物は住居跡内にまとまりなく分布しているが、カマド内遺物のほかは、いずれも数cm～10cmほど浮いた状態で出土した。

図化し得た遺物は、土師器坏・高台付埦・羽釜、砥石など計14点であった。以上の遺物の他に、炉内滓2点（184.0g）が出土したが、図化には至らなかった。

第12号住居跡（第29・30図）

調査区南側、C－12グリッドに位置する。住居の西側部分の多くが調査区外に位置している。本住居跡は、上部が大きく攪乱されているが、深度の違いから住居跡のプランを窺うことができる。

本住居跡の規模は、南北は2.98mであるが、東西については1.08mまでの確認である。確認面からの深さは0.28～0.41mを測り、主軸方向は、N-87°-Eを指す。住居壁面の立ち上がりは、比較的急であるといえる。

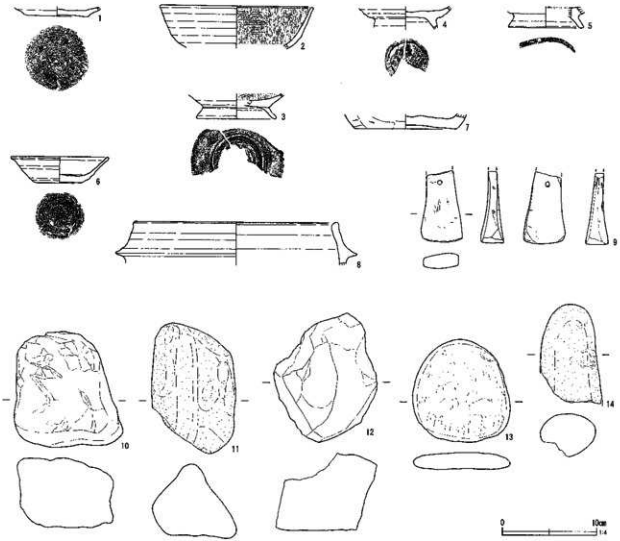
カマドは、東壁の南寄りに設けられている。カマド袖部は遺存していなかった。燃焼部は、住居壁面よりも奥にまで及んでおり、煙道部を含めた平面規模は、住居壁面からの奥行き62cm、幅52cm、床面からの深さは43cmである。

煙道部底面は、床面との高低差は認められず水平である。煙出し部では、壁面が屈曲している。燃焼部の壁面・底面、煙道部・煙出し部の壁面、および焚口部に相当する部分では、被熱による赤色硬化が顕著であった。

カマド以外の施設としては、ピット4基と周壁溝が検出された。

P1は、長楕円形に近い不整形で径24×72cm、床面からの深さ10cm、ピット底面に焼土・炭・灰を含む。P2は、楕円形で径27×30cm、床面からの深さ15cmである。位置的にカマド燃焼部の底面であると推測される。そしてピット底面には、カマド天井部の崩落土と思われる焼土ブロックが含まれていた。

P3は不整形で、径30×54cm、床面からの深さ10cm、位置的にみて貯蔵穴の可能性が考えられるが、

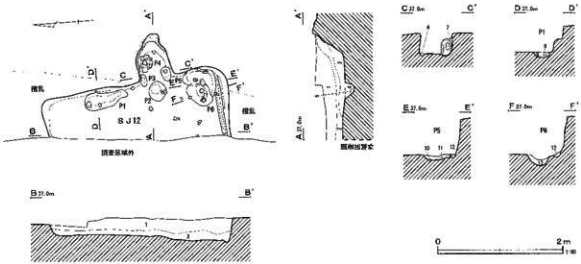


第28図　第11号住居跡出土遺物

きわめて浅いことから、貯蔵穴とは考えにくいというのが、調査時の所見である。P 4は、楕円形で径36×48cm、床面からの深さ19cmを測る。P 3・4は、ともに南東コーナーに位置している。2基としたが、あるいは単独の遺構の可能性も否定できない。

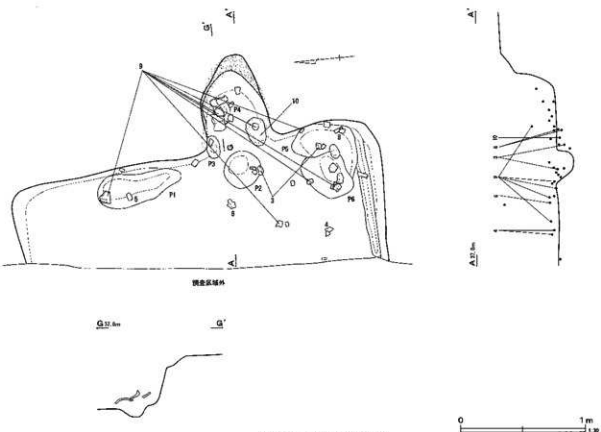
周壁溝は、南壁においてのみ検出された。確認できた長さは104cm、幅7～10cm、床面からの深さ5～10cmである。

図化し得た遺物は、坏・甕など、合わせて9点であった。



SJ12
1　褐色土　炭化物粒子・焼土ブロック少　しまりあり　粘性なし
2　暗褐色土　黄灰色ブロック多　しまりあり　粘性なし
3　暗褐色土　カマドの天井崩落土の焼土ブロック多　炭化物粒子・炭色土多　しまり・粘性なし
4　黒褐色土　炭化物・焼土ブロック多　粘性ややあり
5　褐色土　炭化物少　しまりややあり
SJ12カマド
6　黒色土　炭化物・焼土粒子多　しまりなし
7　暗褐色土　炭化物・焼土粒子少

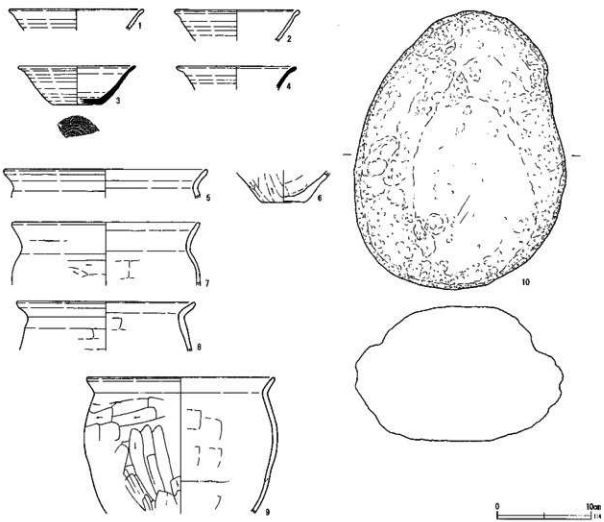
SJ12 Pit1
8　黒褐色土　SJ・12P1・P2に同じ
9　赤褐色土　焼土・炭化少
SJ12 Pit5
10　黒褐色土　炭化物・焼土ブロック多　粘性ややあり
11　褐色土　炭化物少　粘性ややあり
12　暗褐色土　粘性ややあり　四層覆土
SJ12 Pit6
13　褐色土　黄灰色粘土ブロック多　焼土粒子少　粘性あり



第29図　第12号住居跡

第８表　第11号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存%	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	ロクロ土師器	坏	—	1.0	6.8	54.7	20	雲、角	普通	橙		26-1
2	ロクロ土師器	高台付坏か	(16.2)	4.5	—	57.8	15	雲、角	普通	にぶい橙	カマド	28-1
3	ロクロ土師器	高台付坏	—	2.7	8.6	65.5	10	角	普通	にぶい橙	カマド　内面黒色処理	26-2
4	ロクロ土師器	高台付坏	—	2.4	—	76.6	20	雲、角	普通	橙		26-2
5	ロクロ土師器	高台付坏	—	2.2	(6.6)	32.3	破片	雲、角	良好	にぶい黄橙	内面黒色処理	26-2
6	ロクロ土師器	小皿	10.4	2.8	4.6	74.2	80	雲、角	普通	にぶい褐	カマド	22-8
7	土師器	甕	—	1.6	(11.0)	76.0	破片	雲、角	普通	褐	カマド	25-2
8	土師器	羽釜	(21.6)	4.6	—	46.9	破片	雲、角	普通	灰黄褐		25-1
9	石製品	砥石	長7.5幅4.4厚2.5重79.5									23-2
10	石製品	支脚か	長12.2幅11.3厚7.3重1507.2								カマド	
11	石製品	不明品	長11.7幅8.9厚7.6重1188.4									
12	石製品	不明品	長12.7幅11.0厚8.1重1286.4									
13	石製品	不明品	長10.7幅10.3厚1.8重326.3									
14	石製品	不明品	長10.5幅6.0厚4.5重360.2									



第30図　第12号住居跡出土遺物

第９表　第12号住居跡出土遺物観察表（第30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	ロクロ土師器	坏	(14.0)	2.3	—	12.4	破片	密、角	普通	明褐		28-1
2	ロクロ土師器	坏	(13.0)	3.3	—	11.5	破片	雲、角	普通	にぶい黄褐	P３	28-1
3	須恵器	坏	(12.4)	4.1	(5.2)	26.4	20		普通	灰	在地	26-1
4	須恵器	坏	(12.6)	2.5	—	8.6	破片	雲、角	普通	黄灰		28-1
5	土師器	甕	(20.6)	3.0	—	14.9	破片	雲、角	普通	褐灰		25-2
6	土師器	甕	—	3.4	(4.6)	39.6	破片	密、角	普通	にぶい橙		25-2
7	土師器	甕	(19.8)	6.8	—	22.2	破片	雲、角	普通	にぶい黄橙	P２	25-2
8	土師器	甕	(19.0)	5.2	—	24.4	破片	密、角	普通	褐灰		25-2
9	土師器	甕	(20.0)	14.5	—	322.5		雲、角	普通	にぶい褐	P３	25-2
10	石製品	不明品	—	—	—	6600.0					軟石製カマド袖構築材	

２．掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第31図）

Ｃ―16・17グリッドに位置する。４基のピットのうち、Ｐ３とＰ４には時期差があることから、３基のピットが直線的に並んでいると推定した。そして、３基のピットは、同一の造構に伴うピットであると見なした。

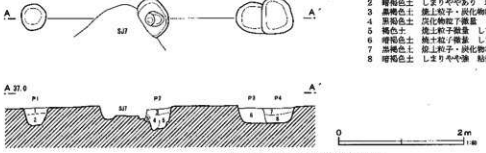
さらに、Ｐ２には柱痕跡（４層）が認められることから、柵列跡または掘立柱建物跡の桁もしくは梁の痕跡と判断した。Ｐ２は、西側部分が３分の１ほど、第７号住居跡に切られていた。調査範囲が狭いためか、あるいは周囲に他遺構が多いためか、このピットの並びに続くものや、対応するものは検出されなかったが、調査時の所見から、掘立柱建物跡として扱った。

各ピットの平面形・規模を、以下に列挙する。

Ｐ１は、円形で径38×40cm、確認面からの深さ26cm、Ｐ２は、円形と推定される。径(55)×59cm、確認面からの深さ29～32cm、Ｐ３は、楕円形と推定される。径47×（53）cm、確認面からの深さ28cm、Ｐ４は、円形で径47×58cm、確認面からの深さ28cmである。

Ｐ２の、柱痕跡（４層部分）を基点とした各ピットの柱間は、Ｐ１―Ｐ２間で1.9m、Ｐ２―Ｐ３間で1.7m、Ｐ２―Ｐ４間で2.0mである。このピット列の示す方位は、N-53°-Wである。

いずれのピットからも、遺物は出土しなかった。



SB1
1　暗褐色土　焼土・炭化物粒子（φ1mm）少
　　しまりややあり　粘性なし
2　暗褐色土　しまりややあり　粘性なし　緻密
3　黒褐色土　焼土粒子・炭化物粒子を少　しまりやや強　粘性弱
4　黒褐色土　炭化物粒子微量　しまり弱　粘性強
5　褐色土　焼土粒子微量　しまり強　粘性やや強
6　暗褐色土　焼土粒子微量　しまりやや強　粘性強
7　黒褐色土　焼土粒子・炭化物粒子微量　しまりやや強　粘性弱
8　暗褐色土　しまりやや強　粘性弱　均一的に酸化鉄混入

第31図　第１号掘立柱建物跡

3．土坑

第1号土坑（第32・35図）

D－9グリッドに位置する。他遺構との重複はないが、東側部分は調査区域外に続く。そのため、平面形と主軸方向は不明である。

南北方向の断面形を呈する。規模は、南北は155cm、東西は50cmまでの確認である。確認面からの深さは33cmを測る。

ロクロ土師器の、高台付埦の小破片が1点出土したが図化には至らず、図化し得たのは土錘1点（1）のみであった。

第2号土坑（第32・35図）

D－8グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、本遺構の東側部分が調査区域外に出ている。

そのため平面形が隅丸方形、または隅丸長方形であるのかは不明である。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈する。

遺構の規模は、南北方向は172cmであるが、東西方向は180cmまでの確認にとどまる。確認面からの深さは21cm、主軸方向は不明である。

土層断面における1・2層は、自然堆積であると考えられる。

出土した遺物は、ロクロ土師器1点（2）のみであった。

第3号土坑（第32図）

D－8グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は円形で、断面形は底面の平坦な皿状を呈する。

遺構の規模は74×76cm、確認面からの深さは10cmである。

遺物は出土しなかった。

第4号土坑（第32図）

D－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は長方形、断面形は底面が平坦な逆台形を呈する。

遺構の規模は82×144cm、確認面からの深さは29cmを測り、主軸方向は、N-82°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第5号土坑（第32図）

D－7グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は不整形、断面形は緩面の平坦な皿状を呈する。

遺構の規模は48×80cm、確認面からの深さは17cmを測る。主軸方向は、N-17°-Eを指す。

出土した遺物は、石片1点であった。

第6号土坑（第32図）

C－16グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は楕円形、断面形は底面が平坦な逆台形を呈する。

遺構の規模は76×94cm、確認面からの深さは42cmを測り、主軸方向は、N-80°-Wを指す。

各土層は、自然堆積によるものであると考えられる。

遺物は出土しなかった。

第7号土坑（第32図）

C－16グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は長楕円形、断面形は底面の平坦な逆台形を呈する。

遺構の規模は112×174cm、確認面からの深さは39cmを測り、主軸方向は、N-87°-Wを指す。

各土層は、自然堆積によるものであると考えられる。

遺物は出土しなかった。

第8号土坑（第32・35図）

C－17グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は長楕円形、断面形は底面の平坦な逆台形を呈する。この土坑の中央には、平面円形、断面U字形を呈する、ピット状の小穴が存在している。

それぞれの規模は、土坑が106×148cm、確認面からの深さ38cm、ピットが38×40cm、土坑底面からの

深さ18cmであり、土坑の主軸方向は、N-15°-Wを指す。人為的に埋め戻されている可能性が考えられる。

出土した遺物は、土師器坏、須恵器坏の破片であり、その内図化し得た遺物は2点（3・4）であった。

第9号土坑（第32図）

C—19グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。遺構の西側部分は、調査区域外に続いている。

平面形は円形、または楕円形を呈すると推定される。南北方向の断面形は、底面の平坦な逆台形に近い。

遺構の規模は、東西方向47cm、南北方向153cmであり、確認面からの深さ41cmである。主軸方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

第10号土坑（第32図）

C—19グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、遺構の西側部分は、調査区外に続いている。

検出範囲からみる範囲内では、平面形は隅丸長方形が想定される。断面形は底面に緩やかな窪みをもつ浅い逆台形を呈する。

遺構の規模は、東西方向120cm、南北方向126cm、確認面からの深さは15～20cmであるが、主軸方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

第11号土坑（第32・35図）

C—16・17グリッドに位置する。遺構の西側部分は調査区域外に続く。第7号住居跡を切っている。

平面形は不整形と推定される。断面形は壁面の立ち上がりが急な逆台形を呈している。

確認範囲内における遺構の規模は、東西方向137cm、南北方向218cm、確認面からの深さは29cmである。主軸方向については不明である。

土層は、自然堆積によるものであると考えられる。

出土した遺物は、長頸壺と思われる須恵器1点（5）であった。

第12号土坑（第32・35図）

C—17グリッドに位置する。第7号住居跡に切られている。平面形は角張った楕円形に近く、断面形は底面が平坦な皿状を呈する。

遺構の規模は、長軸方向で216cm、短軸方向で188cm、確認面からの深さは11cmを測る。長軸方向は、N-33°-Wを指す。

出土した遺物は、ロクロ土師器の高台付埦2点（6・7）と、角閃石安山岩1点の計3点（1～3）であった。

なお、6は遺構確認面において検出されたものである。

第13号土坑（第32図）

D—9・10グリッドに位置する。第10号溝跡に切られているが、遺構の深度の違いから、形状・規模を知ることができる。

平面形は楕円形、断面形は壁面の立ち上がりが急な逆台形を呈する。遺構の規模は86×111cm、確認面からの深さは42cmである。長軸方向は、N-12°-Eである。

遺物は出土しなかった。

第14号土坑（第32図）

C—11グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面図では、2基の遺構が重複しているかのような表現となっているが、土層断面からみて1つの遺構であると判断した。

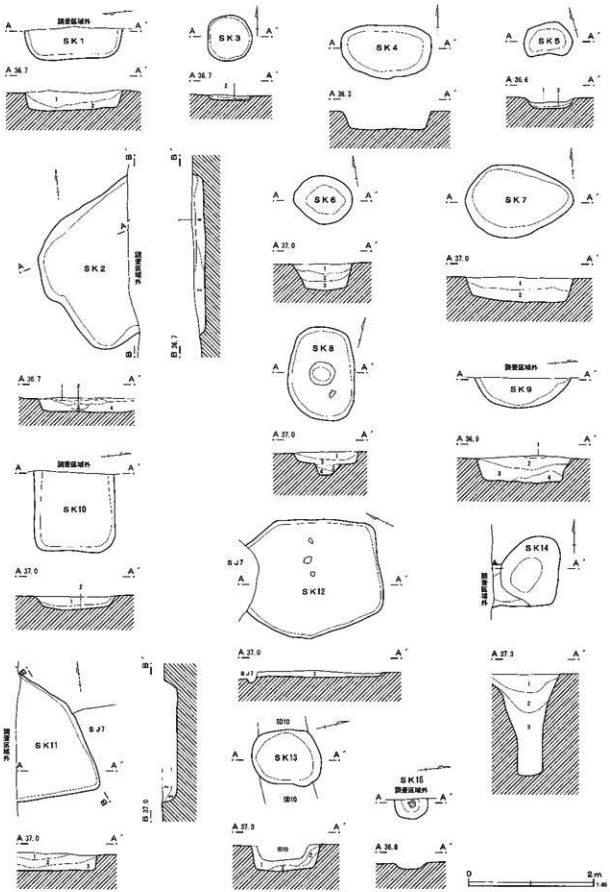
平面形は不整形に近い楕円形、断面形はロート状を呈する。遺構の規模は、長軸方向145cm、確認面からの深さは162cmである。形状・規模からみて、井戸跡の可能性が高いと思われる。

遺物は出土しなかった。

第15号土坑（第32図）

C—20グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、遺構の東側部分が調査区外に続いている。

平面形は円形、または楕円形を呈すると思われる。断面形は底面に丸みをもつ埦形を呈する。検出範囲


SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SJ7
調査区域外
予定区域内
A 36.7
A 36.3
A 36.6
A 37.0
A 36.9
A 37.3
A 36.8
B 36.7
B 37.0
0
2m
1:40

第32図　土坑(1)

内での平面規模は31×53㎝、確認面からの深さは10㎝である。

土壙底面から、被熱した緑泥片岩の破片が1点出土したが、図化には及ばなかった。

第16号土坑（第33・35・36図）

D―10グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、遺構の西側部分は調査区外に続いている。

平面形は隅丸方形、または隅丸長方形、断面形は底面に弱い凹凸をもった台形を呈する。確認面における平面規模は、東西方向155㎝、南北方向122㎝、確認面からの深さは68～80㎝である。

ちなみに、南北方向での底面規模は145㎝であった。

出土遺物は、ロクロ土師器・青磁・白磁のほか、土玉、角閃石安山岩・緑泥片岩、川原石などがあるが、これらは一括で投棄されたものと推測される。

この内で、図化し得たのは11点（8～18）であった。

なお、角閃石安山岩の中には、被熱しているものが、図化に及ばなかった1点と合わせ、計3点認められた。

土層断面における1～10層は、いずれも人為的埋め戻しと考えられるが、各土層には焼土や炭・灰などは検出されていない。また、土坑内面に被熱した形跡もみられない。

この点から、被熱した角閃石安山岩（16）は、土坑外で被熱したものと考えられる。

図化し得た遺物は、角閃石安山岩を含め計13点であった。また、これらの遺物のほかに、炉内滓の小破片（59.3g）1点が出土したが、図化には至らなかった。

第17号土坑（第33図）

C・D―11グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は円形で、断面形は逆台形を2段に重ねた形状を呈している。

1基の土坑としたが、土層断面の観察から、1・2層を覆土とする土坑と、3層を覆土とする土坑の2基が存在すると判断した。但し、別番号を付すことなく、土坑番号は1つとした。便宜上、1・2層を覆土とする土坑を上段の土坑、3層を覆土とする土坑を下段の土坑として記述する。上段の土坑は、平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。

上段の土坑の平面規模は97×98㎝、確認面からの深さは15㎝である。下段の土坑については、平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。平面規模は46×47㎝、確認面からの深さは25～30㎝であり、上段の土坑の底面からの深さは10～13㎝である。

上段・下段の土坑は、いずれも近世以降のものと推測される。

陶器と思われる小破片が1点出土したが、図化には至らなかった。

第18号土坑（第33図）

D―11グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は円形、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈する。

遺構の平面規模は84×94㎝、確認面からの深さは21㎝である。

なお、土坑内にはピット状の小穴が1箇所認められた。平面形は円形、断面形は皿状を呈する。平面規模は15×16㎝、確認面からの深さは21㎝であり、土坑の底面からの深さは10㎝である。

土層断面の観察から、人為的埋め戻しの可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

第19号土坑（第33図）

D―11グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、遺構の東側部分は、調査区域外に続いている。

平面形は円形、または楕円形が推定される。南北方向での断面形は、壁面の立ち上がりが緩やかな逆台形を呈する。遺構の平面規模は、東西方向が54㎝、南北方向が117㎝での確認であり、確認面からの深さは27㎝である。

遺物は出土しなかった。

第20号土坑（第33図）

D—12グリッドに位置する。D—12グリッドP１に切られている。平面形は円形で、断面形は底面が平坦な皿状を呈する。

遺構の平面規模は106×108cm、確認面からの深さは12cmである。上層断面図にみる１・２層ともに、自然堆積であると推測される。

遺物は出土しなかった。

第21号土坑（第33・36図）

C—14グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、遺構の西側部分が調査区域外に続いている。

そのため、全体的な平面形は不明であり、検出範囲からのみでは変則的な形状となっている。断面形は底面が平坦で、壁面の立ち上がりが急な逆台形を呈する。

遺構の平面規模は、東西方向で77cmと155cm、南北方向で155cmと246cm、確認面からの深さは33cmである。遺構内に、ピット状の小穴が３箇所みとめられているが、本遺構に伴うか否かは明確ではない。

土師器の甕の小破片が、１点（19）出土したのみであった。

第22号土坑（第33・36図）

C・D—14グリッドに位置する。遺構の東側部分は、調査区域外に続いており、さらに遺構の一部を、C—14グリッドP11に切られている。

平面形は不整形であり、断面形は底面が平坦で、壁面の立ち上がりが急な逆台形を呈する。遺構の規模は、南北方向が53～65cmであるが、東西方向は135cmまでの検出である。確認面からの深さは30～38cmである。

遺物は土師器甕の小破片、白磁碗、粘土塊が各１点ずつ出土したが、図化には至らなかった。図化し得た遺物は、ロクロ土師器の高台付埦と思われる破片１点（20）のみであった。

第23号土坑（第33図）

C—12グリッドに位置する。第25号土坑と重複しているが、新旧関係は捉えられなかった。平面形は円形を呈すると推定される。断面形は底面が平坦な逆台形を呈している。平面規模は(90)×92cm、確認面からの深さは19cmである。

遺物は出土しなかった。

第24号土坑（第33図）

C—12グリッドに位置する。第３号井戸跡に切られている。平面形は楕円形に近い不整形を呈する。

遺構内にピット状に近い窪みがあり、断面形も不整形を呈する。遺構の平面規模は113×116cm、確認面からの深さは23～35cmである。

遺物は出土しなかった。

第25号土坑（第33・36図）

C—12グリッドに位置する。第23号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は円形と推定される。断面形は浅い皿状を呈する。

遺構の平面規模は110×（112）cm、確認面からの深さは28cmである。

出土した遺物は、瀬戸産と推測される碗の破片１点（21）のみであった。

第26号土坑（第33図）

C—12グリッドに位置する。遺構の西側部分は、調査区域外に続いている。C—12グリッドP９に切られている。

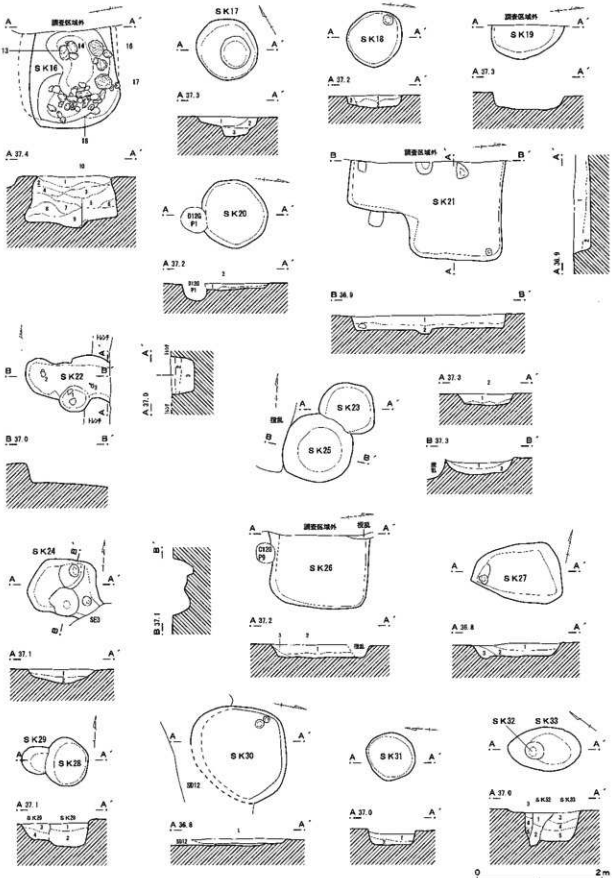
平面形は隅丸方形、または隅丸長方形と推定される。断面形は底面が平坦な逆台形を呈する。平面規模は、南北方向は155cmであるが、東西方向は115cmまでの確認である。確認面からの深さは20cmであった。主軸方向は、N-６°-E、またはN-84°-Wを指すと思われる。

遺物は出土しなかった。

第27号土坑（第33図）

C—14・15グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は不整形である。断面形は底面が比較的平坦で、壁面の立ち上がりが緩やかな逆台形を呈する。

遺構の平面規模は、東西方向が146cm、南北方向が


SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27
SK28
SK29
SK30
SK31
SK32
SK33
調査区域外
A 37.4
A 37.3
A 37.2
B 36.9
B 37.0
A 37.9
B 37.3
B 37.1
A 37.1
A 36.8
A 37.6
0
2m

第33図　土坑(2)

92cmで、確認面からの深さは19～23cmである。主軸方向は、N-74°-Eを指すと推測される。

土層断面にみる1～3層は、自然堆積であると考えられる。

遺物は出土しなかった。

第28号土坑（第33図）

C―13グリッドに位置する。第29号土坑を切っている。平面形は楕円形、断面形は底面に窪みをもつU字形を呈する。遺構の平面規模は70×80cm、確認面からの深さは45cmである。

遺物は出土しなかった。

第29号土坑（第33図）

C―13グリッドに位置する。第28号土坑に切られている。平面形は楕円形と推定される。断面形は底面が平坦で、壁面の立ち上がりが比較的緩やかな、逆台形であったと考えられる。

遺構の平面規模は44×（52）cm、確認面からの深さは33cmである。

遺物は出土しなかった。

第30号土坑（第33図）

C―15グリッドに位置する。第12号溝跡を切っている。遺構の全体像が検出されているものの、遺存状況は芳しくなく、推定部分が多い。

平面形は円形または楕円形を呈すると思われる。断面形は底面が平坦な浅い皿状を呈している。

遺構の平面規模は167×（145）cm、確認面からの深さは8～12cmである。

遺物は出土しなかった。

第31号土坑（第33・36図）

D―13グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は円形、断面形は底面が平坦で、壁面の立ち上がりが急な逆台形を呈する。

遺構の規模は76×80cm、確認面からの深さは25cmである。

出土した遺物は、土錘1点（22）のみであった。

第32号土坑（第33図）

C・D―13グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

調査時点では、上層断面の1・2層部分で1基、3～5層部分で1基の土坑と考えたが、両者は掘立柱建物跡の柱穴掘り方であると判断し、遺構名を1つと改めた。

しかし、この柱穴に続くもの、対応するものが認められないため、ここでは掘立柱建物跡としてではなく土坑として掲載する。

平面形は長楕円形、断面形は底面が平坦で、壁面の立ち上がりの急な逆台形を呈する。なお、柱痕跡の部分では、柱材の埋没の痕跡と推測される窪みが認められた。

遺構の平面規模は70×116cm、確認面からの深さは45cm、柱痕跡の部分で、51cmである。

出土した遺物は、土師器高台付埦1点であるが、図化には至らなかった。なお、この土器は柱痕跡部分以外からの出土である。

第34号土坑（第34・37図）

C・D―13グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

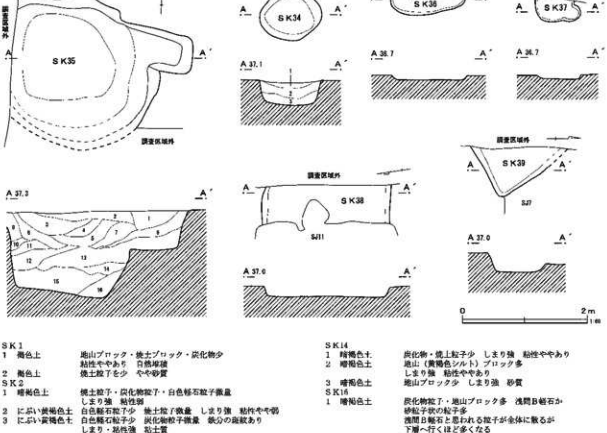
平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は底面が平坦で、壁面の立ち上がりが急な逆台形を呈する。平面規模は87×102cm、確認面からの深さは41cmである。

出土した遺物は、ロクロ土師器の高台付埦1点（23）のみであった。

第35号土坑（第34・37図）

C―15グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、西側と南側部分は調査区外に続いている。平面形は不整形、断面形も不整形を呈しており、2つの土坑が重複しているかの印象を受ける。平面遺構の規模は、南北方向は（245）cmであるが、東西方向は283cmまでの確認である。確認面からの深さは63～136cmである。主軸方向については不明である。

出土した遺物は、在地産の鉢や常滑産の甕のほか、角閃石安山岩・緑泥片岩などであるが、図化し得たのは6点（24～29）であった。



S K 1
1　褐色土　　地山ブロック・焼土ブロック・炭化物少
　　粘性ややあり　白色堆積
2　褐色土　　焼土粒子を少　やや砂質
S K 2
1　暗褐色土　　焼土粒子・炭化物粒子・白色軽石粒子微量
　　しまり強　粘性弱
2　にぶい黄褐色土　白色軽石粒子少　焼土粒子微量　しまり強　粘性やや弱
3　にぶい黄褐色土　白色軽石粒子少　炭化物粒子微量　鉄分の斑紋あり
　　しまり・粘性強　粘土質
4　褐灰色土　　焼土粒子・炭化物粒子微量　しまり強　粘性やや強
S K 3
1　黒褐色土　　焼土粒子・炭化物粒子少　白色軽石粒子微量
　　しまり強　粘性やや弱
2　褐色土　　焼土粒子・白色軽石粒子・白色軽石粒子微量
　　しまり強　粘性やや弱
S K 5
1　暗褐色土　　焼土粒子・炭化物粒子少　しまり強　粘性やや弱
2　暗褐色土　　炭化物粒子微量　しまり強　粘性やや強
S K 6
1　暗褐色土　　焼土・炭化物粒子（φ1mm）を含む　しまりあり　粘性なし
2　暗黄褐色土　焼土粒子・青炭色ブロック少　しまりあり　粘性なし
3　暗黄褐色土　2層より暗い　砂質
S K 7
1　暗褐色土　　炭化物粒子（φ5mm）少　しまりあり　粘性なし
2　暗黄褐色土　青炭色十粒子　しまりあり　粘性なし
S K 8
1　暗褐色土　　焼土ブロック多　炭化物粒子（φ5mm）少
　　しまり・粘性なし
2　暗黄褐色土　焼土ブロック少　黄褐色土(ローム分)をブロック状に含む
　　2層下位に鉄分多　しまり・粘性なし　砂質
3　黒褐色土　　焼土粒子・炭化物粒子微量　鉄分の斑紋あり
　　しまりやや弱　粘性弱
2　褐色土　　しまりやや強　粘性強
S K 9
1　褐色土　　焼土粒子微量　しまりやや強　粘性強　均一的に酸化鉄混入
2　黒炭色土　焼土粒子・炭化物粒子微量　しまりやや強　粘性非常に強
　　均一的に酸化鉄混入
3　にぶい黄褐色土　焼土粒子少　炭化物粒子微量　しまりやや強　粘性弱
4　黒褐色土　　炭化物粒子・炭粒子極多　焼土粒子少　しまり・粘性弱
S K 10
1　灰黄褐色土　白色軽石粒子少　焼土粒子微量　しまりやや強　粘性弱
2　暗褐色土　　地山ブロック（φ2～3cm）多　焼土粒子微量　しまり・粘性強
S K 11
1　黒褐色土　　暗褐色土ブロック・炭化物粒子（φ5mm）少
　　しまり・粘性なし
2　暗褐色土　　青炭色土ブロック少　しまり・粘性なし
3　暗褐色土　　炭化材（φ5mm）多　しまり・粘性なし　やや砂質
S K 12
1　黒褐色土　　焼土・粒子炭化物（φ2mm）少　しまり・粘性なし
　　下層に数分炭有
S K 13
1　暗褐色土　　焼土粒子・地山ブロック少　しまりややあり
2　褐色土　　炭化物微量　しまりややあり　シルト質
3　灰黄褐色土　焼土粒子少　しまりあり　粘性ややあり
S K 14
1　暗褐色土　　炭化物・焼土粒子少　しまり強　粘性ややあり
2　暗褐色土　　地山（黄褐色シルト）ブロック多
　　しまり強　粘性ややあり
3　暗褐色土　　地山ブロック少　しまり強　砂質
S K 16
1　暗褐色土　　炭化物粒子・地山ブロック多　浅間B軽石か
　　砂粒子状の粒子多
　　浅間B軽石と思われる粒子が全体に散るが
　　下層へ行くほど多くなる
2　暗褐色土　　地山ブロック多　1層より砂質　浅間B軽石か
　　砂粒子状の粒子多
　　浅間B軽石と思われる粒子が全体に散るが
　　下層へ行くほど多くなる
3　暗褐色土　　地山ブロック多　浅間B軽石か
　　砂粒子状の粒子極多　砂質
　　浅間B軽石と思われる粒子が全体に散るが
　　下層へ行くほど多くなる
4　褐色土　　炭化物粒子・地山ブロック含む　粘性あり
　　浅間B軽石を含まない
5　暗褐色土　　炭化物多　粘性あり　浅間B軽石を含まない
6　褐色土　　地山ブロック多　やや砂質　浅間B軽石を含まない
7　黒褐色土　　地山ブロック・炭化物・焼土粒子少　浅間B軽石を含まない
8　褐色土　　地山ブロック多　土器片を含む　浅間B軽石を含まない
9　黒褐色土　　地山ブロック多　焼土粒子色十　粘性ややあり
　　浅間B軽石を含まない
10　褐色土　　地山ブロック色十を　浅間B軽石を含まない
S K 17
1　暗炭色土　　黄褐色土ブロック・浅間A軽石多
　　しまりややあり　粘性なし　砂質強
2　暗青炭色砂質土　火山灰（浅間A軽石）多　しまりあり　粘性なし
　　鉄分を含む　自然堆積
3　暗褐色土　　黄褐色土ブロック・炭化物粒子（φ1mm）多
　　しまりあり　粘性ややあり
　　*1層とは、土層は別の上坑の覆土と考えられる
　　*2この土坑とも近世以降のものと考えられる
S K 18
1　暗褐色土　　黄褐色土ブロック（φ5mm）多　焼土粒子少
　　しまりややあり　粘性なし
2　黒褐色土　　黄褐色土ブロック（φ5mm）多
　　しまりややあり　粘性なし
3　暗黄褐色土　黄褐色土ブロック（φ6cm）極多
　　しまり・粘性なし　地山が崩れたものと考えられる
　　*1層は人為的埋戻しか
S K 20
1　暗褐色土　　焼土粒子（φ1mm）多
　　しまりややあり　粘性なし　自然堆積
2　暗黄褐色土　地山層粒土多　しまりややあり　粘性なし
S K 21
1　暗褐色土　　焼土粒子・炭化物微量　しまり強　粘性弱
2　褐色土　　地山ブロック（φ1cm）少　しまり・粘性強

第34図　土坑(3)

S K22
1　黒褐色土　焼土ブロック（φ2cm）・地山ブロック（φ1cm）少
　　焼土粒子・炭化物粒子微量　しまりやや強　粘性弱
2　にぶい黄褐色土　焼土粒子・炭化物粒子・地山ブロック（φ2～5cm）少
　　しまりやや強　粘性弱
3　暗褐色土　焼土ブロック（φ0.5～3cm）・焼土粒子多
　　炭化物粒子・地山ブロック（φ1cm）少
　　しまりやや弱　粘性強
S K23
1　褐色土　炭化物・焼土粒子少　しまりややあり　粘性なし
2　黒褐色土　炭化物粒子を斑状に多　レンズ状に堆積
　　しまり・粘性なし
S K24
1　暗褐色土　焼土ブロック（φ5mm）少　しまりあり　粘性なし
2　暗褐色土　ロ・ムブロック多　しまりあり　粘性なし
S K25
1　暗褐色土　地山ブロック・焼土粒子少
2　暗褐色土　青灰色土ブロック少　しまりあり
S K27
1　暗褐色土　焼土粒子・炭化物粒子少　しまり強　粘性やや強
2　褐色土　焼土ブロック（φ0.5cm）微量　しまりやや強　粘性やや弱
3　暗褐色土　地山ブロック（φ1.0cm）多　しまり強　粘性弱
S K29
1　褐色土　白色粒子多　焼土粒子微量　しまり強　粘性弱
2　暗褐色土　地山ブロック（φ1.5～2cm）多　炭化物粒子微量
　　しまりやや強　粘性弱
3　暗褐色土　焼土粒子微量　しまり強　粘性弱
4　褐色土　しまりやや強　粘性弱　均一的に酸化鉄混入
S K30
1　灰黄褐色土　焼土粒子炭化物・粒子少　砂粒多　しまり非常に強
　　粘性弱　粘土質
S K31
1　暗褐色土　炭化物粒子多　しまりあり　粘性なし
2　褐色土　青灰色ブロック少　しまりあり　粘性なし
S K33
1　黒褐色土　焼土粒子・白色粒子少
2　にぶい黄褐色土　炭化物粒子・褐火色粒子ブロック（φ0.5cm）少
3　褐色土　炭化物粒子やや多
4　暗褐色土　地山ブロック（φ1cm）少
5　にぶい黄褐色土　地山ブロック（φ1cm）少　鉄分の斑紋あり
S K34
1　黒褐色土　焼土粒子微量
2　褐色土　地山ブロック（φ1cm）少
3　黒褐色土　地山ブロック（φ1cm）・炭化物粒子少
S K35
1　褐灰色土　白色粒子（虫喰A軟石か）多　焼土粒子微量
　　＊埋使の施設に石ものと思われる
2　褐色土　褐灰色土ブロック（φ1～3cm）少
　　焼土粒子微量　しまり強
3　褐色土　地山ブロック（φ0.5～1cm）多
　　焼土粒子微量　しまり強
4　暗褐色土　炭化物粒子・炭化物（φ0.5cm）多　焼土粒子微量
5　褐灰色土　地山ブロック（φ0.5～3cm）少　粘性強
6　黒褐色土　地山ブロック（φ0.5cm）少　炭化物粒子微量
7　暗褐色土　褐灰色土ブロック（φ3～4cm）多
　　地山ブロック（φ2cm）少
8　暗褐色土　地山ブロック（φ2～3cm）極多
　　褐灰色土ブロック（φ1～2cm）少
9　褐色土　地山ブロック（φ1cm）少　微土粒子微量
10　暗褐色土　炭化物極少少
11　褐色土　暗褐色ブロック（φ2cm）少
12　褐色土　地山ブロック（φ1cm）多　焼土粒子微量
13　黒褐色土　褐灰色土ブロック（φ2～3cm）多
　　焼土粒子・炭化物粒子微量　鉄分の斑紋あり
14　暗褐色土　地山ブロック（φ4～6cm）多
15　褐色土　褐灰色土ブロック（φ0.5～1cm）少
16　暗褐色土

第36号土坑（第34図）

D－8・9グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、遺構の東側部分が調査区域外に続いている。

平面形は不明であり、南北方向の断面形は、底面が平坦な浅い逆台形を呈する。

遺構の平面規模は、東西方向28cm、南北方向120cmまでの確認である。確認面からの深さは9cmである。

遺物は出土しなかった。

第37号土坑（第34図）

D－9グリッドに位置する。第5号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は不整形、断面形は底面が平坦な皿状を呈する。遺構の平面規模は、南北方向は73cmであるが、東西方向は73cmまでの確認である。確認面からの深さは6cmである。

遺物は出土しなかった。

第38号土坑（第34図）

C－14グリッドに位置する。遺構の東側部分は調査区域外に続き、西側部分は第11号住居跡に切られている。そのため平面形と長軸方向は不明である。南北方向の断面形は、底面が平坦で、壁面の立ち上がりが比較的緩やかな皿状を呈する。

遺構の平面規模は、南北方向は204cmであるが、東西方向は72cmまでの確認であった。確認面からの深さは18cmであった。

遺物は出土しなかった。

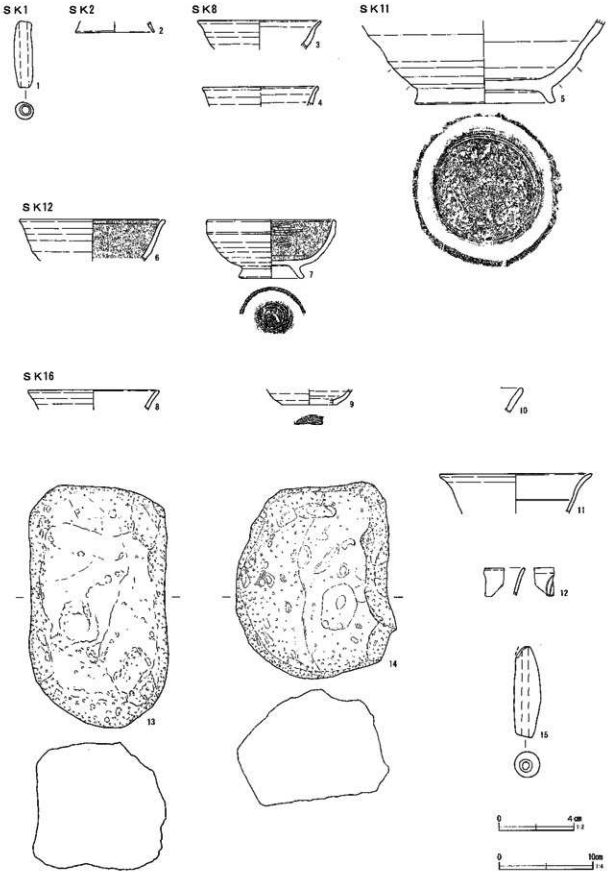
第39号土坑（第34図）

C－17グリッドに位置する。遺構の西側部分が調査区域外に続き、東側部分で第7号住居跡を切っている。

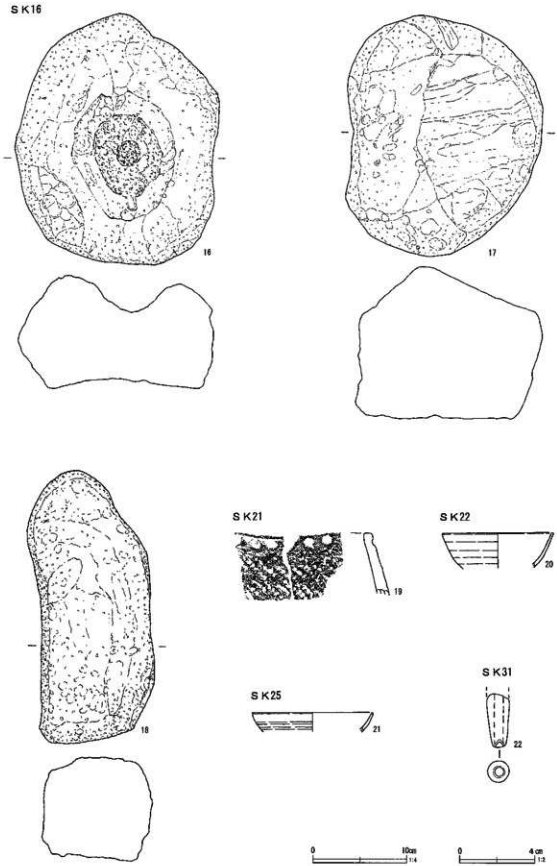
遺構の遺存部分が小さいため、平面形は不明である。南北方向の断面形は、底面が平坦で、壁面の立ち上がりが比較的緩やかな逆台形を呈する。

遺構の平面規模は、東西方向が76cm、南北方向が(156)cmまでの確認である。確認面からの深さは32cmであった。

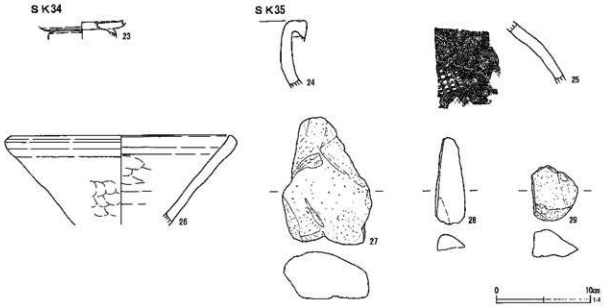
遺物は出土しなかった。



第35図　土坑出土遺物(1)



第36図　土坑出土遺物(2)



第37図　土坑出土遺物(3)

第10表　土坑出土遺物観察表（第35～37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存%	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土製品	上錘	孔径0.4長3.5幅0.95重3.1				100	角	普通	にぶい黄褐		24-6
2	ロクロ土師器	高台付埦	—	2.3	(8.4)	2.5	破片	密、角	普通	にぶい橙	高台部分	26-2
3	ロクロ土師器	坏	(13.1)	3.1	—	9.7	破片	雲、角	普通	にぶい橙		28-1
4	ロクロ土師器	坏	(12.3)	2.1	—	4.9	破片	密、角	普通	橙		28-1
5	陶器	片口鉢	—	9.8	14.0	942.0	10		普通	灰白	常滑　底部のみ	22-9
6	ロクロ土師器	高台付埦	(15.2)	4.4	—	20.7	破片	密、角	普通	にぶい橙	内面黒色処理	28-1
7	ロクロ土師器	高台付埦	(13.6)	6.2	(6.3)	264.1	40	雲	普通	にぶい黄橙	内面黒色処理	
8	ロクロ土師器	坏か	(14.0)	2.1	—	6.3	破片	密、角	普通	橙		28-1
9	土師器	甕	—	2.8	—	9.8	破片	雲、角	普通	にぶい黄橙		26-1
10	土師器	坏	—	1.7	(6.0)	8.0	破片	雲、角	普通	にぶい橙		28-1
11	白磁	碗	(16.4)	4.3	—	14.2	破片			灰白		24-5
12	青磁	碗	—	3.0	—	4.0	破片		普通	灰オリーブ		24-5
13	石製品	不明品	—	—	—	4200.0					軽石製	
14	石製品	不明品	—	—	—	3000.0					軽石製	
15	土製品	上錘	孔径0.35長4.8幅1.35重8.5残100					角	普通	にぶい黄橙	軽石製	24-6
16	石製品	凹石か	—	—	—	4000.0					軽石製	23-4
17	石製品	不明品	—	—	—	5200.0					軽石製	23-4
18	石製品	不明品	—	—	—	2600.0					軽石製	
19	土師器	甑	—	6.5	—	141.0	破片	密、角	普通	橙		23-5
20	灰釉陶器	埦	(11.8)	3.7	—	10.2	破片			灰白		28-1
21	磁器	埦	(12.8)	2.1	—	3.1	破片		普通	灰	瀬戸か	24-5
22	土製品	上錘	孔径0.45長(2.8)幅1.15重3.3残50					角	普通	にぶい黄褐		24-6
23	ロクロ土師器	高台付埦	—	1.9	—	19.6	破片	密、角	普通	橙		26-2
24	陶器	甕	—	7.3	—	67.8	破片		普通	褐灰	常滑	27-1
25	陶器	甕	—	—	—	113.4	破片		普通	灰白	常滑	
26	陶器	鉢	(23.6)	9.5	—	123.1	破片		普通	灰	在地	27-1
27	石製品	不明品	長12.8幅9.5厚5.0重318.2								軽石製	23-1
28	石製品	不明品	長9.0幅3.2厚1.5重57.6									23-2
29	石製品	不明品	長5.8幅4.9厚2.9重56.9								軽石製	23-2

4．井戸跡

第1号井戸跡（第38・40図）

D・E－3グリッドに位置する。他遺構との重複はないが、東側部分は調査区域外に続く。そのため、平面形は不明であるが、円形または楕円形と推定される。

遺構の平面規模は、東西方向1.56m、南北方向5.12mまでの確認にとどまる。壁面が、確認面から40cm程の部分で屈曲しているため、断面形は開口部の大きなロート状を呈している。底面での径は1.15mである。確認面からの深さは1.68～1.78mで、底面は平坦であった。

井戸跡内または井戸跡外に、覆い屋や出入り口などの付属施設の存在を、窺わせるような柱穴や、階段等をはじめとした痕跡は、認められなかった。

図化し得た遺物は8点であった。

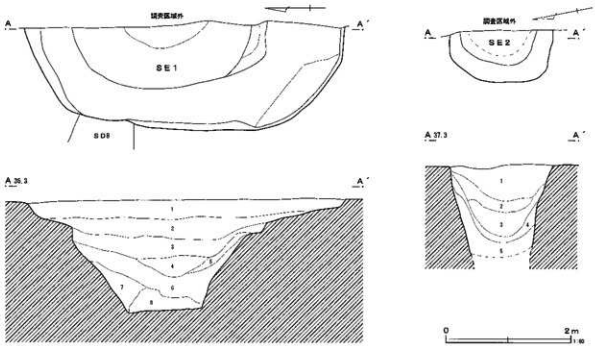
第2号井戸跡（第38・40図）

D－13グリッドに位置する。他遺構との重複はないが、東側部分は調査区域外に続く。そのため、平面形は不明であるが、円形または楕円形と推定される。断面形は、開口部がやや広い円筒状を呈する。

開口部がやや開くのは、壁面の崩落が最も大きい部位であることによるもので、本来は円筒状であったと推測される。

遺構の平面規模は、東西方向1.56m、南北方向5.12mまでの確認にとどまる。危険防止のため、完掘には至ってはいない。掘り下げを行ったのは、確認面から1.32mまでであった。

井戸跡内または井戸跡外に、覆い屋や出入り口な



SE1
1　暗褐色土　表土　後期A軽石を含む
2　暗褐色土　地土粒子・炭化物粒子少　しまりあり
3　暗黄色土　青灰色土少　しまりあり
4　暗青灰色土　黄色の砂質土多　粘性あり
5　暗黄褐色土　黄褐色土ブロック多　しまりあり
6　暗褐色土　青灰色土多　砂分を縞状に含む
7　暗褐色土　黄褐色土ブロック少　地山崩落土
8　青灰色土　炭化物粒子多　しまりなし　粘性あり

SE2
1　暗褐色土　炭化物・焼土粒子（φ2～3mm）多　浅間A軽石少　しまりあり　粘性なし
2　暗褐色土　焼土粒子・炭化物粒子（φ5mm）多
　　黒炭色土（炭化の主体をなすが）ブロック状少　しまり・粘性なし
　　1層に比べ炭化物・焼土粒子の量・大きさともに増す
3　黒炭色土　焼土ブロックを極多　しまり非常に弱　粘性なし
　　炭炭に近く炭化物と焼土の混合層を成す
4　暗褐色土　炭化物・焼土粒子少　しまり・粘性なし　地山起源の土
5　黒炭色土　3層と同過

第38図　第1・2号井戸跡

どの付属施設の存在を、窺わせるような柱穴や、階段等をはじめとした痕跡は、認められなかった。

図化し得た遺物は2点であった。

第3号井戸跡（第39図）

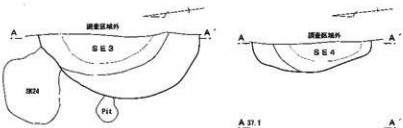
D—12グリッドに位置する。第24号土坑を切っているが、ピットとの新旧関係は不明である。東側部分は調査区域外に続く。そのため、平面形は不明であるが、円形または楕円形と推定される。断面形は、開口部がやや広い円筒状を呈する。開口部がやや開くのは、壁面の崩落が最も大きい部位であることによるもので、本来は円筒状であったと推測される。

とくに、南側壁面において確認面から70cm程の箇所で屈曲が認められるのは、その一例であると考えられる。

遺構の平面規模は、東西方向0.96m、南北方向2.56mまでの確認にとどまる。危険防止のため、完掘には至ってはいない。掘り下げを行ったのは、確認面から1.90mまでであった。

井戸跡内または井戸跡外に、覆い屋や出入り口などの付属施設の存在を、窺わせるような柱穴や、階段等をはじめとした痕跡は、認められなかった。

図化し得た遺物は陶器の甕1点であった。

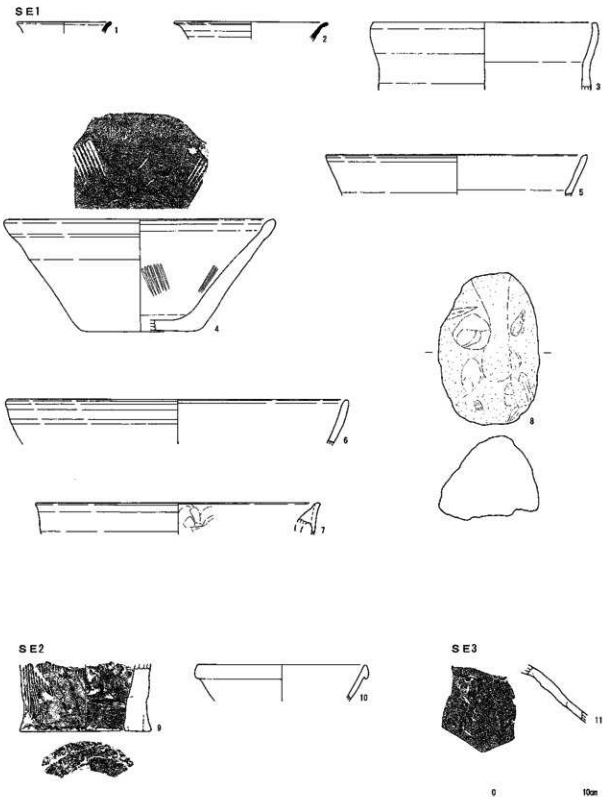


SE3
1 暗褐色土　炭化物・焼土ブロック（φ5mm）少
しまりあり　粘性なし
2 黒褐色土　炭化物粒子多　ローム・ブロック・焼土ブロック（φ1cm）少
しまり・粘性なし
3 褐色土　黒色土を斑状に含む
ローム粒子を少
しまり・粘性なし
4 暗褐色土　焼土粒子（φ5mm）少
しまり・粘性なし
5 暗オリーブ灰　焼土ブロックを斑で含む
しまり・粘性なし
繊維質を残す
植物の炭化物材からなる層
6 暗褐色土　焼土・炭化物粒子（φ2mm）多
粘性強
7 褐色土　地山路落土
SE4
1 黒褐色土　炭化物粒子・焼土粒子（φ1cm）多
しまりややあり　粘性なし
2 暗褐色土　焼土粒子（φ2mm）少
しまりややあり　粘性なし
3 黒褐色土　炭化物ブロック（φ1～2cm）多
焼土ブロック（φ5mm）少
しまり・粘性なし
4 暗オリーブ灰　粘性・しまりなし　繊維質残存
構物の炭化材を含む
5 暗褐色土　青灰色ブロック多
しまり・粘性なし

第39図　第3・4号井戸跡

第11表　井戸跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	坏	(10.0)	1.2	—	2.9	破片	密	普通	にぶい黄橙		28-1
2	須恵器	坏	(16.2)	1.9	—	3.2	破片		普通	灰		28-1
3	陶器	鉢	(24.0)	7.2	—	67.4	破片	密	普通	灰	在地	27-1
4	陶器	擂鉢	(28.6)	12.0	(11.0)	609.7	20	密、角	普通	橙	在地	27-1
5	陶器	焙烙か	(28.0)	4.3	—	27.2	破片	密	普通	褐灰	在地	27-1
6	陶器	焙烙か	(36.0)	4.7	—	28.2	破片	密、角	普通	にぶい褐	在地	27-1
7	陶器	内耳焙烙	(30.4)	3.3	—	31.5	破片	密、角	普通	にぶい黄橙	在地	27-1
8	石製品	不明品	長16.0幅10.7厚8.4重889.6								軽石製	23-1
9		円筒埴輪	—	7.1	(14.2)	249.4	破片	角、石英	普通	明赤褐		24-3
10	白磁	壺か	(18.0)	3.9	—	19.2	破片		普通	灰白		24-5
11	陶器	甕	—	6.0	—	102.2	破片		密	暗赤褐	常滑	27-1



第40図　井戸跡出土遺物

第４号井戸跡（第39図）

D―12・13グリッドに位置する。他遺構との重複はないが、東側部分は調査区域外に続く。そのため、平面形は不明であるが、円形または楕円形と推定される。断面形は、開口部がやや広い円筒状を呈する。開口部がやや開くのは、壁面の崩落が最も大きい部位であることによるもので、本来は円筒状であったと推測される。北側壁面・南側壁面ともに、確認面からそれぞれ30cm・50cmの箇所で屈曲が認められるのは、その一例であると考えられる。

遺構の平面規模は、東西方向0.46m、南北方向1.89mまでの確認にとどまる。危険防止のため、完掘には至ってはいない。掘り下げを行ったのは、確認面から1.13mまでであった。

井戸跡内または井戸跡外に、覆い屋や出入り口などの付属施設の存在を、窺わせるような柱穴や、階段等をはじめとした痕跡は、認められなかった。

遺物は出土しなかった。

５．溝跡

第１号溝跡（第41・44図）

D－５～７グリッドに位置する。第２号溝跡を切り、第５・６号溝跡に切られている。第３号溝跡との新旧関係については不明である。

やや蛇行するものの、ほぼ南北方向に直線状に走る。北側・西側ともに、調査区域外に続いているため、長さ21.7mまでの確認である。確認面での幅は42～46cm、底面での幅は22～38cm、確認面からの深さは７～15cmを測る。

断面形は、底面が平坦で、壁面の立ち上がりが緩やかな逆台形を呈する。概ねの方位はN－５°－Eである。

遺物の出土は少なく、図化し得たのは３点であった。

第２号溝跡（第41・44図）

D－５・６グリッドに位置する。概ね東西方向に走るが、東西端ともに調査区域外に続いている。

第１号溝跡を切っているが、D－５グリッドのP１～５との新旧関係は不明である。確認し得た範囲内で、長さ4.31m、確認面での幅は286～396cm、底面での幅は275～378cm、確認面からの深さは９～15cmを測る。概ねの方位はN－49°－Wである。

断面形は、底面が平坦で浅く、壁面の立ち上がりが緩やかな皿状を呈する。遺構のプランは不明瞭である。上層の覆土（１層）では、浅間Ａ軽石が少量ではあるが混入しているのが確認された。

遺物の出土は非常に少なく、図化し得たのは２点のみであった。

第３号溝跡（第41・44図）

D－６グリッドに位置する。本遺構は、遺構図版では、第４号溝跡に切られているが第１号溝跡との新旧関係については不明である。本遺構は、第３・４号溝跡と交差する位置でプランが途切れているが、一連の溝跡であると判断した。

西側・東側ともに、調査区域外に続いている。長さについては、途切れている部分も含めて5.56mまでの確認である。確認面での幅は40～60cm、底面での幅は28～40cm、確認面からの深さは７～18cmを測る。概ねの方位はN－49°－Wである。

第４号溝跡と重複する部分で、土錘（７）が１点出土したが、帰属する遺構を特定することはできなかった。

第４号溝跡（第41図）

D－６グリッドに位置する。本遺構は、遺構図版では、第３号溝跡を切っているが、第３号溝跡との新旧関係については不明である。平面形は長方形に近い。

断面形は、底面が平坦で、壁面の立ち上がりが比較的急な逆台形を呈する。確認された範囲内での長さは、2.06m、確認面での幅は56～58cm、底面での幅は33～38cm、確認面からの深さは10～14cmを測る。概ねの方位はN－５°－Eである。

本遺構は北側・南側ともに途切れているが、両壁面ともに、西壁面・東壁面同様、壁面の立ち上がりは比較的急であるといえる。

この点から、北側・南側は溝跡が途切れているのではなく、南北方向に長い土壙の可能性も否定できない。

遺物は出土しなかった。

第5号溝跡（第41・44図）

D－6・7グリッドに位置する。第6号住居跡・第1号溝跡を切っている。概ね直線状に、東西方向に走るが、東西端ともに調査区域外に続いている。

確認し得た範囲内で、長さ4.2m、確認面での幅は50～76cm、底面での幅は25～51cm、確認面からの深さは22～42cmを測る。概ねの方位はN-80°-Wである。

断面形は底面がややくぼみ、立ち上がりが急であり、深い部分ではU字形、浅い部分では逆台形を呈する。上層の覆土（1層）では、浅間A軽石が少量ではあるが混入しているのが確認された。

遺物の出土は非常に少なく、図化し得たのは4点であった。

第6号溝跡（第41・44図）

D－7グリッドに位置する。第6号住居跡・第1号溝跡を切っている。概ね直線状に走るが、東西端ともに調査区域外に続いている。

確認し得た範囲内で、長さ4.78m、確認面での幅は135～170cm、底面での幅は72～134cm、確認面からの深さは44～51cmを測る。概ねの方位はN-56°-Wである。断面形は底面がややくぼみ、立ち上がりが比較的緩やかであり、碗状を呈する。

上層の覆土（1層）では、浅間A軽石が少量ではあるが混入しているのが確認された。

遺物の出土は非常に少なく、図化し得たのは1点のみであった。

第7号溝跡（第42図）

D－8グリッドに位置する。概ね直線状で、東西方向に走ると思われるが、北側に攪乱を受けており南側のみが検出された。東西端ともに調査区域外に続いている。

確認し得た範囲内で、長さ7.21m、確認面での幅は不明であるが、底面の幅については35cm前後と推測される。確認面での幅は135～170cm、底面での幅は72～134cm、確認面からの深さは65cmを測る。概ねの方位はN-56°-Wである。断面形は底面がややくぼみ、立ち上がりが比較的緩やかであり、碗状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第8号溝跡（第42・44図）

D－3グリッドに位置する。概ね直線状に、東西方向に走るが、東側を第1号井戸跡に切られ、西側は調査区域外に続いている。

確認し得た範囲内で、長さ3.91m、確認面での幅は151～201cm、底面での幅は42～68cm、確認面からの深さは65cmを測る。概ねの方位はN-80°-Wである。断面形は、底面がやや歪むものの、壁面の立ち上がりは急な逆台形を呈する。上層の覆土（1層）では、浅間A軽石が少量ではあるが混入しているのが確認された。

図化し得た遺物は3点であった。

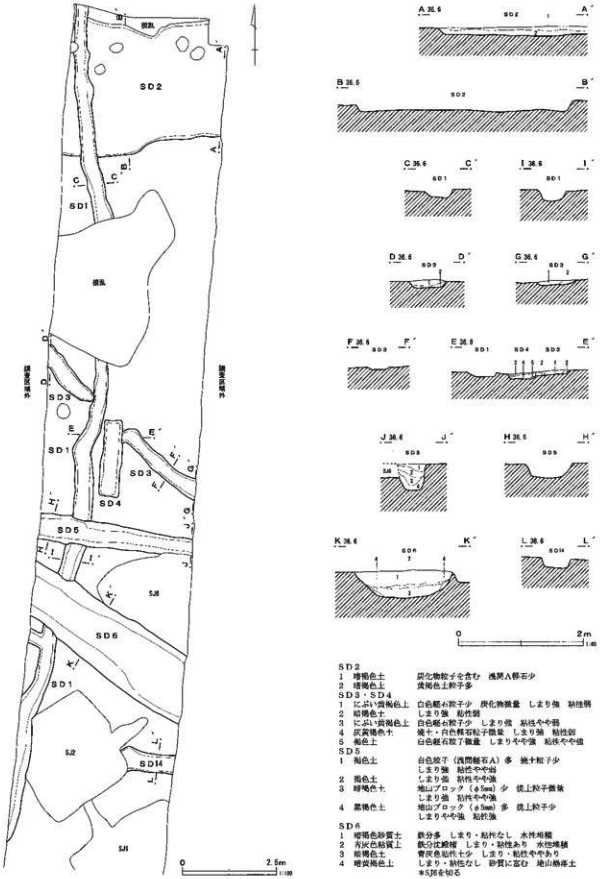
第9号溝跡（第42・44図）

C－18・19グリッドに位置する。概ね直線状に、東西方向に走るため、東端・西端側ともに調査区域外に続いている。

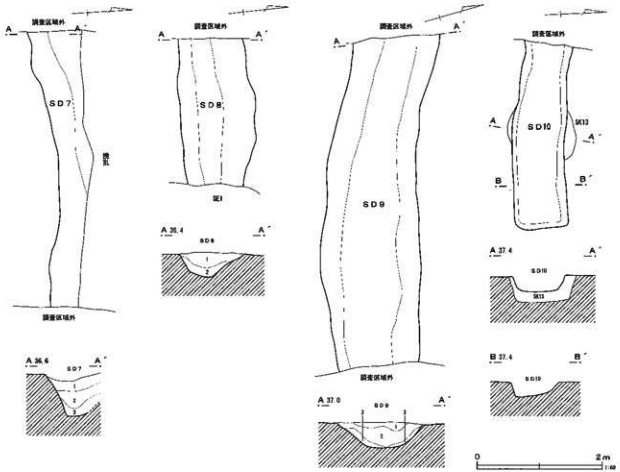
確認し得た範囲内での規模は、長さ8.7m、確認面での幅は205～262cm、底面での幅は91～154cm、確認面からの深さは65cmを測る。概ねの方位はN-70°-Wである。断面形は、底面が比較的平坦で、壁面の立ち上がりが緩やかな逆台形を呈する。

遺物の出土は非常に少なく、図化し得たのは1点のみであった。

またこの他に、炉内滓の小破片1点（15.3g）が出土したが、図化には至らなかった。


SD2
SD1
撹乱
SD3
SD4
SD5
SJ6
SD6
SJ2
SD14
SJ1
0
2.5m
1:100
A 36.6
SD2
A′
B 36.6
B′
C 36.6
C′
SD1
I 36.6
I′
D 36.6
SD3
D′
G 36.6
G′
F 36.6
F′
E 36.6
SD1
SD4
E′
J 36.6
J′
SD5
H 36.6
H′
K 36.6
SD6
K′
L 36.6
SD14
L′
0
2m
1:40
SD2
1 暗褐色土 炭化物粒子を含む 浅間A軽石少
2 暗褐色土 黄褐色土粒子多
SD3・SD4
1 にぶい黄褐色土 白色軽石粒子少 炭化物微量 しまり強 粘性弱
2 暗褐色土 しまり強 粘性弱
3 にぶい黄褐色土 白色軽石粒子少 しまり強 粘性やや弱
4 灰黄褐色土 焼土・白色軽石粒子微量 しまり強 粘性弱
5 褐色土 白色軽石粒子微量 しまりやや強 粘性やや強
SD5
1 褐色土 白色粒子（浅間軽石A）多 焼土粒子少
しまり強 粘性やや強
2 褐色土 しまり強 粘性やや強
3 暗褐色土 地山ブロック（φ5mm）少 焼土粒子微量
しまり強 粘性やや強
4 黒褐色土 地山ブロック（φ5mm）多 焼土粒子少
しまりやや強 粘性強
SD6
1 暗褐色砂質土 鉄分多 しまり・粘性なし 水性堆積
2 青灰色粘質土 鉄分沈殿層 しまり・粘性あり 水性堆積
3 暗褐色土 骨状色粘性土少 しまり・粘性ややあり
4 暗黄褐色土 しまり・粘性なし 砂質に富む 地山粉塵土
※SJ6を切る

第41図　溝跡(1)



SD7
1　暗褐色土　白色粒子多　焼土粒子少　炭化物粒子微量　しまり強　粘性やや弱
2　暗褐色土　炭化物粒子微量　しまり強　粘性やや強
3　黒褐色土　地山ブロック（φ2～3cm）多　焼土粒子・炭化物粒子微量
　　しまり強　粘性やや強
SD8
1　暗褐色土　炭化物粒子少　粘性なし
2　暗褐色土　黄褐色土ブロック少　しまりあり　粘性なし
SD9
1　黒褐色土　焼土粒子・炭化物粒子少　しまりやや強　粘性強
2　暗褐色土　焼土粒子微量　しまりやや強　粘性やや強
　　均一的に酸化鉄施入
3　にぶい黄褐色土　地山ブロック（φ3cm）多　しまり・粘性強

第42図　溝跡(2)

第10号溝跡（第42・44図）

D－9・10グリッドに位置する。概ね直線状に走るが、西端は調査区域外に続いている。第13号土壙を切っている。

確認し得た範囲内で、長さ5.01m、確認面での幅は120～142cm、底面での幅は73～118cm、確認面からの深さは16～23cmを測る。概ねの方位はN-87°-Wである。断面形は底面がややくぼみ、立ち上がりが比較的急な逆台形を呈する。

遺物の出土は非常に少なく、図化し得たのは小破片1点のみであった。

またこの他に、炉壁の小破片1点（5.3g）が出土したが、図化には至らなかった。

第11号溝跡（第43・44図）

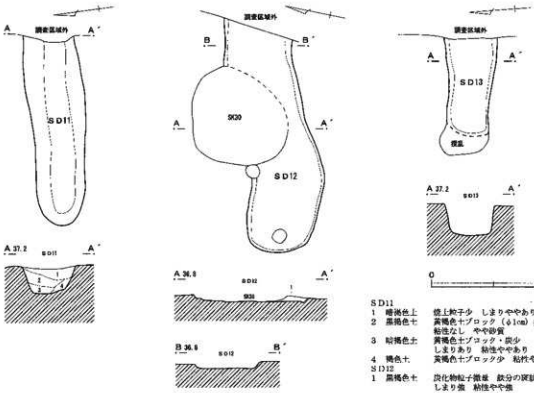
D－11グリッドに位置する。他遺構との重複は無い。概ね直線状に走るが、東端は調査区域外に続いている。

確認し得た範囲内で、長さ4.85m、確認面での幅は130～154cm、底面での幅は61～65cm、確認面からの深さは35～41cmを測る。概ねの方位はN-87°-Wである。断面形は底面がややくぼみ、立ち上がりが比較的急な逆台形を呈する。

図化し得た遺物は、小破片2点のみであった。

第12号溝跡（第43図）

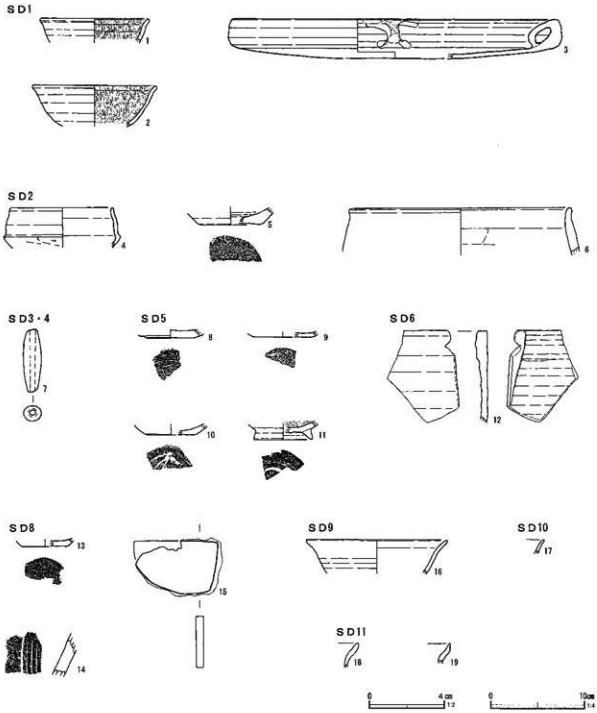
C・D－15グリッドに位置する。第30号土壙とC－15グリッドP3に切られている。概ね直線状に東



第43図　溝跡(3)

第12表　溝跡出土遺物観察表（第44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	ロクロ土師器	坏	(11.6)	2.6	—	5.3	破片	密、角	普通	にぶい黄橙	内面黒色処理	28-1
2	ロクロ土師器	坏	(13.2)	4.4	—	10.7	破片	雲、角	普通	橙	内面黒色処理	28-1
3	陶器	内耳鍋焙	34.2	4.2	33.4	1138.1	50	密、角	普通	黒褐		22-10
4	土師器	坏	(10.9)	4.3	—	15.9	破片	雲、砂	普通	橙		
5	ロクロ土師器	坏	—	1.8	(7.0)	31.3	破片	密、角	普通	にぶい褐		
6	土師器	甕	(23.5)	5.1	—	44.6	破片	雲	普通	橙		25-2
7	土製品	土錘	孔径0.35長3.3厚0.95重2.3現90					密、角	普通	灰黄		24-6
8	ロクロ土師器	坏	—	0.9	(5.4)	13.8	破片	雲、角	普通	にぶい黄橙		26-1
9	ロクロ土師器	坏	—	0.6	(6.0)	5.6	破片	密、角	普通	橙		26-1
10	土師器	坏	—	1.2	(5.6)	11.8	破片	雲、角	普通	橙		26-1
11	ロクロ土師器	高台付椀	—	1.9	(6.3)	14.8	破片	密	普通	にぶい橙	内面黒色処理	26-2
12	磁器	小皿	—	9.7	—	84.0	破片		普通	明赤褐		27-1
13	土師質	小皿	—	0.8	(5.0)	12.1	10	角	普通	にぶい黄橙		26-1
14	陶器	すり鉢	—	4.5	—	30.4	破片		普通	灰		
15	鉄製品	鎌か	長4.3幅(2.7)厚0.4重16.7									28-2
16	ロクロ土師器	坏	(15.0)	3.6	—	9.5	破片	雲、角	普通	にぶい橙		28-1
17	土師器	坏	—	1.4	—	2.5	破片	密、角	普通	橙		28-1
18	土師器	甕	—	2.6	—	5.5	破片	角	普通	褐灰		25-2
19	土師器	甕	—	2.1	—	3.8	破片	角	普通	にぶい黄橙		



第44図　溝跡出土遺物

西方向に走るが、東端は調査区域外に続いている。

確認し得た範囲内で、長さ6.1m、確認面での幅は179～197cm、底面での幅は155～169cm、確認面からの深さは9～12cmを測る。概ねの方位はN-72°-Eである。断面形は底面が平坦で、立ち上がりが比較的緩やかな皿状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第13号溝跡（第43図）

D—11グリッドに位置する。第30号土壙とC—15グリッドP3に切られている。概ね直線状に東西方向に走るが、東端は調査区域外に続いている。

確認し得た範囲内で、長さ2.6m、確認面での幅は111～145cm、底面での幅は96～112cm、確認面からの深さは85cmを測る。概ねの方位はN-87°-Wである。断面形は底面がややくぼみ、立ち上がりが急なU字形を呈する。

遺物は出土しなかった。

第14号溝跡（第41図）

D—11グリッドに位置する。第12号住居跡と重複するが、新旧関係については明確ではない。本遺構は直線状に東西方向に走るが、東側は調査区域外に続いている。

確認し得た範囲内で、長さ2.47m、確認面での幅は50～65cm、底面での幅は42～50cm、確認面からの深さは20cmを測る。概ねの方位はN-72°-Eである。断面形は底面が平坦で、立ち上がりが比較的急な逆台形を呈する。

遺物は出土しなかった。

6．竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構（第45・46図）

C・D—13グリッドに位置する。遺構の西側部分は、調査区域外に続いている。遺構の東壁面と南壁面をピットに切られているが、遺構内のピットの内にも本遺構を切っているものがあるのかは不明である。

確認範囲からみて平面形は、方形または長方形を呈すると推測される。遺構の平面規模は、南北方向は3.56mであるが、東西方向は3.66mまでの確認にとどまる。確認面からの深さは23～33cmであり、主軸方向はN-13°-E、またはN-77°-Wを指すと推測される。

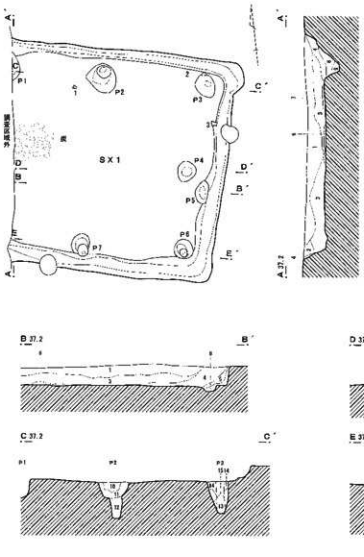
遺構内からは、7基のピットが検出された。平面形と規模を、以下に列挙する。

P1は、平面形は円形、径は45cmまで、底面からの深さは30cmまでの確認にとどまる。P2は、平面形は円形、径は45×47cm、底面からの深さは56cm、P3は、平面形は楕円形、径は30×42cm、底面からの深さは48cm、P4は、平面形は楕円形、径は30×35cm、底面からの深さは15cm、P5は、平面形は楕円形、径は22×36cm、底面からの深さは10cm、P6は、平面形は円形、径は29×30cm、底面からの深さは34cm、P7は、平面形は楕円形、径は40×42cm、底面からの深さは46cmである。

北東コーナーに位置するP3と、南東コーナーに位置するP6には、柱の痕跡（第45図13層・18層）と、柱穴掘り方への充填土（14・15層、19・20層）が認められた。P1～P3は、北壁際に直線状に並

第13表　竪穴状遺構出土遺物観察表（第46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存%	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	鉢か	—	—	—	12.3	破片	密、角	普通	にぶい褐		28-1
2	陶器	甕	—	6.3	—	76.1	破片		普通	赤褐	常滑	
3	石製品	不明品	長13.8	幅10.8	厚6.8	重1532.7					軽石製	
4	石製品	不明品	長12.0	幅10.9	厚7.0	重606.4					軽石製	



第45図　第１号竪穴状遺構

第46図　第１号竪穴状遺構出土遺物

んでいる。これとは別に、南壁際のＰ６・７についても、同様の状況を示している。
また、Ｐ１～３、Ｐ６・７は、形状・規模についても類似している。

各ピット間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間が（160）cm、Ｐ２－Ｐ３間が170cm、次いでＰ６－Ｐ７間が165cmである。

これらのピットについては、本遺構に伴う柱穴の可能性を指摘しておきたい。但し、Ｐ４またはＰ５については、判断するだけの資料がないといえる。

以上のピットの他の施設として、周壁溝が検出された。周壁溝は、確認された壁面全体に沿って巡らされていた。幅は14～38mと広いが、きわめて浅いもので、深さは数cmほどであった。

西壁際の中央では、炭が底面に散っているのが確認された。分布範囲は、南北方向は55cmであるが、東西方向については66cmまでの確認であった。

以上の状況から、本遺構は住居跡の可能性が高いといえる。

石製品２点を含め、図化し得た遺物は計４点であった。

7．グリッドピット

今回の調査で検出されたピット（第４～７図）は、合わせて211基である。調査区北側と南側では分布は薄く、10～12グリッドにかけて密集する傾向が認められる。

以下に、計測表を示す。

第14表　グリッドピット計測表(1)

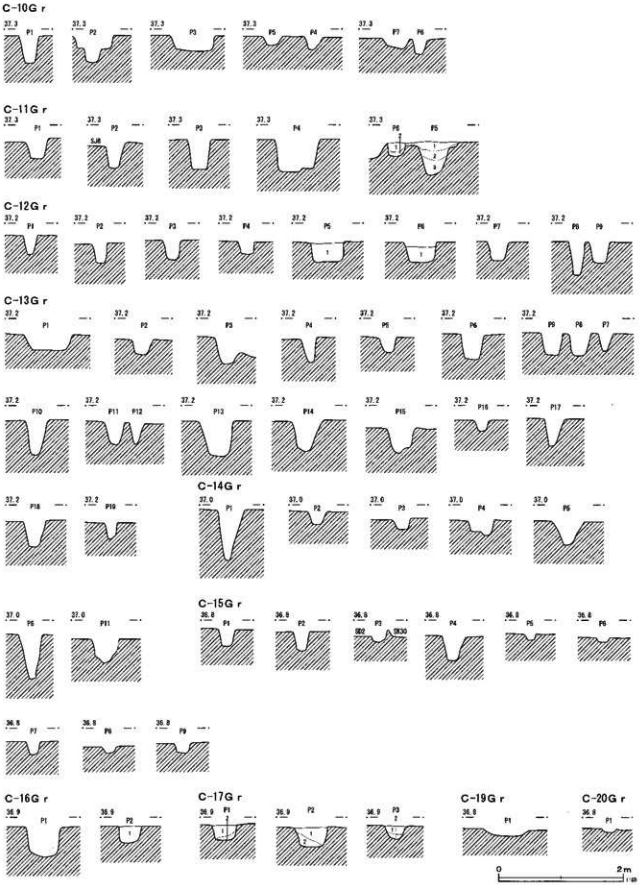
グリッド	番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
D-5	P-1	—	0.30	0.25
	P-2	0.27	0.26	0.16
	P-3	0.36	0.26	0.27
	P-4	0.39	0.33	0.50
	P-5	0.42	0.32	0.11
D-6	P-1	0.42	0.35	0.06
D-8	P-1	0.30	0.27	0.25
	P-2	0.25	0.23	0.11
	P-3	0.33	0.30	0.20
	P-4	0.63	0.49	0.07
	P-5	0.27	0.21	0.15
	P-6	0.37	0.31	0.15
D-9	P-1	0.33	0.30	0.45
	P-2	0.42	0.33	0.40
	P-3	0.42	0.39	0.36
	P-4	0.30	(0.26)	0.16
	P-5	0.33	0.28	0.18
	P-6	(0.21)	—	0.10
	P-7	0.30	0.27	0.20
	P-8	0.38	(0.36)	0.16
	P-9	0.44	0.36	-
	P-10	0.41	0.27	0.39
	P-11	0.45	0.39	0.45
	P-12	0.39	0.30	0.33
	P-13	—	0.38	0.20
	P-14	0.42	0.39	0.23
	P-15	0.72	0.46	0.69
	P-16	—	0.45	0.28
	P-17	0.39	0.30	0.28
D-9	P-18	0.51	(0.45)	0.27
	P-19	0.48	0.36	0.39
	P-20	—	(0.28)	0.34
D-10	P-1	0.24	0.22	0.14
	P-2	0.26	0.22	0.29
	P-3	0.36	0.33	0.25
	P-4	0.60	0.57	0.30
	P-5	0.24	0.21	0.18
	P-6	—	0.36	0.41
	P-7	0.72	0.36	0.34
	P-8	0.45	0.33	0.24
	P-9	0.30	0.25	0.36
	P-10	0.45	0.38	0.24
	P-11	0.72	0.33	0.30
	P-12	1.02	0.30	0.41
	P-13	0.45	0.39	0.42
	P-14	0.36	0.33	0.26
	P-15	0.48	0.36	0.23
	P-16	0.33	0.27	0.25
	P-17	0.30	0.26	0.20
	P-18	0.72	0.36	0.40
	P-19	0.51	0.39	0.28
	P-20	0.42	0.36	0.31
	P-21	0.42	0.39	0.21
	P-22	0.33	0.26	0.30
	P-23	0.30	0.27	0.34
	P-24	0.33	0.27	0.30
	P-25	0.81	0.63	0.29
	P-26	0.60	0.55	0.35
D-10	P-27	0.42	0.33	0.16
	P-28	0.54	0.42	0.27
	P-29	0.62	0.51	0.28
	P-30	0.45	0.30	0.23
C-10	P-1	0.33	0.27	0.41
	P-2	0.63	0.39	0.44
	P-3	0.45	0.33	0.24
	P-4	0.33	—	0.21
	P-5	—	0.33	0.12
	P-6	0.30	0.24	0.23
	P-7	0.42	0.42	0.14
D-11	P-1	—	0.21	0.21
	P-2	0.90	0.60	0.45
	P-3	—	0.21	0.13
	P-4	0.51	0.39	0.39
	P-5	0.42	0.33	0.34
	P-6	0.24	0.21	0.22
	P-7	0.78	0.54	0.28
	P-8	0.66	0.42	0.24
	P-9	0.45	0.39	0.23
	P-10	0.39	0.33	0.28
	P-11	0.29	0.21	0.13
	P-12	0.21	0.18	0.10
	P-13	0.33	0.29	0.20
	P-14	0.31	0.29	0.18
	P-15	0.44	0.39	0.13
	P-16	0.94	0.36	0.49
	P-17	0.48	0.45	0.36
	P-18	0.48	0.39	0.38

第15表　グリッドピット計測表(2)

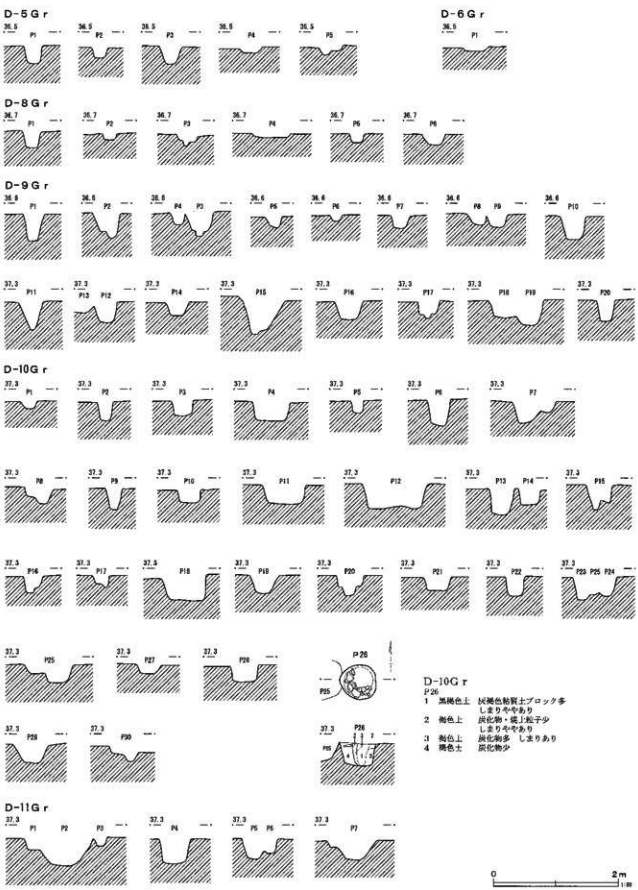
グリッド	番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
D-11	P-19	0.54	0.39	0.54
	P-20	0.42	0.35	0.32
	P-21	0.35	0.32	0.30
	P-22	0.30	0.21	0.22
	P-23	0.30	0.27	0.23
	P-24	0.44	0.37	0.27
	P-25	0.30	0.26	0.23
	P-26	0.26	0.24	0.29
	P-27	0.56	0.48	0.12
	P-28	0.24	0.22	0.15
	P-29	0.39	0.30	0.27
	P-30	—	0.33	0.11
	P-31	0.42	0.36	0.15
	P-32	0.57	0.39	0.37
	P-33	0.33	0.30	0.18
	P-34	0.28	—	0.16
	P-35	0.60	0.53	0.18
	P-36	0.41	0.39	0.43
	P-37	0.44	0.39	0.38
	P-38	0.48	0.39	0.59
	P-39	0.36	0.33	0.15
	P-40	0.34	0.29	0.42
	P-41	0.33	0.30	0.47
	P-42	0.27	0.22	0.18
	P-43	0.26	0.21	0.38
	P-44	0.30	0.20	0.40
	P-45	0.46	0.41	0.43
	P-46	0.54	0.45	0.46
	P-47	0.42	0.30	0.32
	P-48	0.48	0.42	0.35
	P-49	0.35	0.26	0.39
	P-50	0.71	0.45	0.42
C-11	P-1	0.41	0.36	0.34
	P-2	0.33	0.30	0.43
	P-3	0.36	0.35	0.44
	P-4	0.75	0.24	0.52
	P-5	1.02	0.44	0.56
	P-6	0.29	0.26	0.22
D-12	P-1	0.38	0.35	0.40
	P-2	0.36	0.34	0.33
	P-3	1.41	0.21	0.20
	P-4	0.45	0.30	0.34
	P-5	0.48	0.45	0.68

グリッド	番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
D-12	P-6	0.45	0.41	0.32
	P-7	0.48	0.45	0.43
	P-8	0.39	0.27	0.27
	P-9	0.48	0.39	0.25
	P-10	0.27	0.24	0.30
	P-11	0.54	0.33	0.40
	P-12	0.51	0.36	0.13
	P-13	0.45	0.39	0.25
	P-14	—	0.27	0.38
	P-15	0.39	0.36	0.34
	P-16	0.51	0.45	0.38
	P-17	0.33	0.27	0.25
	P-18	0.35	0.30	0.39
	P-19	0.39	0.33	0.28
	P-20	0.24	0.18	0.37
	P-21	0.48	0.39	0.55
	P-22	—	0.24	0.19
	P-23	0.42	0.42	0.27
	P-24	0.39	0.27	0.43
C-12	P-1	0.24	0.21	0.28
	P-2	0.23	0.21	0.32
	P-3	0.27	0.24	0.75
	P-4	0.28	0.24	0.19
	P-5	0.63	0.48	0.33
	P-6	0.51	0.45	0.31
	P-7	0.36	0.30	0.29
	P-8	0.23	0.18	0.52
	P-9	0.42	0.29	0.33
D-13	P-1	0.47	0.36	0.45
	P-2	0.57	0.48	0.19
	P-3	0.30	0.24	0.39
	P-4	0.36	0.34	0.36
	P-5	0.30	0.21	0.32
	P-6	0.51	0.45	0.45
	P-7	0.36	0.30	0.52
C-13	P-1	0.81	0.60	0.21
	P-2	0.39	0.30	0.22
	P-3	0.33	0.27	0.43
	P-4	0.24	0.19	0.53
	P-5	0.28	0.24	0.22
	P-6	0.35	0.30	0.38
	P-7	0.27	0.21	0.29
	P-8	0.36	0.21	0.36

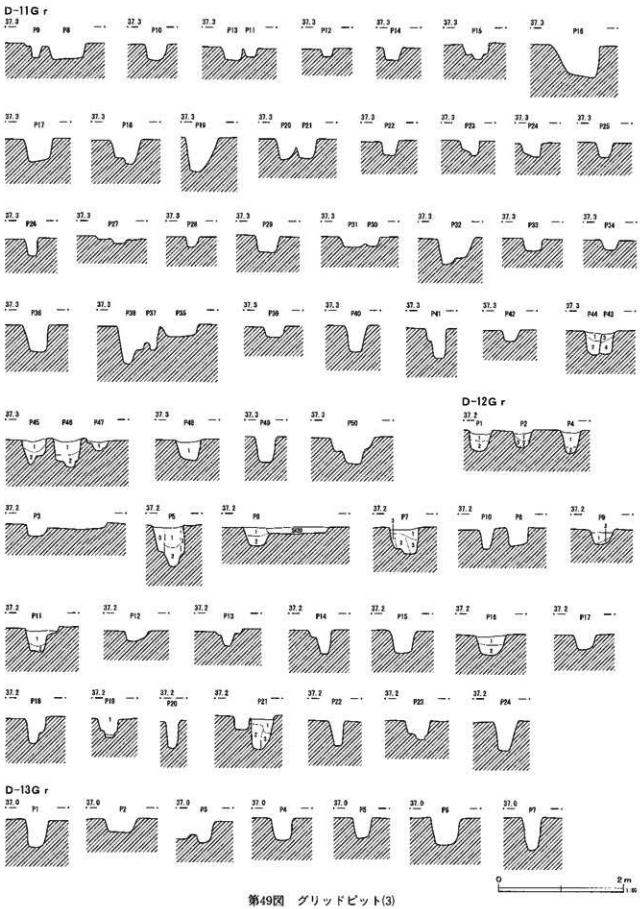
グリッド	番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
C-13	P-9	0.36	0.27	0.33
	P-10	0.42	0.36	0.57
	P-11	0.36	0.30	0.36
	P-12	0.24	0.19	0.28
	P-13	0.54	0.42	0.55
	P-14	0.54	—	0.52
	P-15	0.42	0.30	0.56
	P-16	0.21	0.19	0.18
	P-17	0.32	0.30	0.43
	P-18	0.33	0.30	0.42
	P-19	0.21	0.18	0.22
D-14	P-1	0.90	0.60	0.31
	P-2	0.42	0.27	0.13
	P-3	0.22	0.20	0.35
	P-4	0.15	—	0.10
	P-5	—	0.31	0.18
C-14	P-1	0.44	0.36	0.81
	P-2	0.33	0.30	0.22
	P-3	0.31	0.21	0.18
	P-4	0.42	0.30	0.23
	P-5	0.51	0.30	0.33
	P-6	0.36	0.33	0.62
	P-7	0.27	0.21	—
	P-8	0.27	—	—
	P-9	0.40	0.30	—
	P-10	0.45	0.36	—
	P-11	0.64	0.39	0.47
C-15	P-1	0.24	0.20	0.26
	P-2	0.33	0.23	0.29
	P-3	0.24	0.23	0.14
	P-4	0.36	0.30	0.42
	P-5	0.21	0.20	0.08
	P-6	0.24	—	0.60
	P-7	0.24	0.21	0.19
	P-8	0.32	0.23	0.11
	P-9	0.27	0.24	0.15
C-16	P-1	0.60	0.54	0.53
	P-2	0.36	0.30	0.28
C-17	P-1	0.45	0.36	0.23
	P-2	0.36	0.30	0.28
	P-3	0.33	0.28	0.42
C-19	P-1	0.75	0.54	0.13
C-20	P-1	0.22	0.20	0.05



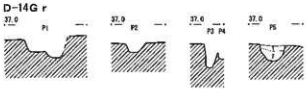
第47図　グリッドピット(1)



第48図 グリッドピット(2)



第49図　グリッドピット(3)



C-11G r
P 5
1 黒褐色土　炭化物粒子多　しまりあり　粘性なし
2 暗褐色土　炭化物粒子少　しまりあり　粘性なし
3 褐色土　地山ブロック多　しまりあり　粘性なし
P 6
1 黒褐色土　炭化物粒子多　しまりあり　粘性なし
2 褐色土　地山粒子少　しまり・粘性ややあり

C-12G r
P 3
1 暗褐色土　地山崩落土多　しまりあり
P 6
1 暗褐色土　地山崩落土多　しまりあり　粘性なし

C-16G r
P 2
1 暗褐色土　焼土粒子（φ1mm）極少　しまりなし　粘性ややあり　緻密

C-17G r
P 1
1 暗褐色土　古炭色土ブロック・鉄分少　しまりあり　粘性なし　自然堆積
2 暗黄褐色土　地山崩落土多　しまりなし　粘性ややあり　自然堆積
P 2
1 黒褐色土　炭色土ブロック・鉄分・炭化物粒子（φ2mm）少　しまりややあり　粘性なし
2 黒褐色土　黄褐色土ブロック少　しまり・粘性ややあり
P 3
1 暗褐色土　鉄分少　しまり・粘性なし　緻密
2 暗褐色土　黄褐色土・青炭色土粒子少　しまり・粘性なし　自然堆積

D-11G r
P 43・44
1 黒褐色土　黄褐色土ブロック少　しまりややあり　粘性なし（P44）
2 黒褐色土　炭化物粒子少　しまりややあり　粘性なし（P44）
3 黒褐色土　暗褐色土ブロック多　しまりややあり　粘性なし（P43）
4 暗褐色土　地山土少　しまりややあり　粘性なし（P43）
P 45
1 暗褐色土　焼土粒子・炭化物粒子少　しまり・粘性なし
P 46
1 褐色土　黒色土　しまりあり　粘性なし　人為的堆積し
2 褐色土　青炭色土ブロック少　しまりあり　粘性なし　掘り方覆土
P 47
1 暗褐色土　炭化物粒子少　しまりややあり　粘性なし
P 48
1 黒褐色土　炭化物粒子（φ3mm）多　しまり・粘性なし

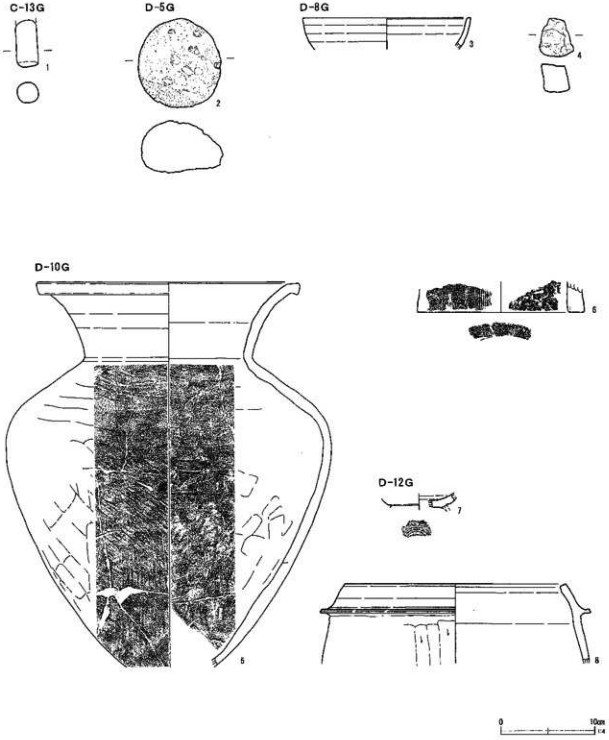
D-12G r
P 1
1 黒褐色土　暗黄褐色土ブロック（φ1cm）多　しまりなし　粘性なし
2 黒褐色土　暗黄褐色土ブロック（φ1cm）・炭化物粒子少　しまり・粘性なし
P 2
1 褐色土　焼土粒子（φ2mm）・炭化物粒子多　しまりあり　粘性なし　人為的堆積
炭し
2 黒褐色土　炭化物粒子多　しまりあり　粘性なし　被焼れした伴か
3 褐色土　地山土多　しまりあり　粘性なし
P 4
1 黒褐色土　暗褐色土ブロック少　しまり・粘性なし
2 褐色土　地山土多　しまりあり　粘性なし
P 5
1 黒褐色土　炭化物粒子少　しまり・粘性ややあり
2 暗褐色土　褐色土粒子少　しまり・粘性ややあり
3 褐色土　黒色土・青炭色土粒子少　しまりあり　粘性なし　柱穴掘り方覆土
P 6
1 暗褐色土　黄褐色土ブロック（φ5mm）多　しまりややあり　粘性なし
自然堆積
2 黒褐色土　黄褐色土ブロック（φ1cm）・焼土粒子（φ2mm）多　しまりややあり　粘性なし　自然堆積
P 7
1 暗褐色土　炭化物粒子・地山粒子少　しまり・粘性なし
2 黒褐色土　地山粒子多　しまり・粘性なし
3 褐色土　しまりあり　粘性なし　掘り方覆土
P 9
1 黒褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多　しまりややあり　粘性なし
2 褐色土　地山崩落土少　しまりややあり　粘性なし
P 11
1 暗褐色土　炭化ブロック（φ3mm）多　黄褐色土を縞状に含む　しまりあり　粘性なし　人為的堆積し
2 褐色土　地山崩落土　しまりあり　粘性なし
P 16
1 暗褐色土　地山崩落土多　しまりあり　粘性なし
2 褐色土　炭化物粒子少　しまりあり　粘性なし
P 19
1 暗褐色土　炭化物粒子多　しまり・粘性なし　柱痕跡
P 21
1 褐色土　地山崩落土・炭化物粒子多　しまりあり　粘性なし
2 黒褐色土　炭化物粒子多　しまり・粘性なし
3 褐色土　黒色土と黄山の混合土　しまりあり　粘性なし

D-14G r
P 5
1 暗褐色土　地山ブロック（φ0.5cm）少
2 褐色土　地山ブロック（φ0.5~2cm）極多

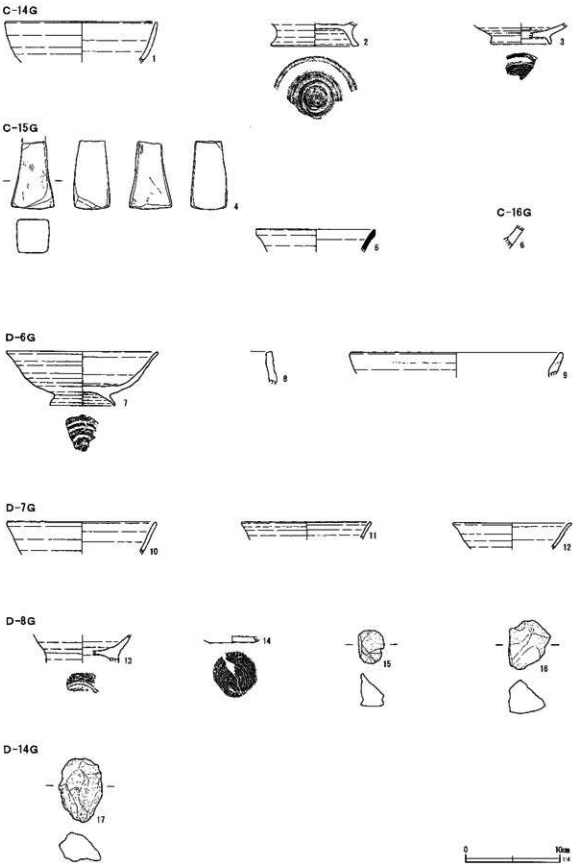
第50図　グリッドピット(4)

第16表　グリッドピット出土遺物観察表（第51図）

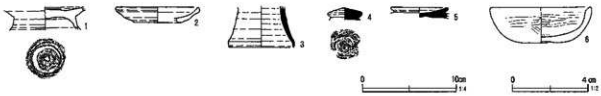
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存%	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土製品	不明品	長4.9幅2.3厚2.2重20.0					雲、角	普通	にぶい黄橙	C-13G P1	24-2
2	石製品	不明品	長9.3幅8.7厚5.5重262.7								D-5G P3 軽石製	23-2
3	土師器	壺	(17.9)	3.3	—	11.2	破片	雲、角	普通	にぶい黄橙	D-8G P1	28-1
4	石製品	不明品	長4.0幅3.6厚2.9重18.4								D-8G P1 軽石製	23-2
5	土師器	壺	(27.6)	40.5	—	3211.6	20	雲、角	普通	にぶい褐	D-10G P2	23-6
6		円筒埴輪	—	3.3	(18.0)	45.1	破片	角、石英	普通	明赤褐	D-10G P10	24-3
7	ロクロ土師器	高台付椀	—	1.7	—	16.9	破片	雲、角	普通	橙	D-12G P10	
8	土師器	甕	(23.7)	8.4	—	87.1	破片	雲、角	普通	褐灰	D-12G P5	25-1



第51図　グリッドピット出土遺物



第52図　グリッド出土遺物



第53図　表採遺物

第17表　グリッド出土遺物観察表（第52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存%	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	ロクロ土師器	坏か	(15.9)	3.4	—	9.2	破片	雲、角	普通	灰黄褐	C-14G	28-1
2	ロクロ土師器	高台付埦	—	2.6	(9.4)	62.0	10	雲、角	普通	にぶい黄褐	C-14G	26-2
3	灰釉	高台付埦	—	2.3	(6.5)	16.0	破片		普通	灰白	C-14G	26-2
4	石製品	砥石	長7.1幅4.5厚3.6重168.1								C-13G	23-2
5	須恵器	坏	(12.7)	2.4	—	6.6	破片	密、角	普通	灰	C-15G	28-1
6	灯明か	埦	—	2.5	—	9.4	破片		普通	黒	C-16G 表採	
7	ロクロ土師器	高台付埦	(16.1)	5.7	(7.0)	58.6	25	密、角	普通	橙	D-6G	26-2
8	土師器	羽釜	—	—	—	15.6	破片		普通		D-6G	
9	土師器	甕	(22.5)	2.6	—	21.4	破片	密、角	普通	橙	D-6G	25-2
10	土師器	埦	(16.0)	4.4	—	14.8	破片	雲、角	普通	橙	D-7G	28-1
11	ロクロ土師器	坏	(13.8)	1.9	—	4.2	破片	密、角	普通	橙	D-7G	28-1
12	ロクロ土師器	坏	(12.6)	2.8	—	5.6	破片	密、角	普通	橙	D-7G	28-1
13	ロクロ土師器	高台付埦	—	3.0	—	28.5	破片	雲、角	普通	明赤褐	D-8G	26-2
14	ロクロ土師器	坏	—	0.8	4.8	20.3	20	雲、角	普通	浅黄橙	D-8G	26-1
15	石製品	不明品	長3.5幅2.7厚3.4重15.2								D-8G 軽石製	23-2
16	石製品	不明品	長4.8幅4.3厚3.5重33.3								D-8G 軽石製	23-2
17	石製品	不明品	長6.8幅4.6厚3.0重43.3								D-14G 軽石製	23-1

第18表　表採遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存%	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	ロクロ土師器	高台付埦	—	2.5	—	81.8	20	雲、角	普通	橙		26-2
2	ロクロ土師器	小皿	(8.7)	1.6	(5.2)	7.9	10		普通	明赤褐		28-1
3	須恵器	台付壺か	(6.8)	4.4	—	12.8	破片		普通	灰	脚部	24-4
4	須恵器	壺	—	1.8	—	14.4	破片	密	普通	灰	確認面	24-4
5	須恵器	蓋	—	1.0	—	16.8	破片		普通	灰	確認面	24-4
6	土師器	手捏ね	(5.3)	1.9	(2.8)	10.1	30	密	良好	にぶい黄橙	確認面	24-2

第19表　森脇遺跡新旧対照表

	新番号	旧番号
SJ	SJ 1	SJ 1
	SJ 2	SJ 2
	SJ 3	SJ 3
	SJ 4	SJ 4
	SJ 5	SJ 5
	P-1	P-1
	SJ 6	SJ 6
	SJ 7	SJ 7
	SJ 8	SJ 8
	SJ 9	SJ 9
	P-1	P-1
	P-2	P-2
	P-3	P-3
	P-4	P-4
	P-5	P-5
	P-6	P-6
	SJ 10	SJ 10
	SJ 11	SJ 11
	SJ 12	SJ 12
	P-1	P-3
	P-2	P-1
	P-3	
	P-4	
	P-5	P-2
	P-6	P-4
SB	SB 1	SB 1
	P-1	
	P-2	P-2
	P-3	P-3
	P-4	SB 1 P-4
SX	欠番	SX 1
	SX 1	SX 2
	P-1	P-1
	P-2	P-2
	P-3	P-3
	P-4	P-4
	P-5	
	P-6	P-5
	P-7	P-6
SK	SK 1	SK 1
	SK 2	SK 2
	SK 3	SK 3
	SK 4	SK 4
	SK 5	SK 5
	SK 6	SK 6
	SK 7	SK 7
	SK 8	SK 8
	SK 9	SK 9
	SK 10	SK 10
	SK 11	SK 11
	SK 12	SK 12
	SK 13	SK 13
	SK 14	SK 14
	SK 15	SK 15
	SK 16	SK 16
	SK 17	SK 17
	SK 18	SK 18
	SK 19	SK 19
	SK 20	SK 20
	SK 21	SK 21
	SK 22	SK 22
	SK 23	SK 23
	SK 24	SK 24
	SK 25	SK 25
	SK 26	SK 26
	SK 27	SK 27
	SK 28	SK 28
	SK 29	SK 29
	SK 30	SK 30
	SK 31	SK 31
	SK 32	SK 32
	SK 33	SK 33
	SK 34	SK 34
	SK 35	SK 35
	SK 36	
	SK 37	
	SK 38	
	SK 39	SK 16と重複

	新番号	旧番号
SE	SE 1	SE 1
	SE 2	SE 2
	SE 3	SE 3
	SE 4	SE 4
SD	SD 1	SD 1
	SD 2	SD 2
	SD 3	SD 3
	SD 4	SD 4
	SD 5	SD 5
	SD 6	SD 6
	SD 7	SD 7
	SD 8	SD 8
	SD 9	SD 9
	SD 10	SD 10
	SD 11	SD 11
	SD 12	SD 12
	SD 13	SD 13
	SD 14	
D-5	P-1	P-1
	P-2	P-2
	P-3	P-3
	P-4	P-4
	P-5	P-5
D-6	P-1	
D-8	P-1	
	P-2	
	P-3	
	P-4	
	P-5	P-1
	P-6	
D-9	P-1	
	P-2	P-3
	P-3	
	P-4	
	P-5	P-1
	P-6	
	P-7	
	P-8	
	P-9	P-2
	P-10	
	P-11	P-4
	P-12	
	P-13	
	P-14	
	P-15	
	P-16	
	P-17	
	P-18	P-3
	P-19	P-1
	P-20	P-2
C-10	P-1	
	P-2	
	P-3	
	P-4	
	P-5	
	P-6	
	P-7	
	P-1	
	P-2	
	P-3	
	P-4	
	P-5	
	P-6	P-3
	P-7	
	P-8	
	P-9	
	P-10	
D-10	P-11	P-5
	P-12	P-6
	P-13	
	P-14	
	P-15	
	P-16	
	P-17	
	P-18	P-8
	P-19	P-7
	P-20	
	P-21	

	新番号	旧番号
D-10	P-22	
	P-23	P-10
	P-24	P-12
	P-25	P-11
	P-26	P-1・2
	P-27	
	P-28	
	P-29	
	P-30	
C-11	P-1	P-4
	P-2	P-5
	P-3	P-6
	P-4	P-7
	P-5	P-2
	P-6	P-1
	P-1	
	P-2	C-11 P-3
	P-3	P-22
	P-4	P-26
	P-5	P-28
	P-6	P-27
	P-7	P-30
	P-8	P-29
	P-9	P-11
	P-10	P-30
	P-11	P-7
	P-12	P-8
	P-13	P-10
	P-14	P-9
	P-15	P-14
	P-16	P-31
	P-17	P-12
	P-18	P-13
	P-19	P-24
	P-20	P-32
	P-21	P-23
	P-22	P-15
	P-23	P-16
	P-24	P-17
D-11	P-25	P-19
	P-26	P-18
	P-27	P-33
	P-28	P-20
	P-29	P-21
	P-30	P-34
	P-31	P-35
	P-32	P-25
	P-33	P-37
	P-34	P-38
	P-35	P-36
	P-36	P-39
	P-37	P-41
	P-38	P-42
	P-39	P-40
	P-40	P-45
	P-41	P-44
	P-42	P-45
	P-43	P-6
	P-44	P-5
	P-45	P-3
	P-46	P-2
	P-47	P-1
	P-48	P-4
	P-49	P-46
	P-50	P-47
C-12	P-1	P-3
	P-2	P-4
	P-3	P-5
	P-4	P-6
	P-5	P-1
	P-6	P-2
	P-7	P-9
	P-8	P-8
	P-9	P-7
D-12	P-1	P-8
	P-2	P-7
	P-3	P-5
	P-4	P-6

	新番号	旧番号
D-12	P-5	P-2
	P-6	P-1
	P-7	P-3
	P-8	
	P-9	P-4
	P-10	
	P-11	P-5
	P-12	
	P-13	
	P-14	
	P-15	
	P-16	P-9
	P-17	
	P-18	
	P-19	P-10
	P-20	
	P-21	P-11
	P-22	
	P-23	
	P-24	
C-13	P-1	
	P-2	
	P-3	
	P-4	
	P-5	
	P-6	
	P-7	
	P-8	
	P-9	
	P-10	
	P-11	
	P-12	
	P-13	
	P-14	P-1
	P-15	
	P-16	
	P-17	
	P-18	
	P-19	
D-13	P-1	
	P-2	P-1
	P-3	
	P-4	
	P-5	
	P-6	
	P-7	
C-14	P-1	
	P-2	
	P-3	
	P-4	
	P-5	
	P-6	
	P-7	
	P-8	
	P-9	
	P-10	
	P-11	
D-14	P-1	
	P-2	
	P-3	
	P-4	
	P-5	
	P-1	
	P-2	P-1
	P-3	
	P-4	
C-15	P-5	
	P-6	
	P-7	
	P-8	
	P-9	
C-16	P-1	P-1
	P-2	P-2
C-17	P-1	P-1
	P-2	P-2
	P-3	P-3
C-19	P-1	
C-20	P-1	

V まとめ

森脇遺跡は、深谷市大字矢島地内に所在する自然堤防上に位置している。妻沼低地において、森脇遺跡周辺の発掘調査例は数少なく、国道17号深谷バイパスや上武道路の建設に伴う事例が主なものであった。この点については、森脇遺跡ののる自然堤防についても同様であった。従来この遺跡は、№60—135遺跡として登録されてはいたが、未調査のため、固有名詞としての遺跡名をもたないといった状況であった。そして森脇遺跡周辺には、遺跡として認識・登録されて入るものの、遺跡名をもたないものが現在においてもなお少なくない。

そういった意味で今回、森脇遺跡の発掘調査が行われたということは、大仰な表現をするならば、この地域に小さくはあるが調査のメスが入ったことになる。

発掘調査の結果、平安時代の住居跡12軒、平安時代～中・近世にかけての溝跡13条、中世の井戸跡4基のほか、土壙36基などが確認された。

この12軒の住居跡は、調査範囲が小さいため、ほぼ全体のプランが把握できたのは僅かに1軒（第11号住居跡のみであり、煙出し部分の一部が調査区域外に続いている第9号住居跡と合わせても2軒しかないという状況であった。

これらの住居跡のうち、カマドが検出されたのは6軒で、内訳は北カマド2軒（第1・3号住居跡）、東カマド4軒（第2・9・11・12号住居跡）である。

第1号住居跡のカマド方位はN-30°-Wを指す。煙道部は強く被熱していた。天井部は崩落しており、ソデ部はほとんど失われた状態であった。なお、遺物の多くはカマド周辺からの出土である。

第2号住居跡のカマド方位はN-54°-E指す。燃焼部から煙道部にかけては強く被熱していた。また、天井部とソデ部は失われていた。第3号住居跡本体の主軸方位はN-6°-Wであるが、コーナー部分に位置するカマドの方位はN-24°-Eを指していた。箱状を呈する燃焼部から煙道部にかけては強く被熱していた。天井部とソデ部は失われていた。構造第9号住居跡のカマド方位はS-83°-Eを指す。煙出し部と天井部が遺存しているほか、ソデ部も僅かではあるものの残されており、いずれの部位も強く被熱していた。

なお燃焼部には、支脚として白然石（第26図34）が自立しており、その上にはロクロ土師器の高台付埦（同図17）が伏せた状態で据えられていた。この土器は、カマドに掛けられた土器の器高に応じて、高さを調節する役目を果たしたものと推測される。

第11号住居跡のカマド方位は、S-89°-Eを指す。天井部は崩落していたが、ソデ部は僅かではあるが遺存していた。燃焼部から煙道部にかけては、強く被熱していた。燃焼部の奥には、自然石(第28図10)が自立しており、その上にはロクロ土師器の小皿(同図6）が伏せた状態で据えられていた。本例については、第9号住居跡のカマド例と同様の意味合いを有するものであろうか。その場合、この自然石は支脚であり、この位置が掛け口ということになるが、短い煙出し部の奥壁面と、位置的に極めて接近していることになる。この点については、カマドの構造を検討する際に、参考となる知見といえよう。

第12号住居跡のカマドの方位はN-87°-Eを指す。天井部は崩落し、ソデ部は遺存していなかったが、燃焼部・煙道部・煙出し部の壁面には、強い被熱の痕跡が認められた。燃焼部内の南側壁面際には、白然石（第30図10）が残されていたが、カマドの構築材と推測される。

第1～4・6・9・11・12号住居跡からは、ロクロ土師器の高台付埦、土師器の甕や羽釜などが出土している。これらの住居跡のうち第2～4・9・11・12号住居跡には、ロクロ土師器の小皿が少数ではあるが含まれている。なおこの小皿のうち、底部の遺存しているものについては、いずれも底部糸切り離

しであった。

こうした資料の主な例として、上里町田中前遺跡（市川　1977）、児玉町阿知越遺跡（鈴木　1983）、大大寄遺跡（富田　2000）などが挙げられるが、遺跡例は他の時期の遺跡に較べ決して豊富といえるものではない。

今回、森脇遺跡から出土した土師器やロクロ土師器ほかの遺物の時期については、10世紀の中頃から後半に納まるものと考えられるが、第12号住居跡の資料については、共伴した須恵器の特徴からみて、他の住居跡の資料よりも若干先行すると推測される。

関東地方では、「須恵器生産を一つの機軸とし須恵器と土師器が食膳・煮炊・貯蔵の各機能を分掌しあう、いわば古代的な土器生産・供給体制が比較的強固に維持・展開されてきた。しかし、須恵器生産の衰退化が顕在化する10世紀中葉を境に、各地の土器は大きく様相を変えていく」（浅野・服部1995）とされる。

今回、森脇遺跡の発掘調査において検出された遺物は、まさにこの時期に該当するものであり、当該期における様相を検討する上で、一助となる資料といえよう。

引用・参考文献

浅野晴樹・服部実喜　1995「3．関東」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

磯崎　一　1989　「新田裏・明戸東・原遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第85集

市川　修　1977『田中前遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書

岩瀬　譲　1991『樋詰・砂田前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第102集

岩瀬　譲　1995『前・居立』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第151集

大屋道則　1994『清水上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第152集

鈴持和夫　1995『森下・戸森松原・起会』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第148集

佐藤廉二・渡辺清志　1998『砂田前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第198集

鈴木孝之　1996『深谷城跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第176集

富田和夫　2000『大寄Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第268集

永井いずみ　「Ⅴ結語　1．出土土器の様相」『大寄遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集

中村倉司　1999『岡部条里/戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第217集

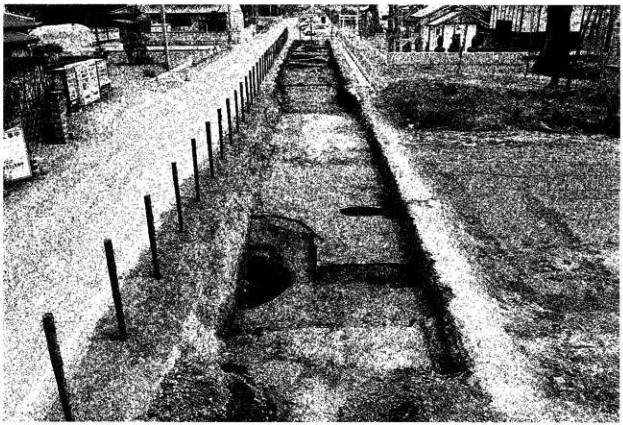
中山　浩彦　1995『宮ヶ谷戸/根岸/八日市/城西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第172集

西口正純　1994『矢島南遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第149集

深谷市教育委員会　2006「花小路遺跡」現地説明会資料

福田　聖　2002『大寄Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第280集

写 真 图 版



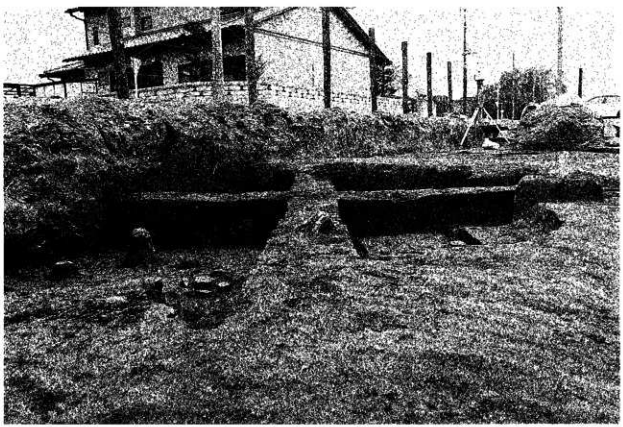
1 調査区全景（北から）

2 調査区全景（南から）

1　調査区全景（北から）

2　調査区全景（南から）

1 調査区北端（南から）



2 第1号住居跡（土層断面）

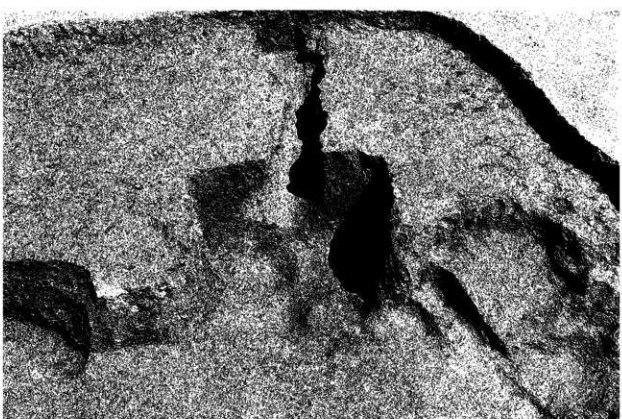
1　第1号住居跡（遺物出土状況）

2　第1号住居跡（完掘）

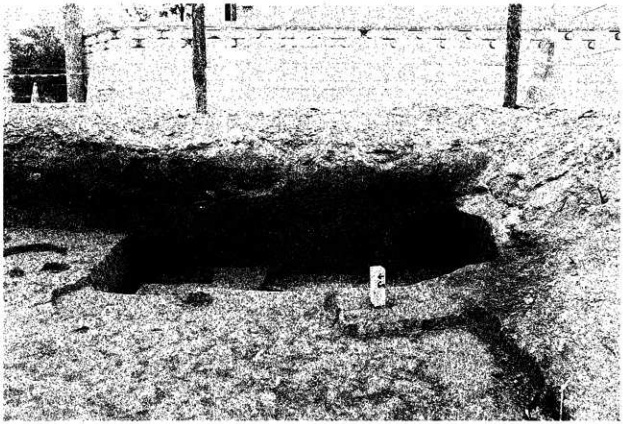
1 第2号住居跡（遺物出土状況）

2 第2号住居跡（完掘）

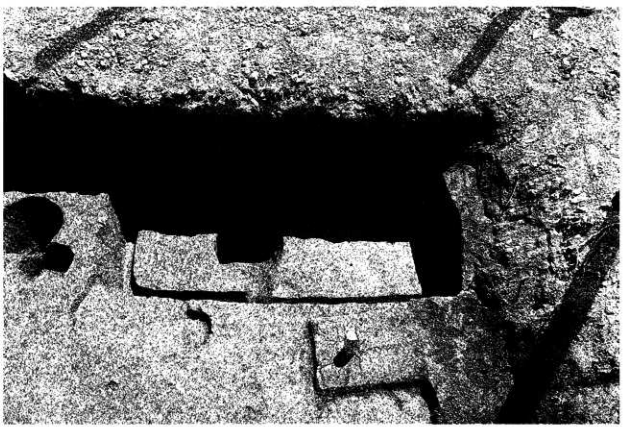
1　第3(手前)・4号住居跡



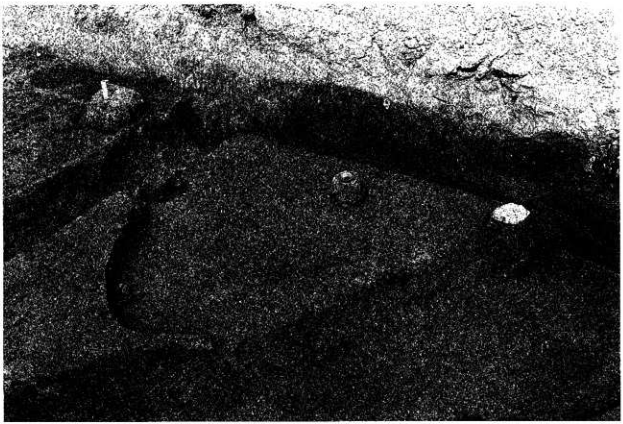
2　第3号住居跡カマド



1 第4号住居跡



2 第5号住居跡

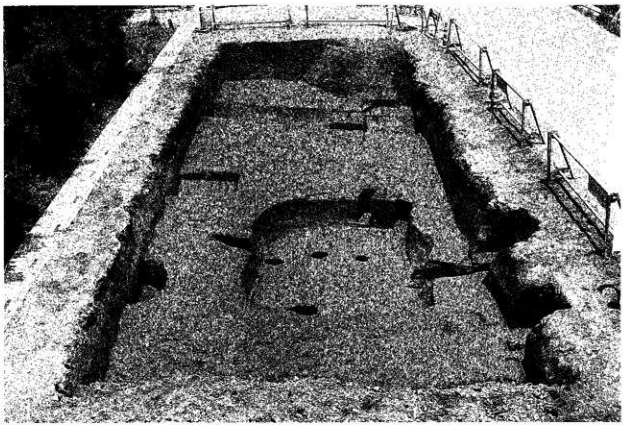


1　第6号住居跡（遺物出土状況）

2　第7号住居跡、第6・7・8・11・12号土坑

1 第7号住居跡（遺物出土状況）

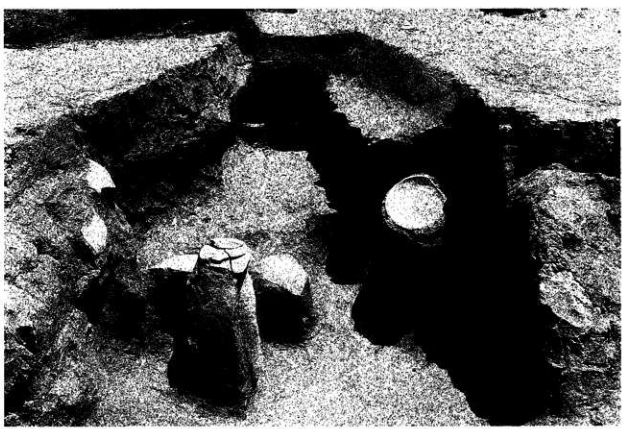
2 第8号住居跡



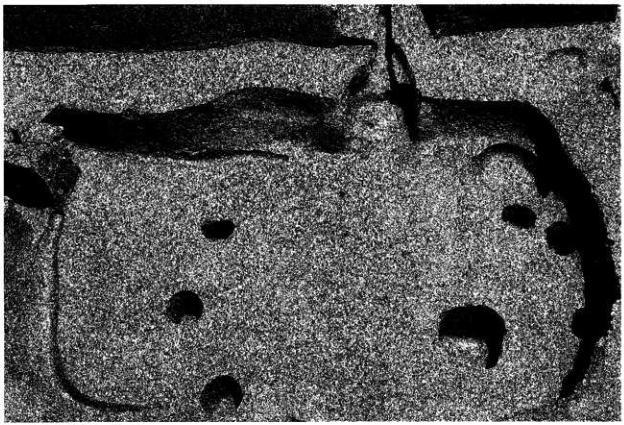
1　第9号住居跡（手前）、第9・10号土坑　第9号溝跡（奥）

2　第9号住居跡（遺物出土状況）

1　第９号住居跡（遺物出土状況）

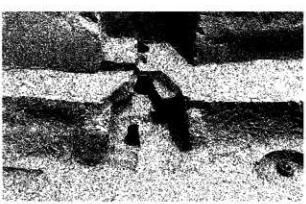


2　第９号住居跡（カマド内遺物出土状況）



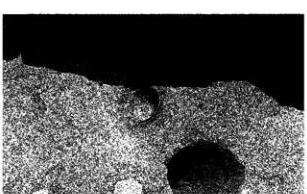
1　第9号住居跡（完掘）

2　第9号住居跡（カマド内遺物出土状況）

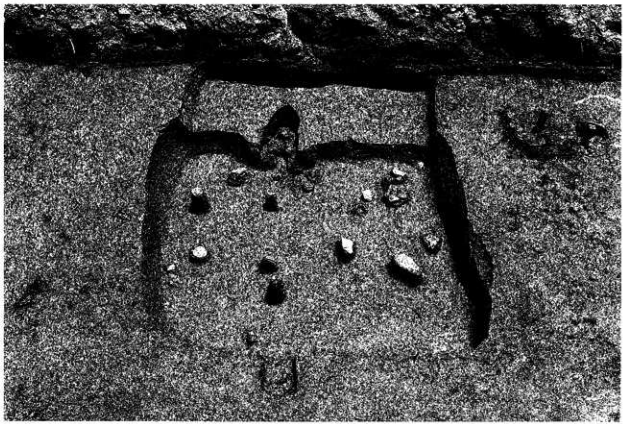


3　第9号住居跡カマド

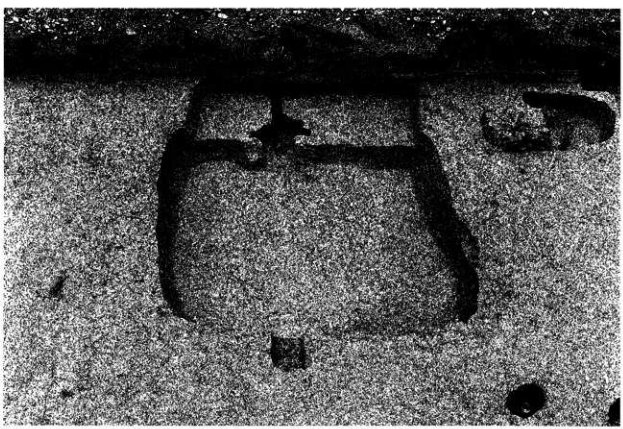
4　第9号住居跡（遺物出土状況）



5　第9号住居跡（遺物出土状況）



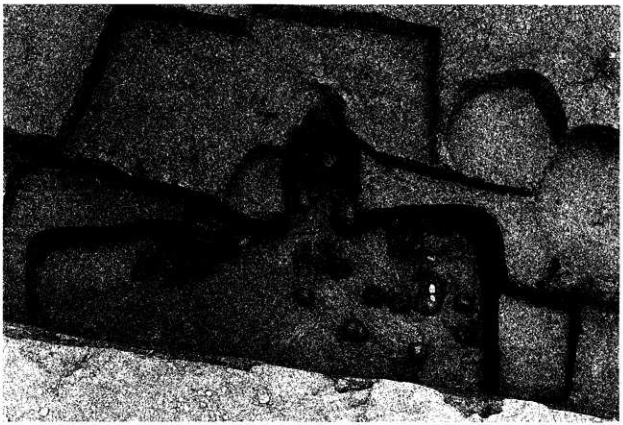
1　第11号住居跡（遺物出土状況）



2　第11号住居跡（完掘）

1　第11号住居跡（カマド内遺物出土状況）

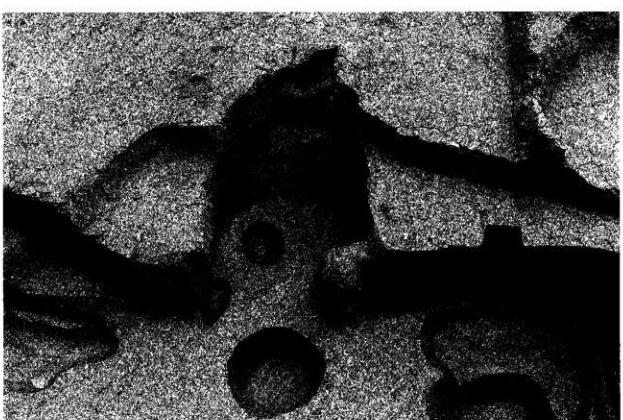
2　第11号住居跡カマド



1　第12号住居跡（遺物出土状況）

2　第12号住居跡（完掘）

1　第12号住居跡（遺物出土状況）

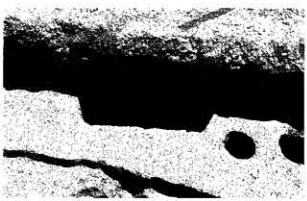


2　第12号住居跡（完掘）

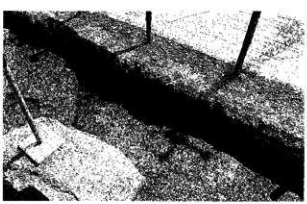
1　第6号住居跡（遺物出土状況）

2　第6号住居跡（遺物出土状況）

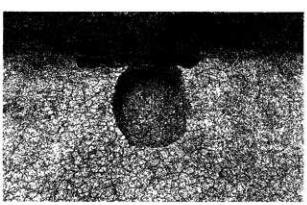
3　第11号住居跡（遺物出土状況）



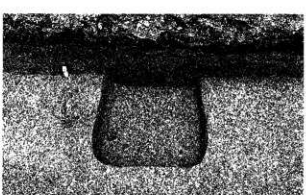
4　第1号土坑



5　第2号土坑

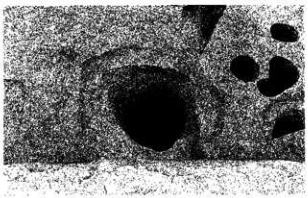


6　第4号土坑



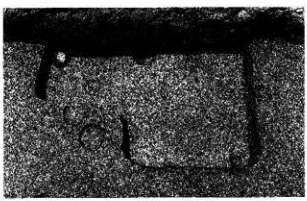
7　第10号土坑

8　第13号土坑

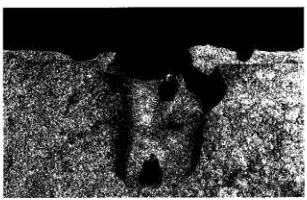


1　第14号土坑

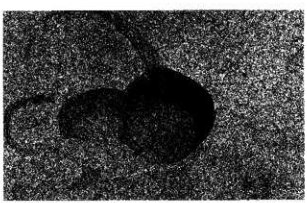
2　第16号土坑



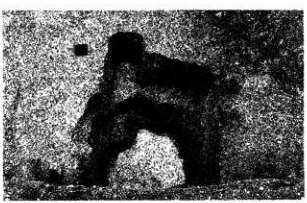
3　第21号土坑



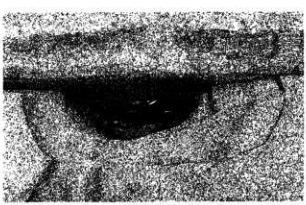
4　第22号土坑、C14グリッドP11



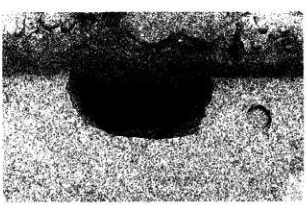
5　第28・29号土坑



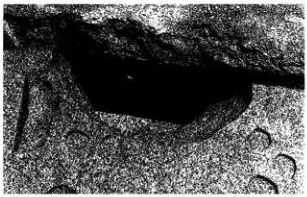
6　第35号土坑（完掘）



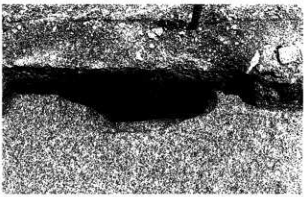
7　第1号井戸跡



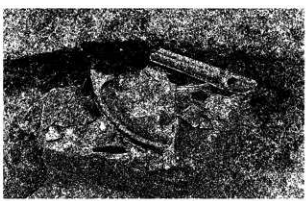
8　第2号井戸跡



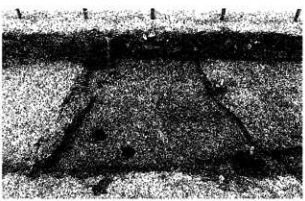
1 第3号井戸跡



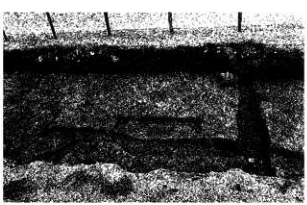
2 第4号井戸跡



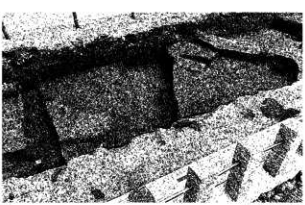
3 第1号溝跡（遺物出土状況）



4 第2号溝跡



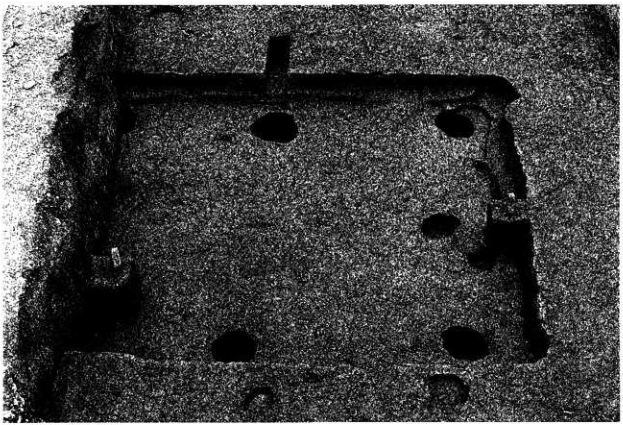
5 第3・4・5号溝跡



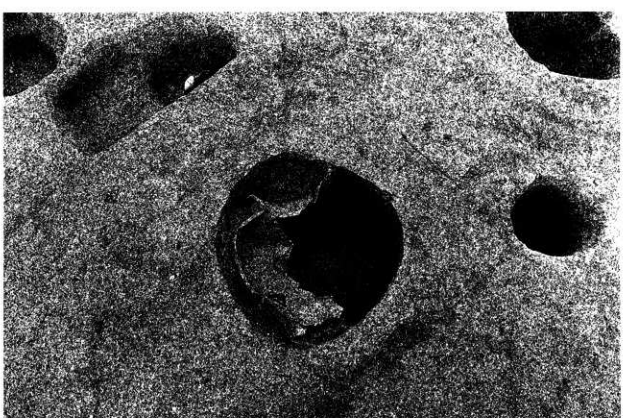
6 第6号溝跡

7 第8号溝跡

8 第10号溝跡



1　第1号竪穴状遺構



2　D-10グリッドP26